
ポケットモンスター～TのちJ～

木綿豆腐

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ポケットモンスター〜Tのち〜

【Nコード】

N0506P

【作者名】

木綿豆腐

【あらすじ】

普通の高校生がポケモンの世界にトリップ！
ポケモンの言葉が解るといふ不思議な力を持って、自分に何が起きたのか探る旅へと出ます…。

（この小説の主人公は、ポケモンの言葉が解るといふ設定となっています。そういうのが「許せない」という方は、バックを推奨

します

あと、ポケモンが覚えている技が四つを越えている可能性もありますので、それが苦手な方もバックを推奨します)

ブローグ

「……え、ここどこだよ？」

眼が覚めると、何故か草原で寝ていました。

いや待て、おかしい。確か部屋のベッドにダイブして寝てたはずなんだが……。

……まさか、夢遊病ってヤツか？

「マジか、よ？」

手で自分の額に触れて後悔しようとしたのだが、それよりも手首より腕の方、着ている服装に違和感があった。白をメインとして袖に黒の水玉模様が散らばっているジャージらしきものを羽織っており、インナーに水色に近い青い服を着ている。更にズボンを見ると、迷彩服のような模様をしたカーゴパンツを履いていた。

……あれ、ボクこんな服持っていないぞ？ まさか、寝ている間に盗んだ、のか？

「うそ、」

犯罪者じゃん、と言おうとしたのだが、鳥型の影が見えたので上空を見た。

「……うそ、」

そこには、茶色と白色の身体で、もうそれは昔からやってるゲーム

画面で見たことのある、ポツポであった。
まさか、

「ここって、ポケモンの世界なのか？」

……ああ、これは夢だ。確かに「行けたらいいなあ」とか思った
こともあったし、そういう夢を見たこともあるから。うん、寝よう。
兎に角寝よう。寝たらきっと夢も覚めるさ。

第一話 原っぱ

——十分後

「はあ……」

寝ようとすればするほど、意識してしまい寝れなかった。なので、自分の頬をつねって夢かどうか試してみたが、結果は痛かった。いや、夢だったら「頬をつねる」って発想するほど冷静じゃないか。兎にも角にも、ボクは何故かポケットモンスター、縮めてポケモンの世界に来てしまったようだ。お、ボクここまで冷静沈着な奴だったか？

ともかく、前向きに捉えていこうと決意すると、まあ、いろんな物が目に映るものである。

例えば、近くに落ちているショルダーバッグとか。これには見覚えがある、というか、あっちの世界で中学時代に使ってた。

「なんでこのバッグがあるのさ」　もしかしたら他の人の落とし物と思ったが、バッグ外側の底面を見ると「佐々木 光（コウ）」とボクの名前が書かれていた。なんでこんなところに書いたんだよ昔の自分。

「よし、中身確認してみるか」

そう言ってバッグの中身をその場にぶちまけてみると、「きずぐすり」「なんでもなおし」が5個ずつ、「モンスターボール」が2つ入っていた。え、中身と重さが釣り合っていないような……もしか

してこれが噂の四次元バッグなのか？ いや、最近のゲームじゃ無限大に持てるからな。

そんなことを思っていると、バッグから（ぶちまけて）出したモンスターボールの1つが揺れていた。あれ、何か入ってんな。

「確か、ボール投げりゃ出てくるんだよな」

誰に確認するわけでもなく呟いてからモンスターボールを投げた。するとボールは開いて赤い光を出してからボクの手へと戻ってきた。ナイスキャッチ。そして赤い光はだんだんと形を変えていき、赤い光が晴れると、

「あ、これって確か、ポチエナだよな？」

灰色の体毛に黒く染まっているところがある子犬のような姿をした、ポチエナであった。

……意外とカワイイな。ハウエン地方版のゲームでグラエナまで育ててたけど、そこまでカワイイとは思っていなかった。実物はかつこカワイイ生き物なんだな。

『……おい人間』

そんなことを考えていると、何処からか少年のような声が聞こえた。

声が出た方向を見てみると、ポチエナしか見えない。

……左右確認、前後確認、上下確認。ボクとポチエナ以外に誰もいない。……いやいや、ポチエナが喋れるはずが

『カワイイって言うてるけどな、俺はれっきとした雄だ！』

あるのかよ。

「あー、それじゃカワイイけどそれ以上にカッコいい、でどうだ？」

『だからカワイイって、さっきよりかはマシだけどな、……は？』

うん、どうやらポチエナも違和感に気づいたみたいだ。

「なあ、ポチエナ。これはボクがすごいのか？ それとも君がすごいのか？」

『明らかにお前だろが』

そう言っただけでジト目でこっちを見始めた。いや、ボクにも何がなんだか分からないんだ。どうしてこの世界にトリップしたかも分かってない状態だからな。

『……で、俺をいつ捕まえたんだ』

「え、多分だけどボクじゃないと思う」

そう答えると、ドスを利かせるように『はあ！？』と言われてしまった。しかしながら、かつこカワイイ容姿のためにあまり威力はないが。

「KYなこと言うけどさ、ポチエナの嗅覚でどっちの方向に町があるか分からないかな？」

『……めんどくせえな』

そう言いつつも、鼻を使ってくれている。……でも、そう簡単にわかるものなのか？ 言い出しっぺはボクだけどさ。

あ、風の吹く向きが変わった。

『……ん、いまあっちのほうから人間たちの匂いがする』

「あつちか、それじゃ行つてくるな」

ボクはポチエナくんが向いた方向、おそらく街がある方向に歩いていくことにした。

会話をしていたときに気づいたのだが、どうやらこのポチエナ、人間に敵意があるようだ。なので、ボクは彼を逃がすことにした。い、んだが、置いていけば逃がしたことになるよな？

『おい、待てよ！』

すると、ボクの進む先へ先回りしたポチエナくんが言った。脚はええ。

『なあ、俺以外にもちのヤツがないみたいだけど、大丈夫なのか？』

……そういえば、「ポケモン持っていないのに草むらに入っちゃイカーン！」っていう世界だ。もし野生のポケモンに遭遇してしまつたら逃走するか襲われて良くて怪我をするかもしれない。うわ、怖いなこの世界。

『だからな、俺はお前についてってやる。いや、俺をお前のもちにしてくれ』

……なんだろうか、ボクの中での「ポチエナ」というポケモンがだんだんとカッコいいイメージになってきたんだけど。

「だけど、お前は人間嫌いなんじゃないのか、ポチエナ？」
『……まあ、そうだけどな。でも、俺の言葉を分かるお前についていきたいんだよ。って、同じこと言わせるな』

ボクの足元にまで近づいていたポチエナくんはボクの靴の上に前脚を乗せた。えと、なんか誓いをしてるみたいだ。

「それじゃ、宜しく頼むよ」

『おう』

こうして、ボクはポチエナをもちに加えて、街へと歩いていくことにした。

第一話 原っぱ（後書き）

はい、てなわけで無事に書けまし

コウ「文章構成おかしいけどな」

…うわあ、痛い。

コウ「つか、なんで一人称が『ボク』なんだ？」

ああ、僕の趣味だ（回線が途切れました）

第二話 始まりの町（前書き）

プロローグ、一話読んでくださって、ありがとうございます！

コウ「いや、お気に入りしてくれた人が居て良かったな」

…うあああ！ヘタレ過ぎてなんか恥ずかしくなってきたああああ
！（赤面）

コウ「…あー、お気に入りをしてくれてありがとうございます。それでは本編をどうぞ」

第二話 始まりの町

ボクはポチエナを連れて街まで歩いている。その途中でポツポヤら野生のポケモンと遭遇したときにポチエナが戦ってくれるのだが、

「……強いんだな」

『そうか?』

出てきた野生の子を倒していた。「かみつく」を覚えているから、そこまでレベルは低くない……よな。どれぐらいのレベルで覚えるのかなんて忘れし。

そういやポツポが出てくるってことは、ここはカントーかジョウト地方ってことだろうか？ そうすると、どこでポチエナは捕まったのだろうか？ ……まあ、いいや。とりあえずは街に着いてからだ。

考えを置いておく事にして、遠くを眺めることにした。

「お、見えてきた」

やっと街、というよりも町へと辿り着いた。

「…うつそお」

辿り着いたボクはポチエナをだっこして近くにある看板へと歩いていた。『放せ!』と言って腕の中で暴れてきたけどスルー。

看板には「ここは マサラ タウン」という文字から始まる文章が書かれていた。

「…うつそお」

『…どうしたんだよ』

ということは、ここはカントー地方のようだ。おお、始まりの町。ゲーム画面で見るマサラタウンは民家の数がタウンというよりビレッジであつたが、流石に民家がポツポツとある。さらに端から端まで多分結構な距離がある。

それにしても、ボクらは東から来たのか西から来たのか分からないんだけど。思つたら右側に海が見えた。

「よし、マサラタウンってことはあの人がいる」

『なんだ、知り合いでもいるのか？』

「いや、有名人」

『はあ？』

ポケモン研究の権力者でもあり、ポケモン川柳でも有名なオーキド博士。あの人に聞けば何か解るかもしれない。

……でも、信じてもらえるだろうか。「自分は異世界から来ました」なんて言ったらちよつと狂つてると思われるだろう。ボクだってそんなこと言われたらまず信じない。

流石にオーキド博士はそんな人とは思わないから大丈夫だが、有名な博士だから他のところ、最悪で他の地方に行つてゐるかもしれないし。

まあ、当たつて碎ける勢いでいけばいいか。

「ちよつと君、手伝つてくれないかな！？」

よしオーキド研究所訪ねてみようと思つたというタイミングで後ろから話しかけられた。

後ろを振り向いて呼んだ人を見ると白衣を着てメガネを掛けている、研究員姿の男性が立っていた。あ、前髪に若白髪があるな。

「頼みって言うのはね、オーキド研究所で預かっていたヒトカゲが脱走しちゃってね、君も探すの手伝ってね！ それじゃ、道路のほうを探してくるから他のところを宜しくね！！」

そう言って走り去っていった。なんだあのマシンガン Took 的な喋りは。こっちの返答を全く聞かずに立ち去って行くとは。

『……なんか、面倒なことに巻き込まれたな』

同情してくれてありがとう。

「仕方ない、探すの手伝うとするか。」

どうせ研究所に行ったって、ヒトカゲ捜しにてんやわんやで受け付けてくれないだろう。結局、手伝われることになるだろうし。確か、マシンガントーカーは道路のほうに行ったんだよな。それじゃ、ボクらは反対側を捜すか。

『……あと、早く降ろせ』

「おかしい」

『なにがだよ』

「体力が、落ちてる」

反対側、海の方、まで歩いているんだけど、疲れてきた。別に距

離的には短いはずだが、疲れが出てきた。

おかしいな、高校に入ってからちゃんと運動してるハズだ。主に登下校。あれかな、テンパってたので気づかないうちに体力消耗しちゃったんだろうか。

『……お前、大丈夫かよ』

「うん、大丈夫」

心配してくれたのか、ボクの足元まで戻ってきたポチエナに答えつつ、ヒトカゲを捜している。

それにしても、なかなか見つからないな。もう海岸近くまで来ちゃったぞ。まさか、もうすでに見つかったのか。

『なあ、ヒトカゲって夕日のような色だよな？』

突然、ポチエナくんが当たり前のことを言い始めた。

『それで、尻尾に炎が燃えてるんだよな』

「なあポチエナ、どうしたのさ？」

『あそこにそれらしいのがいるぞ』

え、と言葉が出たあと、ポチエナくんの見ている方を見ると、明らかにヒトカゲらしきのが防波堤の上で海を見下ろしていた。

……あれ、ヒトカゲって「ほのお」タイプ。空を飛ぶようになるのはリザードンに進化したらだよな。あと、尻尾の炎が消えたら大変なことになる。

……………これってヤバイよな？

そう思ったボクは急いでヒトカゲのところまで走った。もし、海にヒトカゲが落ちちゃったら、大変なことになる。いや、それ以上の被害に。

『……………、……………！』

多分、ヒトカゲの声だと思うが、遠くだからなんて言ってるのか分からない。

しかし、ほとんど近くまで走ってきて

『へえ、旅って面白そうですね！』

というヒトカゲの声でつい立ち止まってしまった。

第二話 始まりの町（後書き）

コウ「まさかカントー地方に飛ばされてたのか」

いやあ、最初にやったのが「緑」だったからねえ。結構思い出に残ってるよ。

コウ「それは良いとして、なんだあのシリアス崩壊は」

シリアスなんか書けない！以上！

第三話 オーキド研究所（前書き）

第三話出来ましたー！

コウ「いや、これ前に書き終えてただ」

それじゃ、スタート！

コウ「…聴いてねえし」

第三話 オーキド研究所

「……まさか、ドククラゲと話をしていたとは」
『ちょっと外の空気を吸おうと脱走したら、つい話込んだじゃいました』

えー、てつきり海に飛び込もうと見えていたヒトカゲは、偶然海にいたドククラゲと話していたようだ。

『つかお前、空気吸うために脱走したのかよ』
『いいじゃないですか』
『良くねーだろ』

とまあ、意外と自己中なヒトカゲである。しかも微笑みながら答えている。

『それにしても、ポケモンの言葉がわかるニンゲンっているんですね』

「あー、まあな」

その本人すななんでわかるのか謎なだけと。ってこのヒトカゲ、話を逸らそうとした？気のせいだろうか。

「とにかく、オーキド研究所に戻るつか」
『そういやそれが目的なんだよな』
『息抜きできましたし、連れてっていいですよ』

そして抱っこを微笑んで要求してきた。……もしかして、天然な自己中なのだろうか。

ボクらは抱っこされたヒトカゲの案内のもと、オーキド研究所へと辿り着いた。いざ行こうとしたが、まず研究所がどのような建物なのか知らない。アニメじゃ大きかったような気がするが、実際のところ分からない。ポチエナに呆れた目で見られたのは気づかないふりをしておいた。

「……想像以上に、おっきい建物だな」
『本当にな』

家もデカいし、庭も広い敷地である。いったい何坪あるんだ。

『さあ、早く入りましょうか』
「あ、そうだな」

ボクはヒトカゲを片腕で抱っこした状態で解放した腕でノックした。

「誰かいませんかー？」

……反応がない。

「居ないなら無理矢理入りますよー」
『何言ってるんだよ』

あ、ポチエナくんにつっこまれた。
そんな事をしていたら、内側から扉が開いた。開いた先には白衣を着たご老じ、じゃなくて、オーキド博士がいた。思っていたより背が高い。

「おや、君が抱いているのはヒトカゲじゃな？」

「さつき研究員の人に探すのを頼まれて、見つけたので連れててきました」

「おや、それはすまんかったのう。立ち話もなんじゃ、入ってきなさい。」

そう言つてオーキド博士はボクらに研究所に入るように勧めてくれた。

「では、お邪魔します」

『さつき無断で入るうとしてたヤツが言う言葉かよ』

あはは、そこは黙つててくれ。

オーキド研究所の中は紙が床一面に、機械が所狭しと置かれていて、訳でもなく意外とすつきり片付けられていた。ボク達が案内された部屋は2つの二人掛けのソファアがローテーブルを挟んで向かい合うように配置された部屋であつた。

片方のソファアに腰を降ろした博士に「座りなさい」と言われ、向かい側のソファアに座り、ヒトカゲを降ろした。

あ、そういえば頼んできた研究員の人はまだ探しているのか。哀れであるが、まあ仕方ない。

「いやはや、そのヒトカゲは今日初めて脱走されて、大変じゃつたよ」

『ただ隙を狙つていただけですけどね』

「ああ、そうですね」

勿論ボクは博士に相槌を打った。流石に此処でヒトカゲへの相槌はヤバいだろう。

「ところで、キミはワシに何か相談があるようじゃな」
「え」

どうして、とボクが言う前に

「なに、ワシに会いに訪れるトレーナーが相談をする時にする目と同じなもんでな」

と言われてしまった。

さて、そう言われてしまうと全てを話さないといけない空気になってしまった。

「……分かりました。事前に言っておきますが、嘘のような、本当に自分が体験した話です」

自分がポケモンが実在していない世界から来たこと、この世界はボクがいた世界でゲームで知られていること、気が付いたら近くの原っぱにいたこと、そして何故かポケモンの言ってることが解ることを話した。

その間博士は、真剣な顔をして「ふむ」とか「ほほう」と相づちを打っただけだった。そして話し終えたあと、

「なるほど、ビックリするような話じゃが、キミを信じよう」

と言った。

え、いま博士は「信じよう」って言った？

「ええっと、正体不明の子が言ったことを信じてくれるんですか？」
「おや、キミの目は嘘をついているように見えなかったぞ。」

なら嘘じゃないんじゃないかと笑って言ってくれた。

ヤバい、この人スゴい。さすが世界的に有名な博士である。

『……なあ』

感銘を受けていると、ポチエナが俯きながらボクを呼んだ。あれ、なんで俯いているんだ？

『お前、寂しくないのか？』

「……ああ、」

そっか、ポチエナくんは心配してくれているのか。

「確かに家族や友だちと会えなくなるから、寂しくないって言うたら嘘にはなるな」

でもな、とボクはつけ加えて、

「ポチエナが居てくれたおかげで、寂しさなんてすっかり忘れてたよ」

そう言って、ポチエナの頭を撫でた。『そうかよ』と言われてしまったが、照れているようだ。

なんかポチエナに頼りつきりだよな、ボクって。

「ところでコウよ。お主はこれからどうするんじゃない？」

「そうですね、せっかいですからこの地方を巡ろうと思います」

あのあとオーキド博士に話しかけられて、元の世界のことを聞かれた。

どうやらポケモンが存在しない世界に興味があるようだ。

「ポチエナ、ボクについてきてくれる？」

『はっ、当たり前のことを聞くなよ』

わあ、ニヒルな顔出来るのか。

「うむ、良い答えじゃ。今日はもう遅いし泊まっていきなさい」

「あ、ありがとうございます！」

ヤッバイ、この人良い人すぎる！！

「それにしても、オーキド博士って背が高いんですね」

「いやいや、167cmじゃから低いほうじゃよ」

へえ、167か…。

え、167？

あれ？ ボクより背が低い？

じゃあ、なんでボクは見上げているんだ？

第三話 オーキド研究所（後書き）

コウ「なんだよ最後のは」

いや、第四話で分かるよ。あと、君がポチエナくんにつけた名前とかもね。

。。。「お、やっと出番…っで、なんだよこれ」

ネタバレ防止の定番、丸d（噛みつく）

コウ（カンペ見つつ）「えーと、第四話も楽しみに待ってるよ?」

第四話 旅立ち（前書き）

はい、第四話です！

コウ「なあ、いま深夜だぞ」

うん、めっちゃ眠い（笑）

コウ「…で、やっと旅立ちか」

うん、あとパートナーのポチエナくんの名前が決まっちゃうよ！！

コウ「それでは、第四話をどうぞ」

第四話 旅立ち

何かの鳥の鳴き声で目が覚めた。

今までの夢だったかと思い、体を起こして寝ぼけ眼で部屋を見回したが、自分の部屋ではなかった。

「夢じゃ、ないのか」

ボクはふう、と、よく分からないため息をした。

昨日は博士に勧められて泊まることになってしまった。そこでいろいろと解ったことがあった。

例えば、この世界はゲーム沿いのポケモン世界である事。

これはオーキド博士の有名な孫が一時的にチャンピオンになったが、すぐあとに挑戦した幼なじみに負けてしまったという話から分かった。

そして、時代的には「HGSS」から3年後のようだ。これは話が長くなるのでカット。

「でも背が縮んでいるとか、有り得ないだろ」

そう、これは博士の身長を知ったあと、博士に頼んで身長を測ってもらった。すると元々あったのより10cm近くも、酷く言えば、モヤシ時代にまで縮んでいた。ショックが大きくて落ち込んだのはここだけの話だ。

「あら、コウ君起きたの？朝ご飯できてるから、食べて行ってね」

「あ、はい」

いま、扉の向こうからボクを呼びに来たのはナナミさん。オーキド博士のお孫さんである。

はつきり言つて美人の部類に入る人であつた。

『……おお、はえーな』

くあ、と欠伸をしたポチエナは、ボクの足元まで来た。顔に「眠い」と書いたような状態で。

「……モンスターボールの中で寝てていいけど？」

『……あー、そうか』

そう言われ、ボクはポチエナくんをボールに入れた。なんだろう、この便利な道具。

ボールを博士からもらったベルトに装着して、朝ご飯を食べるため、部屋から出た。ちなみに服装は昨日と全く変わっていない。

「そうじゃコウ君。旅に必要な道具は揃えておいたからとりに来てくれんか」

「げふっ！」

朝ご飯のサンドイッチを食べていたので咽せてしまった。「あらあら」とナナミさんが水を持ってきてくれた。ああ、なんとか落ち着いた。まさかそこまでしてくれとは。

「なんかそこまでしてもらつと、申し訳ないですね」
「いやいや、そんな気にせんでもいいぞ」

卑怯かな、ボクはそういわれると気にしなくなる性格である。でも、社交辞令くらいは気が利く人間だと熟知している。

「それじゃ、ありがたく頂きます」

「そうかそうか。道具は研究所のほうにおいてあるから、取りに来てくれ」

そう言つて、博士は食器を台所へと持って行って、研究所へと急いでいった。

それから数分後、朝食のサンドイッチも食べ終わったところで、ポチエナくんはパツチリと目覚めたらしく、ボールから出てきて、ナナミさんが用意してくれたポケモンフーズを食べ始めていた。あれ、簡単に開閉しちゃって良いのだろうか？

……問題が起きてないから、いいんだろうな。

『それで、あのジイさんのところに行くんだよな』

「ん、聞こえてたのか？」

『まあな』

おいおい、プライバシーすらボール越しで筒抜けなのか。

それにしても、本当にポケモンの世界に来たんだよな、ボク。

ここは画面越しのゲームの世界ではなく、実体もあれば息もしている。ポケモンバトルのとき、ちゃんと指示を出せれるかと聞かれたら、まずは無理だろうな。なんとかなればいいけど。

……なんか最近、投げやりにきてる気がするのは気のせいだろうか。

『おい、メシ食い終わったし、とつとと行くぞ』

「もう少し、ゆっくり味わって食べるよ」

バッグを持って、ポチエナさんと研究所の一室へ行ってみると、寝袋やらポケモンフーズやら人間用携帯食料があった。

「バッグの中に、こんなに入らないでしょ」と呟いてしまったが、驚いたことに用意してくれたものの全部が入ってしまった。どんな原理で出来ているんだ、このバッグは。

もっと言えば、オーキド博士。なんか赤くて高性能っぽい機械があるんですけど。

「おお、それはポケモン図鑑じゃよ。シンオウ地方のポケモンのデータも入ってるから役立つと思うぞ」

あ、ポケモン図鑑を完成してくれて言う事じゃないのであれば、貰っておくか。……でも、主人公たちはいきなり頼まれるんだし、驚くだろうな。それを完成させるのも凄いいけど。

ピピピー

「おや、メールじゃな」

博士から図鑑の使い方を一通り教えてもらったところで、博士のパソコンがメール着信を知らせる機械音が流れた。ポチエナは音にビックリして、尻尾が逆立って面白かった。

「おお、レッドからじゃ」

「え!?!」

ボクは驚いてしまったが、ここはボクが知っている時間帯ではない。シロガネやまから下山していたっておかしうはないだろう。

博士がボクに手招きをして、メールの内容を見せてくれた。

達成、バトルタワー50

レッド

たったこれだけであつた。

「内容、少ないですね」

「簡潔な文章で送ってくる。それがレッドなんじゃよ」

旅に出る前はもっと無邪気じゃつたのにのう……、と博士は呟いていた。

しかし、直ぐに落ち込みモードから復活してボクを見た。復活はええ。

「そういえばコウ君。君はポチエナに名前をつけないのかの？」

「ああ、実は考えていましたよ」

『は？』

実は昨日から、ポチエナくんにつける名前を考えていたのだ。ゲームのときでもニックネームを付けていて、シンオウ地方のポケモンの種族名を覚えられなかったことがあつた。まあ、いい思い出だけだ。

「狼煙（ノロシ）って名前はどうかかな？」

『狼煙、か……。』

うーん、駄目、かな。流石にデルビルあたりにつけるような名前だからなあ。

『いいぜ、狼煙で。お前らしいネーミングセンスだし』

「うん、さり気なくヒドいこと言われたような気がするんだが」

『気のせいだろ』

「……腑に落ちないけど、まあいい。狼煙、一緒に頑張って行こうな」

『ああ』

『あれ、昨日のニンゲンさんじゃないですか』

ふと声がしたドアの方を見ると、昨日会ったヒトカゲがドアの間から身乗り出していた。

「あれ、ヒトカゲどうしたんだ？」

『いえ、てつきりもう旅に出たと思いました』

「そろそろ出る頃だが」

『そう、ですか』

そう言っつて、シュンとしてしまうヒトカゲ。え、なんかボクヒドいこと言っただけ？

……特にないような。

「コウ君、更にワシからの餞別じゃ」

考えにふけていると、博士がモンスターボールをくれた。え、何ですかコレ。

「どうやら、あのヒトカゲは君と旅に出たいようじゃ。ヒトカゲを受け取ってくれんかのう？」

マジですか

「えーと、ヒトカゲはボクと旅したいのか？」

『まあ、旅してみたいですし、ニンゲンさんと一緒なら楽しそうですし』

ああ、だからシユンとしたのか。自己中と思ったけど、そういう部分もあるんだな。

「狼煙、どうしようか」

『連れて行く気満々な顔で言うな。まあ、いいんじゃないの。』

あれ、顔に出てた？

「では博士。ありがたくヒトカゲを受け取ります」

よし、トキワシティに着くまでにヒトカゲくんへの名前を考えるとかない。

第四話 旅立ち（後書き）

コウ「マジでネーミングセンスの欠片がねーな」

うん、自覚してる。

狼煙「尚更たちが悪いな」

まあ、今回の話でヒトカゲも手持ちに加わったし、いい感じだね！

コウ「明日、というより今日学校あるんだろ、寝ろ」

…はい。次話はトキワシティです。

第五話 トキワで休憩（前書き）

さっきから、お腹がグーグーなってます。

コウ「先に朝ご飯食べとけよ」

うん、次からそうするわー。えーと、第五話のはつきり言って「繋ぎ」のようなものです。重要なことといえば、ヒトカゲのNNが決定します。そしてヒトカゲの本性が分かります。

狼煙『話なげえぞ』

ヒトカゲ『第五話、スタートです』

第五話 トキワで休憩

『……おい、大丈夫かよ?』

「なんとか、な」

博士からヒトカゲを貰い、ボク達はトキワシティへ向かって歩いている。そのヒトカゲはボールの中でお休みしているけれども。

狼煙はマサラタウンから一緒に歩いてもらっている。結構歩いているのに、出てきた野生のポケモンと闘ってくれている。

そうか、実は狼煙の性格は頑張り屋なのか。

……いや、集中集中!

「せっかく、高校で、体力、つけたのにな!」

そう、今の自分の体型はモヤシ体型で、あまり筋肉がついていないために少し疲れ始めてきたのだ。

ゲームじゃマサラトキワ間はあまり距離はなさそうな距離に見えるが、やっぱり道路らしく、長い。

「あ、やっと、見えてきたか」

『もうひと頑張りだ』

やっと、目的地であるトキワシティが見えてきた。

……とにかく、着いたらポケセンに行こうか。

お昼頃に旅に出たせいか、トキワシティに着いたのは空が赤く染まりかけていた。

「狼煙、お疲れさま」

『お前もお疲れさま、な』

トキワシテイの看板の前で、お互いに労をねぎらった。

……酷いかもしれないが、狼煙よりも満身創痍なのかもしれない。
はつきり言つて、横腹が痛い。

明日、起きたら筋トレでもするか。

「それじゃ、ポケモンセンターに行くから、モンスターボールに入つてろ」

そう伝えて、狼煙をボールに入れた。本当に、モンスターボールはどういう仕組みで出来てるんだろつか。

ポケセンの中は、夕暮れ時だけど、混雑はしていなかった。ジム戦やらトレーナーハウスやら、チャンピオンロードやら、いっぱいあるんだが。偶然なのか？

「すみません、ジョーイさん居ますかー？」

ボクがカウンターのところに来て呼ぶと、慌てて奥の方から駆けてきた。

「ごめんなさいね。ちょっとたた寝しちゃってたわ」

そう言つて、ジョーイさんは頬を赤らせていた。居眠りなら、仕方ないか。ジョーイさんの仕事はハードそうだし。

「ポケモンたちの回復お願いします」

「はい、分かりました。トレーナーカードの提示をお願いいたします」

「あ、記入済みなので、先にカード発行をお願いします」

ヤバイヤバイ。ポケモンセンターに着いたら、トレーナーカードの発行手続きをなさいって、オーキド博士に言われてたの忘れた。

オーキド博士の研究所で、あらかじめ記入しておいた用紙と、ヒトカゲ探しを頼んできた助手の人に撮ってもらった写真をジョーイさんへと差し出した。

出来上がった写真を見て気づいたのだが、ボクの髪の色がダークグレイに変色していた。何で気づかなかった。

「はい、トレーナーカードの発行が終わりました。」

「早っ!？」

渡して数分くらいしか経ってないのに、もう出来たのか!？

「それでは、ポケモンたちをお預かりします。本日はお泊まりになられますか？」

「あ、はい。お願いします」

「わかりました。コウさんのお部屋は202号室です。ポケモンたちの回復に時間ほどかかりますので、時間になりましたら受け取りに来てくださいね」

なんつーか、ポケモンの世界ってこえーわ。

「ふう、なんとか休むことが出来たか」

トキワのポケモンセンターの宿泊施設は意外とまとまった。
いまボクがダイブしたベッドはふかふかしており、更にデスクの
上にテレビが付いている。

「旅をしているトレーナーなら、タダ、ってな」

宿泊費がタダっていうのはメチャクチャありがたい。只でさえ節約
しなきゃならないし。

まあ、食事が三割負担だから食べ過ぎないようにしないと。ただでさえ成長期に戻っちまったし。

「……それにしても、あと一時間どうすつか。」

……テレビでも見るか。

「お預かりしたポケモンは、みんな元気になりました」
「ありがとうございます、ジョーイさん」

テレビを付けたら、ドラマ第一話の再放送がちょうど始まったらし
く、エンディングまで見てしまった。

ポケモンの世界にも、ベタな恋愛ドラマってあるんだな。
そう思いながら部屋へと戻り、二匹をボールから出した。

『いやあ、もう街に着いてたんですね』

『お前ずつと寝てたからな』

「結構マサラとトキワ、距離あるからな」

やっぱ、筋トレしようか。

『そついや、コイツの名前って決まったのか？』

狼煙は欠伸一（Not 技）をしているヒトカゲの方を見て言った。

「ああ、もちろん。」

『へえ、悪趣味な名前は勘弁してくださいね？』「……」

コイツ、さり気なく言ってきたぞ。しかも嫌そうな目で。

「……えーっと、紅蓮（グレン）って名前なんだが」

『紅蓮、ですか。……いい名前ですね』

おお、あっさりと決まった。てっきり、駄々をこねると思っていたのだが。

「そんじゃ、宜しくな紅蓮」

『はい、マスター』

……笑顔で応えてくれるのはいいが、「マスター」はないと思うぞ？

「あー、マスター、って恥ずかしいから止めてくれ」

そう言われるようなトレーナーにはなりそうもないし、と言おうとしたのだが、

『いいじゃないですか。コイツ呼ばわりしている誰かさんよりも』

『……あ？』

紅蓮はにこやかに狼煙の方を見て言い、その言葉に狼煙はドス声で応じた。

なるほどそうかわかった。紅蓮は自己中ではなく、腹黒なのか。しかも天然という恐ろしさをかねそろえた。

『おい、いま明らかに俺の方を見て言っただよな？』

『え、被害妄想も甚だしいですよ狼煙さん』

すごい剣幕で紅蓮に突きかかっているのだが、全く動じずにニコニコしている。ゴゴゴゴ……、という効果音が付いてても可笑しくないだろ。

なんか、スゴいのが手持ちに入りましたよ、オーキド博士。つて、くれたのはオーキド博士じゃねえか畜生。

二人一（？）の言い争い一（一方的であるが）も終わり、ボク達は食堂へと行くことにした。

ポケモンセンターの食堂は結構広く、十分に空席を見つけることが出来た。多分ピーク時だと混雑するんだろうな。

ボクは自分の食べるのと、二匹の食べるポケモンフーズを注文して席へと着いた。

『じゃ、先に食ってるぞ』

『お先に失礼します』

「遠慮しないで早く食え」

ポケモンフーズはあっさりと出てきたのだが、ボクのはまだ出来ていない。

畜生、マジで先に食い始めてるし。

そんな心境を悟ったのか分らないが、ボクの持っている紙に書かれた番号が呼ばれた。よし、食事にありつけた。

「そういえば、コウさんは明日ニビシティに向かわれるんですか？」

食器を返却口に持っていったときに、ジョーイさんに聞かれた。

「そろそろ野生のコクーンたちの進化が始まる時期なので、くれぐれもトキワの森は注意してくださいね」

「あー、わかりました」

「あと、そこまでかしこまわらなくてもいいですよ？」

すみません、流石にかしこまります。ジョーイさんだって、トレーナーやポケモンたちを相手に頑張っているんですから、と、心の中で返しておいて、部屋へと歩いていった。

『スピアーか……、マジで気をつけろよ』

『只でさえしつこいですからねえ』

……手持ちのポケモンからも注意されるボクはどうすればいいんだ？つか、ボクはそこまでアクティブ人間じゃねえぞ。

「まあ、大丈夫だろ」

『投げやりですね』

うつさい。あまりしつこく言うと、本当にスピアーに襲われるぞ？

とにか／＼今日は寝るじやないや。う。

第五話 トキワで休憩（後書き）

はい、ヒトカゲの名前が決まって安心安心！

コウ「…ちょっと待て、最後の部分のあれはなんだ」

狼煙『遠まわしに、次でスピアに襲われる、って言ってるように見えるな』

紅蓮『戦闘シーン苦手なくせに、よくやりますねえ』

いやあ、トキワの森で一騒動は定番かなあと思ってね。次の話もよろしく願います！

第六話 博物館へGO！（前書き）

おそらく、夜更かし状態（笑）（午前3時）

コウ「早く寝ろよ」

いや、とうとう冬休みに入ったし、夜更かししたっていいじゃないか！

コウ「…で、小説の方は？」

不思議な1ページ目とグダグダな4ページ目、かな？

コウ「なんだよそれ」

第六話 博物館へGO！

「紅蓮、ひのこ！」

「あー、キャタピー！」

へい、トリップ高校生のコウです。ただいまトキワの森を寄り道せず歩いていたら、ゲート手前で虫取り少年に出会ってしまい、ポケモン勝負を挑まれてしまった。

まあ、相性の良い紅蓮によってこのように倒したのだが。

「お兄ちゃん強いんだね！」

「いや、まだ上には上がいるさ」

『なんですかその謙遜』

うっさい。それに紅蓮、お前は「ひのこ」を覚えてばかりだろうが。

「あ、そうだそうだ。これ、賞品の傷薬。」

そう言って、虫取り少年はボクに傷薬を渡して、一足先にポケモンセンターへと行ってしまった。

いや、流石に年齢二桁いってないガキンチョからひ弱な中学生（精神は高校生だが）がお金をせびるなんて、道徳心が腐るし。

「よし、スピアー関係のトラブルにあわなかったな」

『ええ、マスターが意外と慎重派で驚きました』

「え、それは貶してんのか」

辺りに人気がないため、そんな会話をしつつトキワの森から出るゲートへと歩いていった。

それにしても、現実でもピカチュウの出現率って低いものなんだな。全く出会わなかったぞ。

「やっと着いたぜニビシティ！」

『なに声を張り上げてるんですかみつともない』

『俺たちにまで変な眼で見られるからやめろ』

無事にニビシティへと着いたため、ボールに入ってた狼煙を出して騒いでみたのだが、全くのつてくれなかった。まあ、そんなキヤラではないとは分かっていたが。

あと、すんません通りがかりのおじいさん。そこまで不審な眼で見ないでくれ。

「……えー、旅の基本。まずはポケセンに向かうか」

「ありがとうございます、ジョーイさん」

ポケモンセンターに着いてすぐに、ジョーイさんに回復を頼んだ。二匹とも見た感じはダメージを受けてないように見えるが、もしものことがあったら大変だからな。ポケモンの健康管理も、トレーナーとしての義務だ。うん、良いこと思った。

ついでにまだ昼間ではあるが、宿泊の手続きをしておいた。このまま行けば夕方あたりにハナダシティにつくらしいのだが、何が起こるか分からないのが、旅である。あれ、これは誰の言葉だ？

『ところで、ニビシティでなにをするのですか？』

「あー、そうだよなあ」『ジムに行かねえのか？』

「いや、やらなくてもいいってオーキド博士が言ってたからな？」

アニメとか漫画とかでジム戦してないトレーナーいたし、ゲーム沿いのトレーナーにもそういうのがいるだろ。

……いるよな？

「それで、このあと博物館に行こうと思うんだ」

『あ、なんだそれ？』

『さっき見えた大きな建物ですか？』

「ああ、なんか面白そうだったし」

せっかくポケモンの世界に来たんだ。この世界の歴史に触れたってバチは当たらないだろ。ただ、大人料金はいくらなのか分からないが。

「一応言っとくが、博物館内では静かにしてるよ？」

『マスターも、さっきみたいに騒がないでくださいよ？』

悪い、そのことは早く忘れてくれ。

普通に行くのも億劫なので、博物館まで案内してくれる市民を見つけてことにした。あの、ムリヤリ博物館へと連れていく男の人のことだ。

フレンドリーショップ周辺にしていると践んでいたが、ポケセン出た直後に肩を掴まれて強制連行されるとは思わなかった。

「ここがニビ博物館さ！」

「……案内ありがとうございます」

「なあに、お兄さんは優しいからね！楽しんできてね！」

この人は「お兄さん」と言っているのだが……うん、少ない髪の毛のことはよそう。

ニビ博物館ははつきり言って、「デカイ」。近くにあるジムと比べても、博物館のほうがデカイ。連行中に聞いた話によると、最近になって最新の耐震工事を施工したらしく、それでここまで大きくなっただけらしい。

良くそんな資金があったよな。

「大人一名で、百円です。」

「えーと、百円、と」

「はい、こちらが入場券です。あと申し訳ありませんが、ヒトカゲの尻尾の炎が、資料に影響を及ぼす可能性がありますので、モニターボールに入れてから入場してください」

入り口にあつた受付所で入場券を買ったのだが、紅蓮はボールの中から眺めることになるようだ。ちなみに狼煙は出しても良いが、目を離さないように注意された。

「悪いな、紅蓮」

『ふう、仕方ありませんね』

『……俺、そこまで興味がないぞ』

ああ、そうだろうな。なんとなく興味がなさそうだと分かった。

「このプテラの骨格標本でつけえな」
『…本当だな』

博物館の一階はカントー地方の古代ポケセンの骨格標本やら子どもにも分かりやすい解説の看板などがあつた。

ちなみに、あまり乗り気でない狼煙はボールに戻ろうとしたので、抱っこした状態となっている。

「ええと、最新の研究によるとプテラはカブトやオムナイトよりも、あとの時代に発生したポケモンだと言われている、へえ」
『なんでそんなことが分かるんだよ』

……悪い、狼煙。その部分については書かれていないんだ。

「よし、一階全部見回ったし、二階行ってみるか」

だいたい回ったところで、特別展示となる二階へ行くことにした。確かゲームだと、「つきのいし」特集だったが、今回はどのような特集が組まれているのだろうか。

『おい、右側に階段あつたぞ』
「え、マジで？」

狼煙の言うとおりに右側を見ると、確かに二階へと上がる階段があつた。ええと、今回の特集は

「ホウエンの神秘、か」

あ、協賛に「カイナシティ 海の博物館」と書いてある。

……カイナシティと同じような展示物が飾ってありそんな気がする

るのだが。

「……狼煙、行ってみたい？」

『は？ 興味がないな』

そして、くあ、と欠伸をした。やはりそう答えたか。

紅蓮は、と訊こうとしたが、ボールはカタリと音を立てただけだった。こちらにも興味がないようだ。

帰りに、フレンドリイショップによって、明日の準備でもするか。

「そっぴや、狼煙ってホウエン地方出身なのか？」

『あ？ ほうえん、ってどこだよ？』

「…質問を変える。どんなポケモンがいた？」

『あー、ジグザグマっつーのがいたな』

ああ、ホウエン出身か。

第六話 博物館へGO！（後書き）

狼煙『なんだよ最後のやつは』

いやー、グダグダ故のオマケにしたのだよ。

紅蓮『しかも、前話でのフラグを折りましたね』

あえて定番をやらなかった！というより、そっちの方が文章グダグダだったんだよね。「これはまずい」 pensando、丸々カットしちゃいました。ちなみに、化石の年代測定については検索してね！
コウ「丸投げだな」

それを言わないでくれ

第七話 北からの刺客（前書き）

目が痛いよー

コウ「んなことより、なんだよサブタイトルは」

ああ、とりあえずシンオウといえど…って人をね、出してみようかなって

紅蓮『要するに作者の自分勝手ですね』

いや、一応すごいことになるよ？

コウ「…じゃ、その凄いことが起きる本編をどうぞ」

第七話 北からの刺客

「ぷうちゃん！ヒトカゲに『はたく』！」

「紅蓮！後ろに避けて『ひのこ』！狼煙はピッピに『たいあたり』」

「！」

「分かりました！」

「よっしゃー！」

紅蓮はプリンのはたく攻撃を後ろに避けたあとひのこで牽制をして、狼煙はピッピにめがけて走っていった。

博物館に行った翌日の朝早く、ボク達はニビシティの東側の道路へと走っていった。息を整えてから歩いていると、女の子二人組にポケモンバトルを挑まれてしまったのだ。ちなみに、こちらはダブルであちらはマルチの変則バトルである。

「今よピイピ！『このゆびとまれ』！」

「はあっ！？ 狼煙よける！」

レベル高い技覚えさせてんな！

「このゆびとまれ」という技は、相手のポケモンが放つ技を全て自分が受けるというトリッキーな技だ。

しかし、それによって紅蓮の放ったひのこはいきなり軌道を変えて、ピッピへと向かっていった。そして、軌道線には狼煙がいる。

「つつー！」

「いたっ！」

狼煙は指示は聞こえていたのだが、スピードが出ていたために避けられずに火の粉に当たり、そのままピッピに体当たりをした。

しかし、体当たりが決まったらしく相手のピッピは倒れてしまった。

「狼煙、大丈夫か？」

「……これが大丈夫なように、見えるか？」

……見えねえな。

火の粉を放った紅蓮は、『相手のせいです』と割り切っていた。

「ぷうちゃん、あなたの歌を聞かせてあげなさい！」

「私の歌をじっくり聴いてね！」

「っ、狼煙！ 遠吠えで聞こえないようにできるか!？」

「やってやる!」

あと紅蓮は、と言うより先にプリンの歌が始まってしまった。

狼煙には遠吠えをして聞こえないようにしたのだが、紅蓮には指示が出来ず、眼がトロンとしてきた。

「うっ、すみません、マス、ター」

「紅蓮！」

紅蓮はそう言って、その場に寝ながら倒れてしまった。

紅蓮が倒れた音が聞こえて気を抜いたのか、プリンは歌うのをやめてしまった。

よし、チャンスだ！

「今だ狼煙！ 体当たりだ！」

「うおおおお！」

ボクの読み通り、プリンの歌声は遠吠えで聞こえなかったらしく、

狼煙は先ほどよりも速く走っていった。
って、なんか狼煙、速すぎやしねえか？

「……なるほど、特性のはやあし、か」

おつきみやま近くのポケモンセンターで、二匹を預けてきた。
先ほどまでバトルしていた二人組と一緒にいたのだが、預けていたポケモンを受け取って、ニビシティへと行ってしまい、ただいま独りぼちでポケモンセンターのソファに座っている。

それにしても、さっきのバトルは運が良かった。紅蓮の火の粉が当たってしまった狼煙は「偶然」にも「やけど」状態になってしまいが、特性である「はやあし」が発動。さらに攻撃が下がっていたのだが、遠吠えを積んでいた上に体当たりが急所に当たってしまい、プリンは戦闘不能となった。なんという運の強さだ。

「コウさん、お預かりのポケモンたちは元気になりましたよ！」
「ありがとうございます、ジョーイさん」

回復が終わったので、ジョーイさんからボールを受け取ってすぐに、二匹を出した。

「二人ともバトルお疲れさま。あと、狼煙、

進化おめでとつ」

『……ああ』

『わあ、大きくなりましたね』

会話の通り、狼煙はグラエナに進化してしまった。いや、当たり前か。

あのバトルが終了した直後、狼煙が光——進化の光——に包まれた。光ったときはビビったが、二人組が「進化だ！」と叫んでくれて納得できた。

それにしても、さすがにこの体じゃ狼煙を抱っこする事ができないな。どうするか。

『なあ、いま変なこと考えてただろ』

「ん、どうしたんだ狼煙？ 腹でも減ったのか？」

ある意味重要なことに「変な」と言われたので、狼煙の問いかけに惚けることにした。

狼煙はしばらくガンを飛ばしてきたが、しばらくすると止めた。

『早く私も進化したいですねえ』

『もうそろそろだろ』

会話を聞きつつ、ポケモンセンター内部の様子を見てみた。少し早い時間に来たせいか、回復待ちのトレーナーの数が両手で数えられるくらいしかなかった。

コイキングを売りつけてくるじいさんも居ないことだし、平和である。

「やあ、そのキミ。」

「ああ？」

平和を噛みしめている時に話しかけられたために、舌を巻いたような声が出てしまった。

顔を上げてみると、

「私の名前はゲン。ちょっと聞きたいことがあるんだけど、いいかな？」

シンオウ地方にいるはずの青スーツの人がいました。

さて、どうしてこうなった。ボクが驚いて空返事している間には進んでおり、今はゲンさんのとったポケセンの部屋のソファに座っている。

「すまないね、あまり人に聞かれては困る話なのでね」

「あ、いや、いいですよ。それより話ってなんですか？」

ゲンさんの奢りでもらったサイコソーダを口にふくんだ。あ、美味いなこれ。

「もしかしてなのだが、キミはポケモンの言葉が分かるみたいだね」「ぶっ！？」

なに聞いてくるんだこの人は！
思わず吹いちゃったじゃねえか！

『大丈夫か？』

「ありが、……と？」

心配されたから反応してしまっただが、誰の声だ？
ゲンさんはこっちを見てニコニコしてるし、紅蓮は呆れてる。つておい、なんで呆れてんだよ。狼煙はそんなゲンさんに威嚇するよな目つきでみている。……今いる誰の声でもない。

『すまないな、混乱させてしまった』

いや、ゲンさんのルカリオがいたか。

「いや、大丈夫だ……」

あ、普通に会話してしてしまった。

『何やってるんですかマスター』

『完全に誘導されやがって』

マジですまん。

「いやすまないね。面白いオーラが出ていたもので」

「はあ、そうですか。」

オーラとか、そんなもの解るんですかあなたは。そんなオーラ見えるゲンさんはボクのことを秘密にしてくれると言うことなので、安心した。

一応いっておくが、バレたのはポケモンの言葉が解るだけで、異世界から来たことはバレていない。そこだけは弁解させてくれ。

「私の場合、ルカリオがテレパシーで教えてくれるんだ」

「え、ルカリオすごっ！」

『いや、テレパシーくらい簡単なものだ』

いや、そんなもの簡単に扱わないでください。

『うつむ、精進してみよう』

心まで読んできた！？

『マスター顔に出すぎです』

『おい、落ち着けよ。このあとまだ歩くんだろ？』

「あ、ああ。このあとおつきみやまを通ってハナダシティに行こう
と思ってる」

「おや、それじゃ私たちとは逆の方向だね」

逆の方向、ってことはニビシティか。さっきから人気だなニビシ
ティ。

「それにしても、コウ君はポケモンを大事にしてるね」

「え、当たり前じゃないですか？ポケモントレーナーとしての基本
です」

『ジム戦してないじゃないですか』

……あー、うん紅蓮、そこはつつこまないでくれ。

『あまり言ってほしくないみたいだぞ』

ルカリオも訳さないでくれ。

「それじゃ、君を信じてこれをあげよう」

そう言っつて、荷物を整理してたゲンさんがボクに差し出したのは、
楕円形の卵らしき物質が入ったガラスケースで、何故かモンスター
ボールが付いていた。

って、まんまポケモンの卵じゃねえか！

「いや、こんなのボクには荷が重いつす」

「ハハハ、遠慮なくていいよ。君はポケモンのことをちゃんと解っているようだし、それに、この子にはいろんな世界を見てほしいんだ」

うーむ、なんか微妙な説得力。

「……分かりました。ありがたく頂いておきます」
「うん、この子のことは宜しく頼むね」

ゲンさんを一旦外に出て見送ってから、ポケセンの中へ入った。もちろんボクの腕の中には先ほどの卵のはいったガラスケースがある。

『それにしてもよ、いったい何が孵るんだろうな』
「さあ、孵るまで分からないさ」

狼煙とソファに座って卵を見つめていたのが、紅蓮が何か考えている顔をしていた。

『あの、もしかしたら私の気のせいかもしれませんが』
「ん、どうした紅蓮？」

紅蓮は次の言葉に躊躇っていたのだが、意を決して言葉に出した。

『オーキド博士に、街に着きましたって連絡しました？』
「……あ」

トキワシティに着いたときも連絡してねえ。

このあと、急いでオーキド博士にポケセン内装されているテレビ電話で連絡をしたのだが、街に着いたらポケセンで回復をさせて、オーキド博士に連絡する事を旅の重要項目に入れた。

第七話 北からの刺客（後書き）

ゲンさんカツコいいね!!

コウ「まずは全国のゲンさんファンに謝れよ」
すみませんでしたー！（素直）

狼煙『俺が進化して、卵を貰うことになるなんてな』

うん、実は骨組みの時はニビ博物館で会ってしまい、貰うってことにしていたんだけど、途中で力尽きた（笑）

狼煙『オイ』

紅蓮『最近そればかりですね』

……え？

コウ「何だよいまの間は」

あ、次回も大変なことになっちゃうよ！それじゃ目が痛いから寝る！

第八話 落石注意！（前書き）

（作者は病み上がり中）

コウ「…なあ、作者。本当に大丈夫なのかよ」

うん、昨日よりはスッキリしてるから快晴に向かってる。

狼煙「でだ、今回のタイトルはいかにも洞窟らしいな」

実は後半部分は書きにくかったりもして大変だったよー。バトル描写って難しい。

コウ「そんな第八話をどうぞ！」

第八話 落石注意！

ただいまボク達はオツキミやまの洞窟に入ってから十分余りの時間が経った。

『いやいや、まさか案内してほしいって頼まれるとは思わなかったぜ！』

「いや、まさかあんなことになっているとは思わなくてね」

何があつたのかというと、それは二十分前の出来事であつた。

——二十分前

「オツキミやまをご使用する方に連絡いたします。ただいま整備された道で落石が起きて、使用不可となっています。申し訳ありませんが、迂回ルートをご利用いただくか、落石が取り除かれるまでお待ちください」

「……マジかよ」

オーキド博士に連絡をし終えて、ポケセンで昼食としてオムライスを食べていたときだった。ポケモンセンター定番のチャイムが流れたあと、上のような連絡が流れてきたのであつた。

ボクと同じく、オツキミやまを使う人があちこちいたらしく、ガヤガヤと声が漏れた。

『どうしますか、マスター。やっぱり回り道を選ぶんですよね』
『お前の性格じゃ、迷わず迂回をするんだろ？』

狼煙、紅蓮、いったい君たちはボクをなんだとっついていやがる。
当たっているから、なんとも言い返せないが。
卵のなかにいる子も、いつかはそうなってしまうのかなあ？

オツキミやまの洞窟に入って分かったのだが、設備された道というのは「HGS」での道のような。中腹へ行く道も、今では絶たれている。

つまり、迂回ルートというのは旧道のことを意味するようだ。
確か、一番奥のハシゴを使えばいいんだよね？
ちなみに、卵はバッグの中に何故が入った。なんだこのバッグは。

『おつ、こんな所に人間がいるなんて珍しーな！』

記憶と紅蓮の尻尾の炎を頼りに歩いていると、偶然にも目の前にズバットがぶら下がっていた。

「おお、ズバットがいる」

『そりゃー、こんな暗い洞窟なんか限られてるからな！』

ボクが呟いた独り言に、素早くズバットは反応してくれた。いい性格である。

そして紅蓮は、

『マスター、このズバットさんに道案内を頼みませんか？』

と言ってきた。

——回想終了

『それにしてもよ、人間のニイチャンは俺たちの言葉が解るなんてすげーな!』

道案内をしてくれるズバットには最初に言っておいた。流石にボクのことを利用するポケモンなんて、……うん居ないはずだ。

『なに暗い顔してんだよ』

「いや、ちよつと考え事をしてただけだ」

そうかよ、と狼煙は言ったあと前を向いてボクの横を歩いていった。

そして、ボク達より前にいる紅蓮とズバットは、

『そついやさあ、この間おもしれえ人間がいたなあ』

『へえ、どんなニンゲンさんでしたか?』

会話を繰り広げていた。

『それがなあ、メツチャ強面な顔なのに、ピッピを捜していたんだよ』

『うわあ、なんて顔とはアンバランスな事してるんでしょうね』

……なあ、紅蓮。顔に似合わずにしてることはお前も同じだと思うが? お前の場合は毒舌なことだけだ。

『マスター、何か言いました?』

「いや、何も言っていないぞ」

あれよあれよという間に、地下二階までたどり着いた。途中でパラス達の井戸端会議に巻き込まれたりしたが。

『さーて、ここまでくれば出口まではあと少しだぜ！』

「確か、一本道だよな」

『その通りだ！』

まだテンションが高い状態なズバットが言う。そのテンションを分けてくれ。

『……なんか、おかしくないか』

「どうしたんだ狼煙？」

『一階で道を塞いでいた岩のほとんど、技を使う為に砕いたりした形跡があつたぞ』

『え、そうなんですか？』

ボクと紅蓮には全く分からなかった。ついでにズバットであるが『あー、悪いな。あっち側明るいから見てないな』と言っていた。つまり狼煙が言うには、設備された道と中腹への道を通行止めにしている岩は、ポケモンの技によるものだということだ。

『なんでそんなことが分かるんですか？』

『それはなー、自然に起きたときの岩はな、多少なりとも丸っこいんだよな』

な、とー（多分）狼煙にアイコンタクトを送ったズバットであるが、狼煙はそれをスルーしていた。ああとかすんとか返してあげろよ。

『まあ、ソイツがここから出てたんなら大丈夫なん……』

『……マスター、非常に残念なお知らせです』

「……マジで？」

『まだ居たみてーだな』

何か重いものがこちらへと近づいてくる音がしてきた。なんていうか、岩と岩がぶつかり合う音が時々聞こえてくる。

そして顔を覗かせたのは、

「なあズバットくんや、ゴローンってオツキミやまにいいのか？」

『進化前のイシツブテなら見るんだけどな……』

グオオオオオ！

『来るぞ！』

野生のゴローンが構えたのを見て、狼煙が注意を促してきた。

ゴローンは近くにあった岩を掴んで狼煙に目掛けて投げてきたが、狼煙が左に跳び避けた。

『ちっ、迂闊に接近出来ないな』

確かに、狼煙が使える技は接近しないといけない技ばかりである。紅蓮は「ひのこ」が使えるから遠距離でもいけるのだが、与えるダメージが少なすぎる。

ズバットに頼もうにも、飛行が入っているから効果抜群であるし、遠距離技は「ちょうおんぱ」しかないらしい。混乱したら余計にひどくなる。

「こうなったら紅蓮。ジリジリダメージを与えていくぞ！狼煙は紅蓮のサポートを頼む！」

『お願いしますね!』

『任せておけ』

ボクのそれだけの指示だけで、ゴローンが狼煙のほうに氣をとられた時には紅蓮が「ひのこ」で攻撃をして、紅蓮の方に注目したときには狼煙が「とおぼえ」をしてゴローンの氣を逸らしてくれている。

単純な方法であるが、これ以上の最善手が思いつかない。これでゴローンが「やけど」になってくれればいいのだが。

その後はどうしようか迷っていると、ゴローンがボクの方を見てニヤリと笑った氣がした。しかし、その眼には生氣が感じ取れなかった。

『コウ!』

『マスター!』

はつきり言つて、その恐ろしさにすくんでしまったボクがいた。狼煙がやつと名前と呼んでくれたことにも氣づかないくらいに。

そんな心境を察したのか、ゴローンは大きめの岩を持ち上げてきた。ああ、これ投げてくるのか。

『そんなこと、させません!』

そんな声が聞こえ、洞窟内に明るい光がさしてきた。つかこの光つて、進化の光じゃねえか?

そして光が晴れてボクが見た光景は、岩を持ったまま目を回して倒れているゴローンと、

『大丈夫ですか、マスター』

爪を鉄のように——あとでメタルクローだと分かった——していたリザードに進化した紅蓮であった。

『おいニイチャン。呼ばれてっぞ。なんか反応しとけよ』
「あ、ああ」

ズバットに促されたことによって、やっと緊張からとけた。が、その場で跪いてしまった。

『なにやってるんですか、マスター』
『お前なあ、固まりすぎだぞ』

呆れつつも笑っているも笑っている二匹を見て、

「……うつせえ」

と、笑いながら返した。

第八話 落石注意！（後書き）

はい、紅蓮くんが進化いたしましたー！

紅蓮「ふう、やっとですか」

いや、妥当のタイミングだと思うけど？ほとんどのユーザーさんはこの辺りで進化するレベルまで到達しているし。

紅蓮「そのほとんどのユーザーは小さいころの作者のことですよ。レポートの意味を知らないで、何度も何度も挑戦してましたし」

うわあ、それを言わないでくれ。

第九話 幸運ラッシュ？（前書き）

紅蓮『そういえば、前回は何故メタルクローが使えたのでしょうか？』

ああ、それは潜在能力がリザードへと進化したと同時に開花したんだよ。

紅蓮『…、後付けしたような回答ですね』

はて、なんのことやら？

コウ『そんなことより、おつきみやマ広すぎて疲れた』

狼煙『…いつになく元氣ねえな』

まあ、今話も忙しくなるんだけどね。

コウ『はあ？』

第九話 幸運ラッシュ？

ゴローンを倒したあと、その音を聞きつけたのかニビ博物館の研究員が駆けつけてくれた。ゴローンについては、あっちの方で保護してくれることになったので、狼煙と紅蓮、あと案内役のズバットと一緒にハナダシティ側の出口へと向かうことになった。

それにしても、いったいあのゴローンの眼はなんだったのだろうか。生気の無さもそうであるが、焦点もあっていなかった。それに、言葉も理解できなかった。

『おい、ニイチャン。あとはこのまま進めばいいだけだぜ』

「ん、ああ。ありがとな」

『……世話になった』

『道案内ありがとうございました』

ズバットは『いいっていいって』と言って、洞窟の奥へ飛んでいった。

「さて、あと少しだ」

「やっと、抜けれた」

ズバットの言うとおり、すぐ近くのハシゴを登ってすぐに出口があった。

太陽もまだ沈んではおらず、なんとかポケセンが込み合う前くらいに着けるだろう。

「それにしても、段差が多すぎじゃね？」

これ、何回くらい飛び越えなきゃいけないんだ。

「ジョーイさん、回復と宿泊お願いします」

「はい、分かりました。お部屋は208号室になります」

狼煙と紅蓮が入っているボール、それと卵が入ったガラスケースをジョーイさんへ預けて、鍵と受け付け待ちの番号の紙をもらった。すぐにでも部屋のベッドに飛び込みたいが、その前に博士に連絡をいれなくてはならない。

「えーと、博士の電話番号は、と」

「ううむ、オツキミやまにゴローンがのう……」

「イシツブテが進化したただけでしょうか？」

「いや、それはありえん。進化したポケモンは同じ個体種、もしくは大きなは群れへと移動するという学説があるのじゃ。オツキミやまのイシツブテの生息数は低いほうじゃから、多分進化したことによる興奮行動と思いたいんじゃないが」

「そうですか……」

世界的に有名なオーキド博士曰わく、このようなケースは稀らしい。

「よし、何か分かったら連絡しよう」

「ありがとうございます、オーキド博士」

それでは、とテレビ電話を切った。

「ポケモン回復終了待ちのコウさん、至急ロビーのカウンターへ来てください」

……至急ってことは、アクシデントでもあったのか？
うわあ、不安要素ありすぎる。

「どうしましたか？」

「ええ、卵のことですと」

そう言つて、微笑みながらカウンター奥の部屋に案内された。まさか、オツキミやまでの戦闘の時にヒビでも入っちゃったのか？いや待て、ジョーイさん微笑んでるし、ガラスケースの中に入っていたからそれはないか。

「ふふ、ここよ」

ジョーイさんに案内された部屋のテーブルには、洗面器やらポットやら、ガラスケースの中で動いている卵が……

「……もしかして」

「ええ、そろそろ卵から孵りそうなの」

ええと、受け取ったのほんの数時間前だよな。それで孵るってゲンさん、あなた卵に何かしたでしょ。

「さあ、孵った時にきびきびと動かないといけないわよ」

「え、ボクがするんですか!？」

「あら、新しい命との交流もトレーナーの経験を積めるわよ？ それに、もしポケモンセンターが見つからない時に卵が孵りそうになったときに役に立つわ」

う、笑顔だけどなんか説得力がある。

卵が孵るまで、孵ったときの下準備をする事になってしまった。他の仕事へと行ってしまったジョーイさんは、意外とスバル……厳しかった。

「早く生まれてこーい」

ガラスケースを取り外して、直に卵に触れてみた。ほんのり、温かいな。こういう体験したことが無いし、なんか新鮮だなあ。

ピシッ

「……は？」

小さな音であったが、しっかりと聞こえた。その証拠に卵にヒビが入っていた。さらにピシピシッ、とヒビ割れが長くなってきた。

「……がんばれよ」

つい、声が漏れてしまった。

その刹那、パアアアと部屋中に光があふれ出した。そして光が収まって、卵の代わりに机にいたのは、

『……ミュッ?』

一体のリオルであった。まあ、ゲンさんが卵をくれるイベントといえはこれだろうな。生命の誕生ってすげえ。おお、文章の脈絡がなくなってる。

リオルはそんなボクのほうを見て、泣き出しそうになっていた。

『ミュッ……』

「つて、産湯産湯ー! 温度オツケーだな!」

地獄の実践が開始した。

「と、こんなことをしたいんだ」

『……なるほどな』

『あはは、ご苦労様です』

孵化後の処置も終えて、預けたボールとスヤスヤと眠っているリオルを抱いて208号室まで行き、ベッドに突っ伏していた。もちろなりオルを潰さないようにしている。

ポケモンの成長率は人より早いらしいので、もう離乳食でもいいとのこと。成長率はええな。

「まあ、藍斗(アイト)が無事に生まれてよかったよ」

『あ? 今のがりオルの名前か?』

『マスター、もう名前決めてるんですか』

実は、卵を受け取ったときからリオルが孵るんだろうなあ、とか

思いながら意外と時間をかけて考えた。『これで違ったらイジリ話になるんですがねえ』と紅蓮が言ったような気がするが、気のせいにしておこう。

「……子育てって、大変だな」

『何言ってるんだ。これからが大変なんだろう』

『私たちも手伝いますから、ね』

「おー、頼むぜー」

……いや、紅蓮が手伝ったら腹黒まで移りそうだな。狼煙が手伝ったら、……予想がつかないな。

『んうー？』

『おっ、起きたみたいだぜ』

狼煙たちと話しているうちに、ボクの腕にいた藍斗が目を覚ましたようだ。

『コウー？』

そして、ボクの顔を見て言ったあと、服を掴んで、また眠り始めた。

「の、狼煙、紅蓮。藍斗が、藍斗がボクの名前を呼んでくれたぞ！」

『……おい、まずは落ち着け』

『落ち着いてくださいマスター。父性本能くすぐられるのは分かりませんが、端から見ればウザい親バカです。』

腕の中にいる藍斗と比べて、冷たい視線をしている二匹。いや、これで落ち着けるわけがないだろ！

『また寝たんだ。騒いで藍斗を起こす気なのか？』

……そうか、それもそうだな。狼煙の言葉を聞いてやっと落ち着けた。にしても、おめでたいことがよく続くよな。今日だけで狼煙も紅蓮も進化するし、貰った卵が数時間後に孵化するし。運が良すぎだな。

「宝くじ、当たるか？」

『どうしたんだよ、いきなり』

「いや、なんでもない。そろそろ、夕飯食へに行くか」

狼煙に独り言が聞こえてしまったが、まあ、大丈夫だろう。いまだに寝ている藍斗を抱き上げて、食堂に行くことにした。

『何やってるんですか、マスター』

「は？藍斗を置いて行けるわけにはいかないだろう？」

そう言つと、紅蓮ははあ、とため息をついた。何でだ？

『ボールの中に入れてればいいんじゃないか、って言いたいんだろ』

『ええ、その通りです』

「……そう言われれば、そうだな」

ヤバいな、まだ興奮しているようだな。そこまで考えていなかった。

紅蓮と狼煙の言つとおり、藍斗をボールの中へ入れておくことにした。

「よし、改めて夕飯食へに行くか」

第九話 幸運ラッシュ？（後書き）

いえい！3体目の手持ちはリオルの藍斗くんです！

コウ「…みんな、育児って大変だぞ」

紅蓮『マスター、それは重々承知しております。あと、作者のテンションがおかしいです』

いやー、将来有望なキャラになりそうだ！

狼煙『って言ってるが、本心はどうなんだよ』

コウ！藍斗を抱っこさせてくれ！

コウ「おい、目が可笑しいぞ」

第十話 トレーニング…（前書き）

……ふう

コウ「どうしたんだ、作者。珍しくナーバスだな」

いや、さっき変な夢見たりとかまあ、いろいろあつてねえ

コウ「そっか、大変だな」

おっと、第十話ではハナダシティから出ません。というか、次話でも出ないのですけどね。あと、後書きでお知らせがあります

コウ「あー、作者の発言がグダグダになる前に、第十話、スタート」

第十話 トレーニング..

藍斗が生まれてから、三日という月日が経った。ジョーイさん曰わく、生まれてすぐの頃はあまりストレスを与えてはいけないとのことなので、ひとまず一週間ハナダのポケセンにお世話になることになった。

『えへへへー』

「どうしたんだ、藍斗？」

『コウとおさんぽできて、うれしーんだ！！』

そう言つて、満面の笑みでこっちを見てきた。ただな藍斗、これは散歩じゃなくてボクの体力上げるためのジョギングだ。やっぱ、図鑑に書いてある通り、長距離型なのか？

あ、ちなみに少しの運動くらいはOKをもらっているので安心してくれ。

「藍斗、そろそろ戻ろうか」

『はい！』

うん、いい返事だ。

ポケセンの部屋に設備された浴室のシャワーで汗を洗い流して、タオルで髪を乾かしている。

「……よし、大体乾いたな」

多少水気は残っているが、しばらくすれば乾くだろう。許容範囲内許容範囲内。

「よし、髪洗い終わったぞ」

『それはそうですよ。これで洗わずに出てきたら待っていた私たちが報われません』

なんか、進化してから紅蓮の発言がオブラートに包むようになってきたな。

『腹いせに髪の毛を燃やします』

「冗談抜きでそれは止めてくれ」

やっぱり、変わらないか。

『で、お前のトレーニングのあとは、俺たちの技のトレーニングだよな？』

「ああ、そうだな」

『準備できたら行きましょうか』

『オレもトレーニングしたいー！』

ん、先ほどの会話の一番最後は誰が言ったのか、勘が鋭い人なら分かるだろう。藍斗である。

一人称を「オレ」にしたほうがカッコいいと思ったらしく、すぐに定着化してしまった。あと、言葉を覚えるのが早い早い。

「あー、藍斗は、やり過ぎない程度にな？」

『うん、わかったー！』

そう言って、左腕を上へと、拳手するように伸ばした。

ボクたちはトレーニングするために、ポケセンの設備のトレーニング部屋に来た。トレーニング部屋は予約制だったため、昨日予約をしておいた。ちなみにこのトレーニング部屋、壁や天井に「リフレクター」やら「ひかりのかべ」やらを張っているため音漏れも損傷もしないらしい。

張ったポケモンつええな。

「それじゃ、まずは狼煙と紅蓮だな」

まずは進化して数日経った二匹からだ。進化した分強くはなっているが、その力をコントロールさせないとな。

「紅蓮は部屋のあっち側へ行ってくれ」

紅蓮が場所に着いたのを確認してから、次の指示を出す。

「開始の合図をしたら、そこから狼煙に、ひのこで攻撃してくれ」

『分かりました』

「狼煙は、ひのこを避けながら紅蓮に接近してくれ」

『ああ』

狼煙が使える技は接近してからでないと意味を持たない技ばかりである。遠距離技を使うのが相手だとそう上手く近づくのは困難である。

逆にひのこを覚えている紅蓮はリーチがある分有利かもしれないが、コントロールが悪くて相手に攻撃が当たらなきゃ、リーチをとっても意味がない。

「それじゃ、開始だ！」

ボクが合図すると、紅蓮は口からひのこを発射し、狼煙はよけながら近づいていった。

『コウー、オレはなにをすれば、いいの？』

藍斗は、はぶられていたことに気づいたようで、ボクのズボンのすそを掴んで言った。

「そうだな、藍斗は……」

はつきり言つて、バトルをさせたことがないから藍斗の実力を知らない。攻撃にどのような癖があるか、相手の技を避ける時にどのように避けるのかと言った具合である。

『つつ！』

『はい、当たりました』

「あー、それじゃもう一回同じ事をしてくれ」

狼煙と紅蓮の一つ目の対決は、紅蓮がひのこを当てて勝った。さて、藍斗のトレーニングは、と、

「そうだ、いいのがあつたな」

ボクは何気なく拾つておいたゴムボールを藍斗へ渡した。

『これでなにすればいいのー？』

「目を閉じて、そのボールに力を注いでるように意識する、集中力のトレーニングだな」

藍斗の進化系は波導ポケモンのルカリオである。今のうちに気の鍛錬をさせておいたほうが良いだろう。

『うーん、やってみる』

肯定はしてくれたが、納得はしていない様子であった。多分、狼煙と紅蓮のように動きたいんだろうな。ボクのジョギングに付いてくるぐらいだし。

そっぴや、あの二匹はどうなってんだ？

『ちょこまかとウザいですね！』

『はっ、当てれるもんなら当ててみるよ！』

……おお、見てないうちに、本気と書いてマジになってやがる。

そんなトレーニングを30分ぐらい続けて、終了にさせた。狼煙と紅蓮のバトルは一勝一敗のち三戦目は時間切れにさせた。感想を聞くと、紅蓮が狼煙に向かって『大人気ないですね』と言っていたり、藍斗が『あれ、もうおわりー？』と意外と真剣に取り組んでいたりと、動き回っていた狼煙が『疲れた』と言ったきり黙ってしまった。

「そんじゃ、回復させますか」

ボールを取り出して三匹を中へ収めた。藍斗が『オレ疲れてないから、だいじょうぶだよ』と渋っていたが、何か支障が出てからでは遅いので問答無用で入れさせた。

回復を終わらせてから、未だ泊まっている部屋へと帰り、すぐにボールから出させた。

「みんな回復できた？」

『ああ、充分だぜ』

『体力ばっちりですよ』

『アメもらったー！』

「…マジで？」

うわあ、ジョーイさんに頭が上がらない。

「そんじゃ、これ出さないと肩身が狭くなるな」

『何だよそれ』

「ちよつとしたバトル大会の参加申込用紙」

なんでも、三日後にハナダシティ北部の道路でイベントが開かれるらしく、先ほどジョーイさんから押し付けられるようにもらってきたのだ。

「みんな、どうする？」

『はいはいはい！やりたいやりたい！』

『いいじゃないですか、参加しましょうよ』

『ジムに挑んでねえんだし、構わないぜ』

よし、みんながそう言うなら、参加するか。

「それじゃ必須欄記入して提出してから、買い物に行くか」

ジョーイさんは微笑んで申込書を受け取ってくれた。あれ、このジョーイさんは策士なのか？と疑ってしまいうくらいである。

買い物のお金は、一応ポケモン協会から孵化祝いとして送金されてきたからなんとか大丈夫だろう。節約すれば。

ええと、傷薬は尽きていたから二つ買うとして、お、麻痺治しの錠剤が売ってる。

『コウー、これ買って！』

買い物カゴの中にいる藍斗が商品棚にむけて指を指した。

その方向には「ポケモンフーズ チイラの実味」と書かれた箱があった。もちろん、中身入りである。

「ハナダシティから出る日に買ってやるから、我慢してくれ」

『えー、お店がどこかへあるいて行っちゃうかもしれないじゃん』

『藍斗、さすがにそれはないから安心しておけ』

お、珍しく狼煙が反応した。

『狼煙にい、なんで分かるのさー？』

『俺の聞いた限り、そんな噂聞いたことが無え』

そう言われて藍斗は我慢してくれた。いい子だな。

「狼煙、サンキュー」

『ふふっ、狼煙さん照れてますね』

『あ、なんか言ったか？』

『早くかいものおわらせようよー』

賑やかな仲間を連れて、ボクたちは会計をしにレジへと歩いていった。

帰り道、藍斗が買い物袋を頭の上に乗せて、休まずにポケモンセンターまで行けるといふ驚異の力を知ったのは、いい経験であった。

第十話 トレーニング…（後書き）

とまあ、こんな感じとなりました。

コウ「そついや、なんか重要なお知らせがあるんだよな」

ああ、実は来週からテストが始まりますので、25〜31日は更新不能となります。なので、次話は二月に入ってからになると思います。

コウ「……もし、二月に入っても更新しなかったら」

ああ、それはないから安心してくれ。多分

コウ「多分かよ」

第十一話 バトルは楽か苦か（前書き）

二週間ぶりの更新です！

コウ「テストご苦労さん」

紅蓮『それで、手応えはどうでした？』

うーん、戸惑ったのもあったけど、大丈夫でしょ

コウ「…おい」

あ、今話はバトル描写が少しあったから大変だったよ。

第十一話 バトルは楽か苦か

「それではただいまより、ゴールデンボ……黄金橋杯を開催致します！」

おい、市長が問題発言しかけたんじゃないか？

早いもので参加登録してから3日が経ち、とうとうハナダシティでのバトル大会が始まった。

なんでもこの大会の開催理由であるが、二年前に北に架かっていた橋が改名された記念らしい。って、あの市長二年間ずっと間違え続けているのか。まあ、ともかく、その記念と言うことで、24番道路の空き地がバトル会場である。

『コウー、あのひとあたまに何かかぶってない？』

藍斗、それは言っちゃ駄目だ。あれはフサフサの帽子なんだ。きつとそうに違いない。

そのあと司会者からバトル内容の説明があった。

なんでも、勝手に行われていた連戦バトルを参考にしているとのことだ。やっぱ、あれ勝手に始まったやつなんだな。ロケット団のイベント野郎め、なんて事をしてくれた。いや、話が反れかけている。

両トレーナー使用ポケモンは登録したポケモンから一体ずつのガチバトルで、降参させるか相手のポケモンを戦闘不能にする、もしくはバトル開始から十分経ち、審判の判定で勝ちと判定されれば一勝となり、勝ち抜きでバトルを続けることになるらしい。

但し、五連勝したらそこで勝ち抜き終了として、次のトレーナー二人からバトルとなるらしい。なるほど、あまり強いトレーナーが蔓延つてたら楽しくないし、イベントも盛り上がりがないしな。

「それでは、五連勝した方への賞品はこちらです！」

そう言つて今までかかっていた布を引っ張った。そして現れた賞品を見て辺りがざわついた。

「おいおい、自転車かよ」

こりゃあ、みんなマジになるぞ。何せ買おうとも一般トレーナーには一（というか、ジムリーダーにも）高い値段だし、移動手段も徒歩よりか楽になってしまふ。これで強い奴らも手を抜くわけにもいかなかったってわけだな。

「狼煙、紅蓮、藍斗、がんばっていくぞ」

『おー！！』

抱っこされていた藍斗が腕を上げて、その声に反応して腰に付けていた、二つのモンスターボールが肯定するかのように振動した。

「おおっと、まさかの番狂わせだ！マサラタウン出身のコウ選手が3連勝したぞ！」

……なんかこの司会者、なめてたんだなボクたちのこと。ちなみに、マサラタウン出身となっているが、オーキド博士がなんとかしてくれたようだ。偽造かよ、とかあまり気にはいけない。

「さて、次のバトルはどうしようか」

『オレ、出たいですー!』

「いや、藍斗はもう戦っただろ？」

『むーっ!』

ジョーイさんから、藍斗の出場許可はもらっているが、一バトルだけなら、と、くぎを差されている。だったら何故にイベント参加勧めたし。

『そうですね、私が出てもよろしいでしょうか?』

「と、言ってるが」

『……ああ、別にいいぞ』

と、いうことで、四戦目は紅蓮が戦うことになった。まあ、最後に相棒とつていうシチュエーションってよくあることだもんな。その相棒のやる気がないんだがな。

『なんか言ったか?』

「いや、何も？」

「いけっ、ユンゲラー!」

第四戦目の相手トレーナーはユンゲラーを繰り出してきた。うーん、狼煙だったら相性良し、藍斗だったら相性悪し、だな。

「気を引き締めていくぞ、紅蓮」

『紅蓮にい、がんばってー!』

『ふふ、もちろんですとも』

既にバトル場に出ていた紅蓮が当たり前のように言う。よし、メ
ンタル面も大丈夫そうだな。

ちなみに、藍斗はボクの足元で座って観戦するようにバトル場を
見ていた。バトル場内に入っていなければOKらしい。

「それでは、バトル始め！」

「ユンゲラー！リザードにねんりきだ！」

「紅蓮、左によけてくれ！」

『分かりました』

バトルが開始されると同時に、相手は素早い指示で攻撃してきた
が、これくらいの攻撃で当たってしまう紅蓮でもない。

「よっしゃ、ユンゲラーにひの「テレポートだ！」はあ!？」

今度はこっちの番だと思って牽制技を仕掛けようとしたが、ユン
ゲラーの姿が消えてしまった。

『いったい、どこに……』

「今だ！かみなりパンチ！」

「！後ろにメタルクロー！」

辺りをキョロキョロ見回していたがボクの声が届いたらしく、メ
タルクローを放てる状態で後ろへ振り向いた。と、同時にユンゲラ
ーが現れてビリビリと音を放っている右拳で紅蓮を殴ろうとしてい
た。

『！』

『っ！』

咄嗟にメタルクローを出して攻撃したのだが、どうやらダメージを受けたのは紅蓮の方が多かったらしい。

「ユンゲラー、一旦離れろ！」

『はい！』

またユンゲラーの姿が消えて相手側のところにいた。ちっ、またテレポートか。

ゲーム上のバトルではあまり意味がない技であるが、実際のバトルでは回避に一役買ったたり、奇襲に使えるようだ。

『全く、厄介な相手ですねえ。姿を消して、尚且つ近づいて攻撃するなんて』

本当に、厄介だな。あれ、かみなりパンチって確か物理技に移行したからそこまでダメージがいくものなのか？

『……マスター、あのユンゲラーさん、相当な実力の持ち主ですよ』
『あと、メタルクローあたってたけど、だいじょーぶ、みたいだよ』

マジでか。藍斗もちゃんと見ているんだな。

『えへへー』

『マスター、次がきますよ！』

「ああ、ひのこ発射の準備だ」

既にユンゲラーはテレポートをしていた。次に現れた時には、パ

ンチ放たれる前にひのこで攻撃だな。

「甘いね。そこからサイケこうせんだ！」

「なっ!？」

紅蓮の立っている位置の上空からサイケこうせんが放たれて、見事に紅蓮は当たってしまった。

——ポケモンセンター

あの直撃のあと、紅蓮はなんとか持ちこたえていたのだが、結構なダメージだったらしく、後ろに倒れて気絶してしまった。

俗に言う、戦闘不能だ。

「バトル大会、残念だったわね。はい、あなたのポケモンたちは元気になりましたよ」

「……ありがとうございます」

あのバトルの敗因は、ボクの指示ミスだ。一回目に後ろへとテレポートしたものだから、二回目も死角をとっての後ろだと思ってしまった。

上空というのも一つの死角なんだよな。

『おい、どこに行くんだよ』

……いつの間にか部屋を通りすぎていた。
って狼煙、お前いつの間に出てきた。

「悪かった、紅蓮」

『いきなりボールから出してなんですか』

「さっきのバトルのことだ」

部屋に入っただけに、ボールから紅蓮を出して謝罪することにした。

『ああ、あれですか。別にマスターが全部悪いって訳ではないんですから』

「いや、でもな」

『マスター』

紅蓮はむっとしたような、それでも微笑んでボクを見上げていた。

『背後を取られたとき、メタルクローで応戦するという作戦を建てられるんですよ？ あれぐらいで凹まないでください』

『そーだよ、コウも紅蓮にも、頑張ってたもん！』

『たしか、ニンゲンの言葉にもあるだろ？ ……ええとな、失敗は成功の素、って』

「……ありがとな」

本当に、ポケモンの言葉が解るようになって良かったと思うよ。分からなかったら絶対引きずっていただろうし。

『では、負けたバトルの反省はここまでにして、大会で一勝ずつした私たちのご褒美を考えてください』

『オレ、チイラのみポケモンフード！』

『……』

「へいへい、分かりましたよ」

まあ、一応夕飯のメニューのランクを二ランク上げればいいか。

第十一話 バトルは楽か苦か（後書き）

紅蓮『あ、せつかなので作者さんが夕飯を豪勢におごってください』

いや、お金が

紅蓮『私を負かせたくせにですか？』

.....。

藍斗『コウー、どうかしたのー？』

コウ『いや、なんでもないよ』

狼煙『.....腹黒え』

第十二話 連れてこられて（前書き）

あれだね。僕はバトル描写苦手なんだね
コウ「んな今更なこというなよ」

狼煙『……で、今回のタイトルもよくわからないな』

ああ、別に意味という深い意味はないよ？

藍斗『えー？』

紅蓮『まあ、この文章じゃそうでしょうね』

…… 十二話スタートです

第十二話 連れてこられて

「いやー、やっぱりいい腕してるんだから、絶対勝てるって信じているぞー!」

「……そいつはどーも」

……はい、バトル大会を終えたコウでーす。

バトル大会ではいろんなお店が軒を連ねていたので、屋台でも巡るうとしていたのだが、ポケセンから出た直後にジムの前へと連れて行かれた。

「キミの実力でなら、互角に戦えるだろう! 明日の挑戦のために予約でもとって、自信を持って挑んでくれ!」

「……はあ」

そう言って、連れてきやがった男は去っていった。と、思いきやその場に立ち止まってこっちを見始めた。おいおい、逃げようにも逃げねえじゃねえか。

『コウー、どーするの?』

「じゃあねえ、ジム戦の予約でもすつか」

『わーい!』

豪勢な夕飯にして一夜があけて、ボクたちは再びジムの前まで来た。

幸運か悪運か、偶然にも明日の朝一にジム戦の予約を受けることが出来た。畜生!

おっと、こんなことしてる場合じゃねえ、早く入らないと。

受付でトレーナーカードを差し出して、本人確認がとれたあと、バトル場への案内をもらった。……意外と、内部は広かった。どうやら一部では室内温水プールとして開いているらしく、さっきから小学生低学年の集団がうかがえた。朝から元気だな。

「はい、こちらのバトル場でジムリーダーがお待ちしてます」

「ああ、ありがとうございます」

みんな、初のジム戦、がんばっていくぞ。

「最初はこの子よ!」

ハナダジムリーダーのカスミはヒトデマンを繰り出してきた。ちなみであるが、カスミの格好はいたって普通の普段着、ハイニージーンズであるので、男子諸君はガッカリしないように。さてと、昨日話し合って誰が出るか決めてたし、迷わず行くか。

「いつてこい、藍斗!」

『おっけえー!』

今回のバトルルールは二体ずつのシングルバトルである。なんでも、バッジの持っている数や手持ちのコンディションによって、何体で戦うことにするか決めるようだ。

今回はバッジを持っていないと言うことで、二体ずつとなった。

まあ、しょうがない。

「それでは第一試合、ヒトデマンと……えー、リオルのバトルを開始します！」

ああ、カントー地方じゃリオルって珍しいもんな。

「それでは、バトル開始！」

「ヒトデマン！ 水中に潜って！」

『リヨウカイ！』

バトル開始するやいなや、ヒトデマンは指示通りにプールにはつてある水中へと潜っていった。

あ、水タイプを扱っているジムらしく、バトル場は浮き島があるプールである。……まあ、そうだろうと思って紅蓮にはお休みをとってもらったが。尻尾の炎に関わる。

「藍斗、何を仕掛けてくるか分からないから注意しろよ」
『うん！』

おお、いい返事だ。ちゃんとそこは躡ておいてよかった。

「ヒトデマン！ こうそくスピンよ！」

よっしゃ、一発目からラッキーだな！

「藍斗、カウンターだ！」

回転しながら向かってきたヒトデマンに対して、藍斗は上手く左の拳をぶつける事が出来た。が、さすがに低威力の技をカウンター

しただけあって、そこまでダメージを与えられていない。
けど、チャンスは生み出せた。

「退かれる前にはっけい！」

『てえい！』

カウンターはこうそくスピンの回転速度を遅くさせるために使った。そうなってしまえば、あとはこっちのものである。

藍斗は左拳を一旦引いて、そして両手同時につきさした。そういや、藍斗って左利きなのか？さっきのカウンターといい。

「ヒトデマン！みずのはどうよ！」

『タア！』

「！ みきつちゃえ！」

『おっけえー！』

はっけいによってダメージを受けていたヒトデマンであったが、体制を立て直し藍斗にみずのはどうを放った。が、みきりを使って藍斗はみずのはどうを避けた。

本当はあの技のためにとっておきたかったのだが。

「いまよ！スピードスター！」

「でんこうせっかで避けれるだけ避ける！」

藍斗から離れてから、ヒトデマンはスピードスターを放ってきた。やっぱり、必中技使ってきたか。それを考慮して、みきりを用意していたのだが、しょうがねえ。でんこうせっかでスピードスターを避ける藍斗であるが、さすが必中技。水面や浮き島に激突して消えてしまったのを除いて、藍斗を追尾するかのように命中してしま

った。

『いったあ!』

「藍斗!」

なんとか倒れることはなかったが、次の技を受けたら倒れてしま
いそうだ。

しょうがねえ、こうなったら交代するし

『コウ、最後までやらせてくれるんでしょ!』

……藍斗?

『オレを信じて!』

そう言っ、左の腕を前方にかまえてヒトデマンを睨みつけた。

……しゃあねえ、やってやろうじゃねえか!

「藍斗、でんこうせっかで近づけ!」

「もう一度スピードスターよ!」

素早く動いて浮き島を渡り跳ぶ藍斗に、ヒトデマンのスピードス
ターが飛んでくる。

だけどな、あの技を忘れてもらっちゃ困るぜ!

「スピード維持してみきりだ!」

『おっけえー!』

『!?!』

「なんですって!?!」

藍斗はスピードスターが当たる直前に姿勢を低くして、スピードスターの集合体の下を通り抜けていった。対象物を追尾するようにスピードスターは下へと飛んでいくのだが、浮き島や水面にぶつかって消滅してしまった。

まあ、昨日の短時間で身に付けれるとは思いつたけどな。

「そのまま突っ込め！」

「みずのはどうで攻撃よ！」

思いもよらぬ回避に驚いてしまっていたようだが、すぐに指示を出してきた。さすがジムリーダーだな。

藍斗とヒトデマンはお互いの技を受けてしまったらしく、互いに後方へと吹き飛んでしまった。どうやって技が決まったのかは、こちら側では見えなかった。

「ヒトデマン、リオル、共に戦闘不能！」

「藍斗、お疲れさま」

「……うん」

「んな声出すなって。特訓の成果も出せて、相手を倒せたんだからな」

「……うん！」

よし、いい返事だ。

「コウ君、次のポケモンで勝負の行方が分かるわよ」

「ええ、でもまだ勝つ気でいますから」

「いい心がけね！いくわよスターミー！」

『……………』

やっぱり進化系できたか。ゲームでは何回も倒されまくったが、絶対に勝ってやる。

「いくぞ、狼煙」

『ああ』

「第二試合、スターミーとグラエナのバトル、開始！」

——某日深夜

「ユ、ユンゲラーが……………」

「うーん、どうやら君じゃないみたいだね」

「ヒイ——！」

「でもさ、一応強いみたいだから

チームの計画が終わるまで、眠っててよ」

第十二話 連れてこられて（後書き）

（辺りキョロキョロ見回して）

……よし、いないね

はい、ハナダジムでのバトルが続きそうですが、次話では終わっています。ちょ、いわおとししないでください！

ちなみに最後の部分ですが、まさかの暗躍キャラ登場です。彼が次に登場するかは全く決めてません（笑）

行き当たりばったりですが、これからもよろしくお願いしまーす
！！

（2 / 9 「でんこうせっか」となるはずのセリフが、「ぜんこうせっか」になっている誤字が報告されました。本日の7時半過ぎに修正を行っておきました。これからもこの小説をよろしくおねがいします！）

第十三話 ヤマブキイロ（前書き）

わーい、この話でストックが切れたよー（笑）

紅蓮『いきなり読者に意味不明なことを言っで、早く書いてくださいね』

……はーい。

コウ「たしか、前はハナダジムのバトルだったけど、後書きで言っていた通りにバトル後の話なんだよな」

それ言わんという！

藍斗『それでは、どーぞ！』

第十三話 ヤマブキイロ

「本当に、取っちゃったなあ」

『いいことじゃないですか、勧めた人のマヌケ面見れたんですし』

『紅蓮、藍斗の前でそんな言葉使うな』

『バトルがんばったもーん』

へい、さっきまでハナダジムでバトルをしていたコウツス。

第二試合の結果は、狼煙の活躍によりスターミーを倒して、見事ブルーバッジを手に入れることができた。

そのブルーバッジは、一緒にくれたバッジケースにしまつて、バッグの奥に入れてあるが。

それにしても、この道路は緩やかな下り坂だから、自転車ゲツトしていれば楽だっただろうなあ。

『あつ、おいえが見えてきたよ！』

「よし、ヤマブキシティに今日は泊まるとするか」

ああ、周辺に人がいないことを確認して会話しているので、変人を見るような目をつけてないので、心配しないように。

……さすがにポケモン初代のように、警備員のワガママで入れないことはないと思いたい。

よかった、警備員の機嫌は良好であった。笑顔でボクたちを迎えてくれた。

『わー、いっぱいいっぱいー』

『……うぜえな』

『本当にここは都会ですねえ』

『ここがヤマブキシティか』

ヤマブキシティの北側のゲートから入ってきたのだが、さすが都会。人がいっぱいいる。

「さてと、急いでポケセンポケセン」

ボクはみんなをボールへと戻して、街の南側に建っているポケモンセンターに向かった。できる限り、西側から回って。いや、今の体つきでカラテ道場の前を通ったら「健全なる」うんぬん言われて勝手に連れられて鍛えられそうだったからな。

さすがにゴリマツチョになる予定は毛頭ない。

……そういや、少しは体力ついてきたな。バテることなくなってきたし。

無事に道場から勧誘されずにポケセンまでたどり着いた。多少、人混みに入って体力を使ってしまったけどな。

みんなをジョーイさんに預けたし、オーキド博士にも連絡した。

ここで他にも人が居たら会話できるが、偶然にもロビーに人がいない。街探索をしようにも、道場関係者に見つかる可能性もある。ここは部屋に行つて時間でもつぶすか。

『なあなあ、そのニンゲンさん』

どこからか声が聞こえたが、「ニンゲン」って言ってるからポケモンだろうな。

『おーい、その暇つぶしを考えていたお兄さんのことだよー』

あ、やっぱりボクのことか。

仕方ないので声がする方向を見てみると、ベンチの下にピカチュウがいた。

『おー、やっと見てくれた見てくれた』

そう言っ、笑みを向けてきた。

「ほら、ミックスオレだ」

『へへっ、ありがとーな!』

なんでもこのピカチュウは、ヤマブキに入る前にボクが狼煙たちと話しているところを目撃していたらしく、ここまで着いてきたらしい。全く気づかなかった。

さすがに人が居ないとはいえ、会話しているのを見られたら（まあ、他の人には独り言と思われるだろうが）面倒くさくなりそうなので、部屋へと連れて行った。ミックスオレはピカチュウのリクエストである。このやろっ。

「で、ボクに何か用でもあるんだろ？」

『ん、あ、おう、……なー、その前に開けてくれ』

ミックスオレを飲むためにプルタブと格闘していたピカチュウであつたが、諦めたらしくボクに渡してきた。

まあ、そう言われて開けてあげるボクもボクだが。

『サンキュー!』

ピカチュウはプルタブの開いたミックスオレの缶を受け取ると、ゴキユゴキユと飲み始めた。

『パァー、うめえ!』

『お前はおっさんか』

『いや、まだまだ若い方だぞ?』

うん、その発言で充分におっさん確定じゃねえか。

『でよー、何を話したかったかっていうとだな、』

『ああ』

『いや、単に珍しいからニンゲンと会話したかっただけだから、そんな期待した目をするな』

ああ、なるほど。つつーか、顔に表れてたのか。やべえやべえ。

『でよー、そのあとどうなったかわかるか?』

『どうなったんだ?』

『通りすがりのラフレシアがコラッタたちにねむりごな仕掛けて、無事に終わったんだよ』

ピカチュウの言われたとおり、暇つぶしに会話をする事になった。っていつても、このピカチュウがほとんど喋っているようなものがあるが。

話の内容?今のは二匹のコラッタが一つのオレンの実を見つけて、

喧嘩しそうになるっていうやつだ。最後が意外なオチだったけどな。他にはメノクラゲ大量発生とか、コイキングがじたばたを使ってバトルに勝ったとか、まあ、そんな感じだ。

野生のポケモンでも、旅しているのか。

『そーいや、そろそろお仲間さんの時間じゃないかな?』
「ん? ああ、本当だ」

気がつけば、ジョーイさんに言われてた時間になっていた。

『それじゃ、俺はこの辺で』
「なんだ、帰っちまうのか」

そう言つと、その言葉を予知していたらしく微笑んだ。

『ただ単に、不思議な力にキョーミをもっただけだからなー。そんなじゃ』

「ご丁寧にも、窓を開けて近くに生えていた大木へと跳んでいった。あれ、窓からでてるのは丁寧ではないか。」

『コウー、ただいまー!』
「……まさか、出したと同時に飛びつかれるとは思わなかった」

ロビーへと行って、ジョーイさんからボールを受け取った、ら、藍斗が勢いよく飛びだしてきた。ああもう、ジョーイさん笑わないでください。そして仕事に戻らないでください。

『なあ、どこかで他のポケモンと触れあっていたのか？』

いつの間にか狼煙と紅蓮も出てきていた。こんなんでいいのかモンスターボール。

「ああ、さっきまでピカチュウとな」

『……そうか』

『で、そのピカチュウさんはどちらに？』

「いや、もう帰ったぞ」

そう言つと、『そうですか』と紅蓮が言つて、狼煙は黙っていた。おい、尋ねてきたのはお前だろうが。

「よし、明日はクチバシティに行くぞ」

『へえ、マスターのことだからタマムシにでも行くのだと思ひましたけど』

「カントー地方のポケモンだいすきクラブがあるからな。ついでに、停泊している船とかも見ようかとな」

『オレ、フネ見たいですー！』

ボクの腕の中にすっぽりと入っている藍斗が興奮しているようだ。

「よし、それじゃあ部屋に戻るとするか」

またもや偶然にも人が居ないロビーに居座るわけにもいかないの
で、部屋に戻ることにした。

「おい、狼煙。部屋に行くぞ」

『……聞こえてる』

なんだ、さっきから黙っているから聞こえてないのかと思ったじ

やないか。

ボクはそう思いつつ、部屋の方へと歩いていった。

『あの匂い、本当にピカチュウなのか？』

立ち止まっていた狼煙の独り言は、残念ながら距離があつたためボクの耳には入らなかった。

第十三話 ヤマブキイロ（後書き）

狼煙『……なんだったんだろうな』

さーで、次話はクチバシティだよー！

紅蓮『そのようなこと言う暇があるのでしたら、早く執筆しなさい』
……はーい

第十四話 ほのぼのクレープ（前書き）

コウ「この話のタイトルなんだよ」

いや、タイトルどうしようか考えて考えたら、こんなのができちゃった！っていうノリ

狼煙『ノリかよ』

ノリだよ

紅蓮『そのドヤ顔ウザイです、本当にやめてください』

……えーと、第十四話

藍斗『はっじまるよー！』

第十四話 ほのぼのクレープ

『……トレーナー、多すぎましたね』

「ああ、……そうだな」

翌日ヤマブキシティから旅でて、南側のゲートを出た。

そしたらトレーナーがいるわいるわで、ポケモンバトルを連戦することになってしまった。畜生、たった一戦のつもりだったのに、次は僕、次は私……のエンドレス。

バトルが好きな藍斗も、モンスターボールの中でぐったりし、狼煙にいたっては満身創痍な状態である。

『……ねむりごな使える方がいれば、逃げ出すところ、その先言うな』

確かにいい方法だと思ったが、なんちゅうこと言うんだ。

『おや、マスター。そろそろ街ですよ』

「お、マジか」

とうとう潮風香る、クチバシティへと近づいてきた。

……よし、急ぐか。

潮風が香ったときに走り始めたボクたちは、クチバシティへと入らないなやポケセンへとかけだしていった。連戦のバトルに気を張っていたらしく疲れており、ジョーイさんや博士との会話で息切れ

が多かった。ジョーイさんに肩を揺すられるまで熟睡していたのはここだけの話だ。

『……で、この街では何を『フネを見るのー！』ああ、そうだったな』

そういや藍斗はテレビとかで船が出てくるとかじりつくように見てたもんなあ。

ボクも含めて全員体力も回復したし、まだ部屋の中で休むにも時間が余っているので、探索をすることに決めた。

ポケモンだいすきクラブも同じ方向にあることだし、行ってみるか。

『そういえば、あの無駄に大きな建物はなんですかね？』

「なにが、でかつ！」

なんだあのデカイ建物は！ゲーム上であんなのなかったはずだぞ！！

いや、待てよ。確かあそこはワンリキーたちが地ならししたにも関わらず、資金不足のせいで建物を建てることができないって言うてたじいさんの場所じゃねえか？

……資金できたからって、こんなでっかい建物造りやがって。

『早く行こーよー』

「あ、ああ。そうだな」

抱き上げていた藍斗に促されて、やっと港の方へと歩き出せた。

つか藍斗、なんかボクに抱き上げられているのが定番化してないか？

「クレープ旨いな」

『……意外と、旨いな』『中がふわふわしてておいしーねー!』

港へ行く道中に、移動式のクレープ屋があったので、みんな分のを購入した。金はどこから? さっきの連戦バトルで稼いでおいたのでなんとか大丈夫だ。

最近になって、短パン小僧からも賞金をせび……貰えるように慣れてきた。慣れって恐ろしいな

『美味しいですねえ』

「辛そうなのよく食えるな」

紅蓮が食べたいと言って指したのは、ええと、クラブの実とフイラの実をトッピングしたクレープであった。

炎タイプだから、で決めつけていいのかこれは?

『いくらマスターでも、私を食べたら燃やしますよ?』

「安心しろ、よこどりしねえから」

つか、食いたくねえし。

『あー、おフネがいつちゃった』

『おい、藍斗の口元拭いてやれよ』

「げっ藍斗、口の周りチヨコが付いてるじゃねえか!」

まあ、ボクも小さいころやってはいたが。

ボクが口元を拭いてやると、藍斗は『えへへー』と笑っていた。

「さてと、船も行ったことだしそろそろだいすきクラブへと行く」
あの、すみません!」……」

……どうやら、ほのぼのといかないみたいだ。

「それでは、私はこちらの道路の方を捜しますので、あなたはデイグダのあなをお願いします！」「へーへー、分かりました」

おおう、女性なのに脚が速い速い。もうあんな所にいるよ。

ああ、何があったのかというと、なんでもポケセンにいた重病ポケモンがまだ完治してもいないのに逃げだしてしまつたらしく、そのときに回復を終えてロビーに居た人たちに呼びかけて、みんなで捜しまくることになつたらしい。

『マスター、さり気なく洞窟内を捜すつていう面倒なところを押しつけられましたね』

「それは言つな」

ボクだつてそのことには気づいている。でも、わざとなのか偶然なのか分からないんだから文句を言うことができない。つか、文句を言う相手はもう遠くに行っているから本当にできないんだけどな。

「しょうがねえ、行くぞ」

『おー！』

うん藍斗、お返事がよろしいようで。洞穴に入つてすぐは狭いが、階段を降りて行けばポケモンの力を思い知らされるほど広く、そして長い。

そついやここに出てくるのって、デイグダやダグトリオの地面タイプばかりだよな。紅蓮には相性最悪だよな？ ……よし、あま

り出会わないようにしないとな。

そついや、探すポケモンもたしかここが苦手なタイプじゃ

『ん？』

「どうした？」

ふと狼煙が地面に鼻を付けて匂いを嗅ぎ始めた。何か見つけたのか？

『ちつ、急ぐぞ！』

「おい！」

『狼煙さん！？』

『狼煙にいまつてよー！』

叫んだかと思えばいきなり洞窟の奥へと走り始めた。このやろつ、コンパスの差を考えると！

『おい、こつちだ！』

「だから待てつつの！」

『！』

『この匂いは……』

狼煙の声がする方へ紅蓮と藍斗と共に、走っていくのだが、何かに気づいたらしく、慌てて走り始める。

つか、狼煙、お前、速ええよ。もう、見えねえし。

『マスター、こつちです！』

……よかった、紅蓮が優しい日だった。ボクが狼煙の走る姿が見えなくなったことに気づいてナビしてくれてる。

『……おや？』

「どうした、んだ？」

一緒にかけていた紅蓮が、何かに気づいたらしく疑問符を浮かべるようなしぐさをした。

そういうことができるってことは、体力に余裕があるってことだよな。ちくしょう、これが人間とポケモンとの体力の差ってやつなのか！

『コウ、なんか近づいてくる！』

ちっ、こんな時にかぎって！只でさえ手持ちが一体いないって状態なのに！

『藍斗、そこまで構えなくても大丈夫ですよ、マスターも』

『ほら』と指差した方向を見た。すると紅蓮の尻尾の炎が照らしで見えるところから、狼煙が出てきた。大量のディグダを引き連れて。

「狼煙、いきなり走りやがって」

『……たしか捜すやつって、コイツのことだよな』

そう言っつて、一端止まったディグダたちが再び動き始めた。

『うんせ』

『よっせ』

『どっこいしゅー…』

おい誰だ、最後のかけ声言った奴は。

だが、そんなことは言えなかった。代わりに言えたことは、

「ああ、このモココだろうな」

ディグダたちが頭――（あたま？）に乘せて運んできてくれたのは、

巻かれた包帯が取れかかっている、一体のモココであった。

第十四話 ほのぼのクレープ（後書き）

シリアスって難しいね！

コウ「タイトルどおりだったの前半だけじゃねえか」

あはは、それを言うな

コウ「紅蓮、なんでもいいから攻撃だ」

紅蓮「ふふ、分かりました」

え、ちよつと、紅蓮さん？なんですかその微笑みの顔と対照的に後ろから溢れ出てるオーラてき何かは！？

紅蓮「長つたらしい説明口調ありがとうございます」

ちよつと、怖いから！マジで怖いから！

狼煙「まあ、次話でもよろしく頼む」

狼煙「い！勝手に終わらせないでくれえ！

（2 / 2 3 紅蓮が自分の名前を叫んでいる部分があると報告を受けまして、本日12時ごろに修正しました。これからもこの小説共々よろしく願います！）

第十五話 PC内（前書き）

二週間ぶりー

コウ「今回は短いんだな」

いやー、そんなものだよ

狼煙『……会話が噛み合っていないぞ』

第十五話 PC内

ど、どうしてなんだ!?

そんな、嘘だと言ってくれ!

ま、待つてくれ、お願いだから!

……もう、ニンゲンなんか、ニンゲンなんか!

「……大丈夫だよな、あのモココ?」

『コウ……』

『大丈夫ですよマスター、ジョーイさんとラッキーさんが全力を尽くしてくれてますから』

ディグダたちに協力してもらい洞窟の入り口近くまで運んでもらったあと、紅蓮に手伝ってもらいながらモココをポケモンセンターまで運んでいった。

入り口に入って、ジョーイさんはボクたちの慌てぶりに素早く気づいて、すぐさまストレッチャーを用意してくれた。

そしてジョーイさんに連れられて、普段は立ち入れない救急待合室まで付いていくこととなった。

先ほどジョーイさんから、命に別状はないようですと言われたが、やはり心配してしまう。

『……そっいゃ、なんであのモココは脱走したんだ?』

「そついや、そつだな……」

重体患者であるモココはなんでディグダの穴に入ったのだろうか。それになんて脱走したんだろうか。トレーナーを心配させることになるのに。

『あのね、コウ』

「どうしたんだ藍斗？」

珍しくボクに抱っこされてない藍斗が哀しげな声で話しかけてきた。本当に珍しいな、そんな顔をするなんて。

『あの時、カナシイかんじょうを感じたの』

「あの時？」

『どうくつで、モココさん見たとき』

そついや、リオルって確か感情を感じることができるとポケモン図鑑に書いてあったよな。

それにしても、哀しい感情、かあ。いったいあのモココに何があったんだよ。

「……なあ、ちょっと聴いてほしいことがあるんだけどさ」

『いやな予感がしますけれど、聴いてあげますよ』

おい紅蓮、一言も二言も多いぞ。

『で、目覚めた本人を見張っておくのか』

「仕方ないだろ、ジョーイさんが詳しく教えてくれないんだし」

ずっと入院しているはずだから、ジョーイさんなら何か知っていると聞いたのだが、微笑むだけで何も教えてくれなかった。

『私のほうでもラッキーさんに聞いてみたのですが、そのような反応でした』

まあ、そういうことでジョーイさんをお願いして、モココの病室に付き添うと云うことで泊まることにした。紅蓮からは呆れられたが。

重病ポケモンを安静にさせる病室であるが、人間の病室と同じような感じであった。さっきまで、入ったことのない環境に好奇心いっぱい藍斗が見回していた。

『う、うう……』

『めざめたみたいだよ！』

そんなことを思い返していると、モココが目を覚ましたようだ。

「よかった、目が覚めたのか」

『！ ニンゲン』

安心してモココに声をかけたのだが、ボクを見るなり、キッと睨みつけた。

あー、これは……

「人間嫌いってヤツか？」

『っ！ 黙れ！』

傷はまだ癒えてないために痛みが走るようだが、それに耐えつつ、

こちらを睨んで起き上がった。

『……おい、また傷が広がるぞ』

『っ、ニンゲンに懐いているヤツに言われる筋合いなんかない!』

『あゝ!?!』

「狼煙、落ち着け」

どうやらこのモココ、人間の手持ちになっているポケモンにまで嫌悪感があるようだ。

なるほど、質問したときに、ジョーイさんが苦笑いしたのもなんとなく分かった気がする。

『で、ニンゲン、どうする気だ。生憎（あいにく）ニンゲンの仲間になる気なんかないぞ』

「あー、じゃあ傷が癒えるまでここにいればいいんじゃないか?」

狼煙がさっき言ったとおり、まだ怪我しているんだしな。

「一応言っておくけどな、捕まえようとして助けたわけじゃないぞ?」

『おい、偽善（ぎぜん）者ぶってんのか?』

……このモココ、結構荒（すさ）んでるな。

『紅蓮にい、ぎせんしゃ、ってなにー?』

『誉められてはいない、って思ってくださいね』

紅蓮、オブラートに包んでくれてありがとう。

「まあ、偽善って思われてもいいけどな」

『ニンゲン、お前、言葉解るのか！？』
「まあ、な」

今ので会話が成立していることが分かるや否や、モココは驚いた顔をした。ああ、この反応いつぶりだろうな。そうだ、ハナダシテイのポケセンでのラッキー以来だったか。

『まあ、先ほどから会話が成立していましたが』

紅蓮、笑顔でそんなことを言うな。

『なあ、本当に何の見返りもなく助けたのか？』

『……コイツはそんなヤツだ』

『マスターはそういう方なんですよね』

『コウはやさしいよー！』

モココの声に、狼煙と紅蓮、藍斗が返してくれた。いや、ボクはそこまで優しくないぞ？

『……なあニンゲン、お前愛されてんな』

「まあ、特に狼煙がそういうこと言うとは思わなかったけどな」
『は？』

なに言ってたんだ、という目で狼煙がこちらを見ているが、ほとんど無言でいるから当たり前だろ。

相棒（パートナー）だからと言って、全てが全て、以心伝心出来ないもんだぞ。

『本当に、仲いいな』
「どーも」

第十五話 PC内（後書き）

ふう、少々力がつきかけたよ。でも、充電したし、頑張っていきたいと思います

紅蓮『いっぞやみたいに、誤字がなければいいですけどね』

……

第十六話 桃色の話と灰色の話（前書き）

更新しましたー

コウ「このタイトルって……」

紅蓮『あまり隠してないですよね』

まあ、いいじゃないか。こういうのもオツだよ？

コウ「作者、頭覚醒してこい」

藍斗『それじゃー、はっじまるよー！』

第十六話 桃色の話と灰色の話

『なあ、自分の昔話聞いてくれないか？』

電球の明かりが付いていない部屋の中、紅蓮の尻尾の炎だけで部屋が灯されている。そういや、電気点けてなかったな。

病室のベッドで横たわったいるモココと、そばにいるボクと狼煙、紅蓮しかない空間であり、とても静寂していた。時々であるが、ジョーイさんとラッキーの足音が廊下で響いているくらいである。

あと、藍斗は眠ってしまったため、ボールの中へと戻しておいた。

「話したくないなら、別に話さなくてもいいぞ」

『自分の言葉が分かるお前だから、言いたいんだよ』

こちらを見つめる視線からは真剣であり、悲しそうだった。

「……無茶しない程度にな」

『わかってるさ』

『自分はここ、カントーの出身ではなくて、ジヨウトの出身だ。その頃はまだ進化してなくて、メリープだった』

モココの話聞くことになって、改めて椅子に座ることにした。

『その頃に、一人のニンゲンにゲットされたんだ。そいつは自分たちを大事にしてくれたんだ』

『……いい、トレーナーだったんだな』

『ああ、他の奴らにもブラッシングとかしてたしな』

狼煙の言葉を聞いて、モココは先ほどと比べて少し微笑んだ。

『まあ、そいつはトレーナーになって、いろんな町を旅していったんだよな……』

そこで、モココの話が途切れた。言おうにも、思い出したくないようだ。

『マスターに伝えたいことがあるのですなら、頑張つて声に出してください』

『いや、辛いんだつたら無理するなよ』

『いや、大丈夫だ。そいつはポケモンバトルを純粹に楽しんだり、トレーナー同士の交流をしたりしてたんだ』

ここまで言うと、モココは暗い顔をした。

『でもある日、みんなで挑んだフルバトルで大敗。別に誰も悪くない、挑んだ相手が強かったただだった。けど、あいつは違った』
「違ったって、なにが」『……まさか、』

不意に、狼煙が声を発（はっ）した。

『ああ、そのまさかだよ。』

自分たち、ポケモンのせいにしたんだ』

時間が止まったような感じがした。ポケモンのせいにしたって、
どういうことだよ。

『それから、アイツは急変したんだ。トレーニングも厳しくしたし』
……』

『自分なんか、一番負けるのが多かったから、よく怒られてたし』
……… やめろ』

『それでも弱かった自分は、』

『頼む、やめてくれ！』

モココの話を遮るように、狼煙が大声を発した。なんか、久しぶりに大声を出したのを見た気がする。

「どうしたんだよ、狼煙」

『狼煙さん、どうしたんですか？』

『……コウ、俺がカントー出身じゃねえ、って知ってるだろ』

ゆっくりと話かけると、顔を俯いていたがポツリとつぶやき始めた。

『……俺は、乱獲されて売買されるために連れてこられたポケモン
なんだよ』

「なっ！？」

ボクは驚いてしまったが、よく考えればゲーム上でもモブキャラ
でいたもんな。

でも、まさか身近で、いたなんて……。

『俺がいた群れのボスは、ヒドい人間に捨てられた人間嫌いだった。

だから、小さかった俺も、人間を信用するな、って教えられてた」

『あの時に学んだことは覚えてるさ』と言って、一呼吸入れた。

『変な格好をしたニンゲンたちに見つかって、群れ総出で応戦したんだけど、戦ったヤツも逃げ出したヤツも、群れ全員が檻に入れられちまったんだよな』

「狼煙……」

狼煙に、そんな過去があつたなんて、考えられなかった。

『……そんな悲しい顔すんじゃないよ』

狼煙がボクの座っている椅子の近くまで来た。ううむ、最近、顔に出やすくなったな。気をつけないとな。

『俺はお前と出会えて、今が楽しいって思ってたからな』

……素直に言えば、嬉しかった。うん、嬉しかったんだけど、何かひっかかったような気がする。気のせいかな？

『良かったじゃないですかマスター、普段無口な狼煙さんから感謝されている言葉が聞けたのですし』

「ああ、まあ、そうだな」

『……おい紅蓮、一言多かったぞ』

『はて、なんのことでしょうか？』

いつも通り、紅蓮は笑顔で狼煙に返事をした。それに対して狼煙は、紅蓮を睨みつけている。おお、両方ともこええ。

『もう一回いつけど、愛されてるな』

ベッドからこちらを見ていたモココがそう言った。
すると、真剣な顔つきへとなって、僕の方を見た。

『なあニンゲン、もう一つお前に話したいことがあった』
「ん、なんだ？ まだあるのか？」

暗い話をしたあとに、まだ話したいことがあるとは。いったい、
どんな話なんだ？

『お前を見込んで頼みがある』

そう言ってから微笑んで、

『自分を、お前たちの旅に連れてってくれないか？』

と言った。

『……お前！』

『おやおや』

「いや、ありがたいけど、人間のこと嫌いじゃなかったのか？」

ボクがそう言つと、うつすらと微笑んできた。

『ああ、嫌いだ。けど、お前みたいな自分たちポケモンを大事にし
てくれるニンゲンもいるって分かったし、それにな、お前のこと
が気に入った』

あっさりと『嫌いだ』を微笑んだ状態で言うとは。でも、無意識

に腹黒い紅蓮のと違って、爽やかに純粹で言っている。

『マスター。変なこと考えてると、燃やしますよ?』

「じゃ、これからもよろしくな」

『あ、ああ。よろしく』

紅蓮にそう言われ、すぐに思考を転換させて、モココに手を差し出した。モココは紅蓮の言葉に戸惑いながらも、ボクの手を掴んで、握手のようになった。

後ろで『はぐらかしましたね』と聞こえた気がしたが、気のせいにしておこう。

こら、後ろをチラチラと確認しないでくれ。

『んー、どうかしたのー?』

さっきまでボールにいたはずの藍斗が、まぶたを擦りながら話しかけてきた。

だから、そう簡単に開閉されて、……うん、モンスターボールについて突っ込むのはやめておこう。

『藍斗、このモココさんと一緒に旅することになりましたよ』

『んー、コウー、そうなのー?』

紅蓮の声を耳でピクピク動かしながら聞き、背伸びをしてからボクの方を振り向いてきた。

「ああ、明日の朝になったらジョーイさんに言って、一緒に行くことになるな。……まあ、傷が充分に癒えてから旅経つことになるけど」

『うむ、身体（からだ）が動かせるくらいにしなければな。これか

ら、よろしく頼むぞ』

こうして、ボクの手持ちに、

『うん、よろしくね！ モココのお姉ちゃん！』
黄色いからだの紅一点が加わりました。

『……は？ お前、ミスだったのか！？』

『？ ああ、そうだが？』

『なにを今更言ってるんですか』

あれ、狼煙気づいてなかったのか？

第十六話 桃色の話と灰色の話（後書き）

てな訳で、モココが仲間になりましたー！

狼煙『……おい、作者』

ん、どうしたんだ狼煙？

狼煙『なんで、俺がオチ扱いなんだよ！』

え、だって他の子たちは

コウ「ジョーイさんから聞いて、ポケモン図鑑で確認した」

藍斗「んー、カナシいのを感じちゃった時かなー？」

そして紅蓮にいたっては

紅蓮『一目見ただけで気づきましたけど、それが何か？』

だってさ。さて次回でモココのニックネームが決められるよ！

コウ「いま、どれにしようかで迷ってる」

地震で被災した方へ、頑張ってくださいと、言うよりも、あまり無理をしないでください。痛いときに「痛い」って言うように、泣きたい時には、泣いていいと思いますから

第十七話 海辺の長い話（前書き）

おそらくほのぼのになったような気がする

コウ「このタイトル、あれだよな」

ええ、あれです。なのに、いつもより短めだけど。

狼煙『……おい』

紅蓮『うまく書き進めませんでしたからね』

うん、そこについては反省してる

藍斗『それじゃー、そろそろいつてみるー？』

えー、今回はモココの名前と、意外なアイツの欠点に分かります

藍斗『それではどうぞ！』

最近、藍斗が始めるようになってきたような……

第十七話 海辺の長い話

モココが手持ちに入ることになった翌日、ちゃんとジョーイさんに連れていくことを話したら、凄く驚いていた。無理もないよな、人間不信なポケモンを引き取るって言っただから。

反対されそうになったが、モココが懐きましたアピールをしてくれたおかげでなんとか許しをもらえた。

モココの怪我が完治するのに、あと五日くらい必要とのことらしいので、お泊まり延長となった。

「よし、ポケモン大好きクラブへと行くか」
『唐突ですね』

朝飯を食べ終えて部屋に戻ったときに言ったものだから、紅蓮にツッコまれた。

いや、だってなあ、

「昨日行く前に呼び止められたし、さ」
『……そういや、そうだな』

まあ、そのおかげで出会えたからな。

「それじゃ、行こうか」

「で、あるからにして」
「はあ」

「我が輩のギャロップちゃんは炎の色が綺麗に保っているのだよ」

「そーですか」

「いやー、ギャロップちゃんは我が輩に似て凄い子じゃのう」
「良かったですね」

そうだよ、会長の長話ってイベントがあつたの忘れてたよ！

さっきまで、みんないたのだが、紅蓮は窓辺へと移動して海を眺め始めた。藍斗は秘書らしき人に遊んでもらっている。

狼煙は足元にいてくれるが、伏せて寝ていやがる。このやろ
う。

「ということであるのだよ！」

お、やっと終わったか。

「おや、最短記録更新したのう！」
「……」

嘘だろ、今のが最短記録だと？ 朝に始まって、今は太陽が高い
位置にあるんだぞ？

『コウー、お話終わったの？』

さっきまで、会長秘書の人と戯れていたはずの藍斗が、ボクの足
元まできていた。抱っこをせがまれたので、しゃがんでから抱っこ
をしてあげた。ついでに、狼煙の頭を軽く叩いてやった。

『！……おい』

叩かれたもので跳び起きて辺りを見回し、ボクの方を睨みつけて
きたが、スルーさせてもらっう。

「ほっほっほっ、本当に仲がいい！　しかし、トリミングをあま
りしておらんようだが」

「え、ジョーイさんがしてくれるしいいんじゃない」

そう言つと会長は、チツチツチツ、と人差し指を立てて横に揺ら
した。

「確かにジョーイさんはやってくれる。しかし、トレーナーならば
野宿したときの日常もある！　その時にでも覚えておいて損はない
ぞ」

と言つて、ソファの方へと引つ張つた。いくら、モヤシつこの
身体でも初老の会長には力負けしない、と思つていたのが、意外と
会長は力があつた。

『おや、マスターお疲れさまです』

「ああ、マジで疲れた」

あのあと、一時間近くトリミングの簡単な技術を教わつた。……
なにあれ、簡単に、つて言つてた嘘だろ。

『紅蓮にい、さっきから外のほう見てるけど、どうしたの？』

そっぴや、トリミング指導を受けていたときも、ずっと眺めてい
たな。

『海を見ていたんですよ』

『うみー？』

「ああ、なるほどな」

優しく藍斗に話しかけるが、意外だったらしく藍斗は首を傾（かし）げるしぐさをした

そっぴや紅蓮と会ったのは、マサラタウンの海岸だったもんな。

『懐かしいですね、旅をしたくなっただのが海ですからね』

そっ呟いてから、ボクの方を見た。

『さて、マスターも指導を受け終わったことですし、帰りましょうか』

「ああ、そっだな。そろそろジョーイさんの診察も終わっているだろっし」

『…………』

このとき、狼煙の身体がピクリと反応した気がした。まあ、昨夜のことを知っているヤツには分かるだろうけどな……。

「見舞いに来たぞ」

『おお、やっとな来たか』

モココの病室へ行くと、ちゃんとモココはベッドの上で横になっていた。

『モココのお姉ちゃん、来たよー！』

『昨日と比べて、調子良さそっですね』

紅蓮が言っただとおり、調子が良さそっだ。顔色？ピンクの状態で

ある。

『…………』

そついや、昨夜になつて分かったことなのだが、

『相変わらず顔合わせてくれないな』

『…………うっせえ』

狼煙は女性（ポケモンだからメスか）と話すのが少し苦手らしい。モココがメスだと分かる前はちゃんと話せていたっていうのに。

「そつだそつだ。名前決めてきたぞ」

『相変わらずの早さですねマスター。いつ考えてたんですか』

…………まあ、ポケモン大好きクラブ会長の長い話で飽きたときだな。

「そんじゃ、名前発表するぞ」

『名前はつぴょー！』

藍斗が合いの手としてパチパチと拍手をしてくれた。本当に、いい子に育ちやがって。

「雷華（ライカ）って言うのはどうだ？」

『なんか、すごい名前だな』

ああ、自分でも驚くさ、このネーミングセンスには。ボクに子供が出来ても大変な名前をつけそつだな。

『雷華か、まあ、いいんじゃないか？』

「……ありがとうな、雷華」

こうして、モココの名前が雷華となった。さてと、まだ問題が残っている。

「ほら、狼煙。いい加減慣れろよ」

『……』

無口な相棒、狼煙である。この野郎、さっきから雷華の方を全く見ない。

『そうですよ狼煙さん、このままですと、ヘタレ、って呼びつけますよ?』

紅蓮がニコニコしながらサラリと言った。「呼ぶ」んじゃないくて「呼びつける」って、さも当たり前のように言い放つか?

『えーと、雷華ねえ、ヘタレってなーに?』

『あー、それはな、あー、……あとであのリザードに訊けばいいぞ』

紅蓮の気迫に圧倒されていたが、藍斗の声は聞こえていたようだ。

すると、決意したのかヘタレと呼ばれたくないのか、狼煙が雷華の方をみた。

『……雷華だっ たっ けな、よろしくな』

『お、おお』

短かったけど、伝えたいことを言えたらしく、またそっぽを向いた。

……まあ、これからも大丈夫そうだな。

第十七話 海辺の長い話（後書き）

はい、ということでモココの雷華です！

雷華『うむ』

コウ「それにしても、ネーミングセンスが恐ろしい」

まあ、読者の方々に名前だけで種族名が分かるようにしたかったからね

狼煙『……で、俺をあんなふうにし立てたってわけか？』

え、あの、狼煙さん？　なんで怒っているのですか？

狼煙『……それじゃ、思い出させてやろうか』

あ、えーと、次回をお楽しみに！

第十八話　。。。 (前書き)

ふう、明後日から4月だね

コウ「唐突にどうした？」

いや、ちよつと感傷に浸ってた

狼煙『……で、今回のタイトルは、思いつかなかったのか』

さて、今回は皆さんが知っているあのポケモンたちが出てきます。

それでは、どうぞ！

狼煙『強行突破するな』

雷華『ああ、自分はまだ治療中だから出てこないぞ』

第十八話

〇〇〇

やっと、雷華を退院させても良いという許可が出た。

と言つても、今すぐにといいわけでもなくて翌日に退院なんだけどな。

「それじゃ、明日はヤマブキシティ経由してタمامシシティに行くか、はたまたシオンタウンに行くかな」

「……西の道路から、南の街へ行くことも出来るだろ」

「あの洞窟を進んで、ニビシティに一度引き返すことも出来ますしねえ」

翌日の退院で雷華を引き取ったあと、次にどこの街に行くかを部屋に戻ってから相談していた。が、意外とルートがあるクチバシティ。ゲームのストーリー上ではヤマブキシティは通行止めだったからな。さて、どこに行くべきか。

つか狼煙、お前はこの前のヤマブキの人混みが嫌いなだけだろ。

『どうしようか？』

藍斗はボクたちの話し合いを部屋のベッドで寝っ転がって聞いていた。やっぱり、ストーリーらしく、「いわやまトンネル」行ってみるか。

『ヤッヒー、ばーんはー！』

すると、どこからともなくと言う声がした。いや、窓からだった。

『やつほー、佐々木（ささき）コウくん久しぶりー！』
「おい、いろいろと待て」

窓辺から声をかけてきたのは、ピンク色の身体と長い尻尾を持っている、ボクたち世代なら誰もが知っている伝説ポケモン、ミュウだった。

いや待て、どうしてミュウがボクの名前、しかも本名を知っているんだ！

『マスター、スゴい方と知り合いなんですネ』
「いや、ボクは会った覚えがないぞ」

紅蓮が驚きながら言っているが、全くもって、出会った覚えが全くない。つか、さっき窓の鍵を閉めておいたのにどうやって入ってきた。

『えー、テレポート使えば鍵なんてもの考えなくていいんだよ？』
「は？」
『なんで分かったかって？ エスパーだもん！』

……どうして言っていないことが分かったんだと聞こうとしたのだが、その前に答えられてしまった。エスパータイプのポケモンだからか？ それとも、伝説ポケモンだからか？

『もう、ミュウったら。ちゃんとしなさいよ』
『うわっ！』

藍斗が驚いた声をあげると、今度はセレビーが目の前まできた。
……また伝説のポケモンの登場ですか。

『ごめんなさいね、ミュウのこの性格は仕方ないのよ』

『ひどいなあ、いたって真剣な性格だよ？』

『どこがよ』

ミュウは自分の顔に手一（前脚？）を顔に当てて無邪気な顔をするが、セレビィにツッコまれていた。

『そーだそーだ、コウくんにお話があつたんだよねー』

「……ボクにか？」

いったい、伝説のポケモンであるミュウとセレビィが、ボクに何の話があるっていうんだ。

すると、先ほどのミュウの表情が、すっと消えた。

『どうしてキミが、ポケモンの世界へトリップしたのかだよ』

「！？」

どうして、初対面であるはずのミュウが、ボクがこの世界へトリップした理由を知ってるだと？

『ふふっ、驚いているみたいだね』

『あの、どうしてマスターのことを知っているのですか？』

ボクの驚いている顔を見て、先ほどのように笑い顔になったミュウに、紅蓮が話しかけた。

『ああ、その点については私から』

しかし、それに応えたのはセレビィであった。

『まず、皆さんが定めた、私たち伝説や神さまと崇めているポケモンたちにはテリトリー、分かりやすく言えば住処（すみか）があります。まあ、一部は使いとして各地を巡りますが』

そういえばゲームでも、その場所にしかないポケモンとか、地方を回るポケモンとかいるからな。

『その住処に、ときどき人とかが現れたりするのよね。まあ、駄目な人間さんにはお帰りいただいてるけど』

『僕のことを捕まえようとしたハンターは全員、海にテレポートさせて落としたりとかねー』

『……おぞましいな』

さらりとミュウが言った言葉に、狼煙が反応した。……うん、紅蓮で慣れすぎて、すぐに反応しきれなかった。

『何か言いましたかマスター？』

『コウくん？』

『悪い、進めてくれ』

腹黒コンビー（ボクの中で名称）に笑顔で見つめられたため、お話を黙って聞くことにした。いつも思うが、紅蓮の読みが恐ろしく鋭いな。そしてミュウも、こっちを笑顔で見るな。

『……じゃ、進めるわね。ここからが重要なのよ』

『とある僕たちの仲間のテリトリーエリアに、いつの間にか君が気絶して紛れ込んでいたんだよねー』

びし、とボクに指一（というよりも腕ごと）を向けて差した。
と、そんなことを思ってる場合じゃない。

いつの間にかいて気絶していただと？ しかも、伝説として謳われているポケモンの住処に。

「つて、どこのポケモンのところなんだ？」

『ああ、それは無理です。厳密に教えることはできません』

『と、いうよりも、そう簡単に行けるところじゃないんだよねー』
「そうか……」

……つてことは、各地を駆け巡っているポケモンじゃないんだな。

『まあ、詳しいことが分かりましたらお伝えいたしますから』

『と言うよりも、教えてあげてもいいと思ったら来るんだけどねー』
『ミュウ？』

『ごめんごめん、セレビィ』

この二人一（二体？）、さつきからまるで、漫才みたいに息があつてるよな。結構、長年つるんでいるのか？

『さて、ワタシたちはそろそろ帰らせていただきますね』

「え、もう帰んのか」

『まだ、やらなきゃいけないことがありますし』

セレビィは僕のほうを振り向かず、藍斗の近くにいたミュウを見ていた。

『もう、かえっちゃうのー？』

『ごめんねー、今度会ったときに遊ぼうね、あいとうん』

……ん？ いま、ミュウは、なんて言った？

『あいとうん、って、オレのことー？』

『そくだよー。そして、ろっしー、ぐれれん、ってね！』

藍斗とにこやかに話して、そのあと狼煙と紅蓮を指差して言った。

『……ろっしー』

『ぐれれん、って私のことですかね』

「ろっしー」と呼ばれた狼煙は無表情で戸惑っており、「ぐれれん」と呼ばれた紅蓮は微笑みつつも、少々戸惑っているようだ。
え、何でそんなことが分かるかって？ もちろん、勘だ。

『あ、そくだそくだ、のっしーに秘密の内緒話してあげるー』

『……あ、なんだ？』

そう狼煙が応えると、ミュウが狼煙の耳元まで近づいてきた。

『……………』

『は？』

ミュウが伝えたいことを終えたあと、狼煙の顔が歪んだ。いったい、何の話をしていたんだ。

『あ、そうそう。目的無き旅なんだし、あまり焦らないで気軽に巡っていつてねー！』
『それでは』

そう言ってから二匹はテレポートをしたらしく、光の粒子を放って消えていった。

『嵐のような、方でしたね。セレビィさんは大変でしょう』

『……全くだ』

『コウー、ねむーい……』

「ん、そろそろ寝る時間なのか？」

藍斗がまぶたをトロンとしているので時計を見てみたら、もう子どもが寝ている時間であった。しょうがない。いまのうちに寝ておかないと、明日歩いているあたりで具合悪くなったら大変だ。

「それじゃ、向かう方向は明日の朝に決めることにするか」

『そうですね』

『……………』

『おやすみー』

第十八話 ○○○（後書き）

コウ「ミユウのセリフがあやふや過ぎるぞ」

いや、あまり話しすぎると盛り上がりがここでハイになりすぎそうだったからね

雷華『考えた結果ってやつが、これってことか』

紅蓮『単に打ちまくっていたわけではないんですね』

……さてと、眠いので仮眠してくるか

第十九話 自転車必須（前書き）

お待たせしました、二週間ぶりの更新です！

狼煙『……なんだ今回のタイトルは』

紅蓮『サイクリングロードへと向かうつもりですか？』

いや、知ってる人は知っている自転車に乗る場所だよ

藍斗『えー、どこなのー』

コウ『ああ、そういうことか』

はい、わかった人がいるので本編へどうぞ！

雷華『楽しんできてくれ』

第十九話 自転車必須

『うむ、身体に異常なし』

「ん、そいつは良かった」

雷華が入院していたクチバシティから旅を再開したボクたちは、ヤマブキシティを経由して、シオンタウンへと行くことになった。それが決定した途端に、狼煙がいやな顔をしたが。

退院した雷華が、实力を見せたいと言ってきたため、狼煙たちはボールの中へと戻っていった。まあ、非常事態の時には自力でボールを開けるから大丈夫だろうな。

『あそこが、シオンタウンですね』

ああ、そうだ。実はヤマブキシティ東口のゲートを出たときに、シオンタウンまで一緒に行くことになったポケモン、サンドパンがいる。

――数十分前

「本当に、大丈夫なんだよな」

『任せてくれ』

雷華は自分の实力を見せたいらしく、ここの道路で出会ったトレーナーとのバトルをずっと言ってきた。

もちろん、近くの茂みに隠れて会話しているので、人からのいかな視線を感じなくてすむ。

「……じゃ、あんまり無理をしない程度にな」
『！ ああ、わかった』

……なんか、ポケモンたちに甘くなっているような気がするの
は気のせいだろうか。

まあ、雷華の実力が分かれば、トレーニングをどうすればいいの
か分かるしいいか。

『そのニンゲンさん、もしかして、コウ、って名前ですか？』

ふと呼ばれて、後ろへ振り返った。するとそこには、一匹のサン
ドパンがいた。

「なんで、ボクの名前を知っているんだ？」

『ズバットさんから、聞きました』

ズバット、か……。あ、もしかして。

『コウよ、何か心当たりでもあるのか？』

「ああ。なあ、おつきみヤマのズバットから聞いたのか？」

『ええ、そうですよ』

やはり顔で察したらしく、雷華が尋ねてきた。うーん、やっぱり
顔に出やすくなっているな。

『お願いがあります。あの、シオントウンまでご同行できませんで
しょうか！』

——回想終了

『ここがシオントウンなのか？』

この道路でのトレーナー戦は全て雷華ががんばってくれた。つか、レベルが高かったから全勝してしまった。

シオントウンと言えば、初代ゲームのBGMが恐ろしくて自転車に乗るプレイヤーが多かったなあ。ボクもその一人だけど。

いまはラジオ塔が建設されたせいか、町の雰囲気も明るく感じる。

『ご同行、ありがとうございました』

町の入り口に立っていると、サンドパンが頭を下げてお礼をして、駆けていった。

そっぴや、どんな用事でシオントウンに訪れるのか、聞いてなかったな。

「さてと、ボクたちはポケセンに行くか」

『あ、ああ』

ボクの声の聞いて、雷華の身体（からだ）が少し緊張状態になった。

「……雷華、大丈夫だって」

『！ ああ』

どうやら雷華の人間嫌いは、まだ治っていないようだ。バトルしていたときも、ポケモンではなくトレーナーのほうを睨みつけていたし。

そっぴや、狼煙も出会ったときは人間不信だったな。……話し相手になってもらおうと思ったけど、アイツ女嫌いじゃねえか。

『さてマスター、これからどうしましょうか』

「うーん、ラジオ塔に行くべきか？」

バトルでがんばってくれた雷華をジョーイさんに預けて、あまりロビーに人もいないので紅蓮を出してどこを観光するか話していた。大丈夫だ、あまり人はいない。

『ボールの中から見てましたけど、あのサンドパンさんはどこに行つたんですかね』

「……それじゃ、町のさまざまな場所を巡りながら探してみるか」
『普通の民家に唐突に入ってはいけませんよ』

流石に、それくらいは心得てるさ。

あの、あつさり見つかったんだけど。

折角だから姓名判断氏のところに行つて、ネーミングセンスを相談することにした。姓名判断するところでお悩み相談するなって声が聞こえそうだが、気のせいだろ。

そんな道を歩いていったのだが、民家を見つめている先ほどのサンドパンを見つけた。

『意外と早く、見つけてしまいましたね』

『何してるんだろーねー？』

しばらく見つめていたが、ふとサンドパンがこちらを向いたため、目線があつてしまった。

『あ、先ほどは、ありがとうございました』
「ん、ああ、気にするな」

サンドパンが頭を下げてきたため、声をかけてあげた。よし、他人から見たらボディランゲージに対して反応したように見えるよな。

『あの、またまたお願いしてもいいですか？』
『大丈夫ですよ、ちようどお暇でしたから』

紅蓮、お前が答えるな。
まあでも、暇だっていうのは嘘じゃないからな。

『実は、この家の中に入りたいのですが、どうやって入れればいいのか分からなくて』

『ここのおうちに入りたいんだねー？』

「あー、ここの民家に用でもあるのか？」

会話がかみ合っていないように思われるが、いくら人通りが少なそうなシオンタウンでも、人の目がある。変に会話してるってことが分かったらヤバいだろ？

『そうですね、ではマスターがこの民家のポケモンだと勘違いして、助けてあげるっていうのはどうでしょうか？』

「なるほどな、ここの民家のポケモンってことか」

『コウー？』

『マスター、意外と演技がお上手なんですな』

ボクがそう呟くと藍斗は首を傾げ、紅蓮に至ってはニコニコと笑顔で返してきた。

まあ、いいか。とりあえずはサンドパンをここの民家に入れてあげりゃいいことだし。そう思いながら、民家のチャイムが設置してある看板に移動した。

「あ、ここフジ老人の家じゃん」

第十九話 自転車必須（後書き）

コウ「えー、作者は狼煙に追いかけて回されている、んだっけ？」

紅蓮『ほとんど出番がありませんでしたからねえ』

雷華『何々、次のお話もシオントウンだとさ』

藍斗『それじゃ、二しゅうかん後にまた会おうねー！』

第二十話 やはり自転車必須（前書き）

一ヶ月ぶりですね

コウ「前回二週間後って藍斗に言わせてたくせにな」

まさかあそこまで忙しくなるとは思わなかったんだよ

コウ「……で、今回の話は？」

それは見てのお楽しみ、ってことで、スタート！

第二十話 やはり自転車必須

「あれ、ここどこだ？」

どうも、ポケモントレーナーになってしまったコウツス。

昼間にサンドパンをフジ老人の家に連れてあげたあと、そのときに居た子供たちと遊ぶことになってしまった。

まあ、紅蓮や藍斗はフジ老人のところに保護されたポケモンたちと遊んでいたが。

フジ老人の家を出てポケモンセンターに着いて、確か部屋で留守番させていた狼煙に怒られたんだよな。あのとき寝ていたお前が悪い。

で、夕飯を食べて寝たんだよな。あのオムライスはうまかった。

そして現在、真っ暗闇の中に立っている。

「……ああ、もしかして夢の中なのか？」

考えぬいた末に出た言葉に、暗い闇からは返答が聞こえなかった。それにしても、暗闇過ぎて気味が悪い。もう少し明るくならないのか？

そこまでご都合主義の夢じゃないようだ。

「全く、どうにかならないかな」

仕方なく、ボクはその場に寝ころんだ。全く未知の夢なので、こんな暗闇を行動したらどんなことになるか。

つか、いったいどうしたらこんな夢を見るんだよ。全く想像がつかない。

「うわっ、なんだ!？」

そんな事を考えていたら、いきなり地面が、いや、暗い空間が揺れ始めた感覚に包まれた。

「……ん」

『大丈夫だったかコウ?』

『……気分悪くないか?』

目を開けると、雷華と狼煙の顔が見えた。
やっぱり、今見ていた光景は夢だったんだな。暗くて景色とか見えなかったけど。

『ふむ、顔色は良さそうだな』

『良かったー!』

ボクの顔を見つめるやいなや、何故か顔色の確認をした。そして脇にいた藍斗がボクに抱きついてきた。……全く、話についていけないんだけど。

「なあ、なんでそんなこと聞くんだけ?」

『……ああ、実はな』

『ああ、マスターおはようございます』

身体を起こして狼煙の話を聞こうとした刹那、せつな紅蓮がにこやかに

声をかけてきた。うわあ、普段の笑顔じゃなくて、腹黒めの笑顔じゃねえか。

ふと紅蓮の足元を見ると、紫色の何かがいた。あれは、ゴーストか。なんで傷だらけなんだ？

『……実はな、あのゴーストがお前に呪いをかけようとしてたんだよ』

「は？」

狼煙の話をまとめると、ボクらが寝静まったあと壁を抜けてゴーストが侵入してきたらしい。それでボクに『のろい』を使おうとしたところを、藍斗が気配を感じたため紅蓮を起こしたらしい。さすが波導ポケモンの進化前だけはある。

それで安眠を邪魔された紅蓮が穏やかにゴーストとバトルをしたらしい。そしてゴーストが倒れそうになったと同時にボクが起きた、というわけだ。

『それで、何故マスターに呪いをかけよう？』

傷薬を使ってゴーストを回復させて、紅蓮が問いつめている。つか、ゴーストってデカいんだな、軽く紅蓮と同じ大きさなんだけど。いや、論点がずれてるぞ。

『いや、それはな』

『もう三度、メタルクロー喰らいたいですか？』 『わかった、言うからやめてくれ！』

紅蓮、お前トラウマになってやがるぞ。何したんだ。

『ちょっと、幸せそうだったから、嫉妬したんだよ「狼煙、噛みついてやれ」』……』え、ちょ、ギャー!』

いや、そんなことで嫉妬して呪われたらいくらボクでも怒りますって。そのあと、そのゴーストに教育的指導をして一（見事に疲れきった状態で）帰して、今度こそ朝まで寝ることにした。

あの後、何事もなかったらしく朝まで眠ることができた。と言っても、一番最後に起きたボクが10時であったが。

『それで、今日はどうしましょうか?』

「とりあえず、ラジオ塔を見学してからヤマブキに行つて、明日タムシシティに行こうと思つてるけど」

『……』

「うん、嫌そうな目でボクを見るな」

相変わらず、狼煙は人混みが苦手だよな。

「それじゃ、行つてみるか」

『さっきの人、テンション高かったねー』

見学できるブースがあつたのだが、その音楽番組のMCのテンションが恐ろしく高かった。偶然隣にいた人は慣れているのか、一緒に盛り上がっていた。

ゲームでも恐ろしい一般人（つか、おっさん）がいたけど、逸脱している人もいるんだな。

「よし、それじゃタマムシに向かうか」

『……』

だから狼煙、無言になるな。タマムシも人通り多そうないメージあるんだからな。

『あ、コウさん』

「あれ、サンドパンじゃねえか」

旅の準備をしてシオンタウンを出ようとしたとき、偶然にもサンドパンと遭遇した。フジ老人、脱走してるポケモンいますよー。

『もう、旅に出るんですか？』

『次はタマムシにいくんだー！』

抱っこされている藍斗が、ボクの代わりに返事をしてくれた。

『そうですか……、みなさんの旅が良いものでありますように』

『……ん、ありがとな』

今度は横にいる狼煙が答えた。ボクの代わりに答えてくれるなんて、いい子に育って嬉しいよ。悪い狼煙、ちょっと調子に乗ってみただけだから睨んでくるな。

「そんじゃ、サンドパンも元気だな」

そう言うてから、ボクたちはタマムシシティへと向かった。

『……てつきり、連れてくと思ってた』

一休みするためのヤマブキシティに行く途中の道路で狼煙が呟いた。

「ん？ サンドパンはフジ老人のところへ行きたかったんだし、無理やり連れてっちゃダメだろ」
『そうかよ』

ぶつきらばうに返事する狼煙に、少し微笑んでしまった。
まあ、確かに昨日までは連れていこうとはしてたさ。

でもな、

——ただいま、坊や

流石に、あの言葉を聞いちゃったらなあ……。シオンタウンの恐ろしさを感じたし。いや、この場合はポケモンの恐ろしさなのか？

第二十話 やはり自転車必須（後書き）

コウ「……なあ、つまり、あれだよな」

ええ、つまりあれです

コウ「……」

……

あ、次回もお楽しみに！

第二十一話 都会の人混み（前書き）

すみませ、レポートがががが
↑

第二十一話 都会の人混み

『げ、人多すぎるだろ』

ヤマブキシティのポケセンで夜を過ごしてから、タマムシシティにたどり着いた。人混みの量はヤマブキシティと比べて混雑はしてなかったが、デパートがあるせいか家族連れが多かった。あと、ポケモンを連れている人もいて活気づいていた。

『おい、早くセンターに行くぞ』

「袖口噛んで引っ張んなよ」

やはり人混みが苦手なのか、狼煙がボクの袖口に噛みついて引っ張ってきた。服伸びるからやめてくれ。

うわ、他のポケセンと比べてデカイ上に混んでるし。

『……』

うん、狼煙ドンマイ。

「オーキド博士、タマムシシティに着きました」

「ほっほ！ もうそこまで行きおったか」

狼煙たちをジョーイさんに預けて、オーキド博士にタマムシシティにたどり着いたことを報告した。

「ヤマブキシティもそうでしたけど、タマムシシティも人混みがス

「ゴいすね」

「そりゃそうじゃろうな。ヤマブキはオフィス街じゃし、タマムシはビル街じゃからな。互いに隣街じゃから、移動も楽で過ごしやすい場所なんじゃよ」

そう言われれば確かに。しかも、クチバシティとも近いから外来製品の流通も滑らかである。

「それで、サイクリングロードを進むのかの？」

「……あ」

しまった、ストーリー通りに進んでみたのは良いけど、自転車ゲツトしてねえ！

「おや？ どうしたんじゃ？」

「……博士、ボク自転車持つてません」

そう言つと、「画面上の博士は微笑んだ。

「大丈夫じゃよ。サイクリングロードの入り口でレンタルバイクの貸し借りがあるでの」

マジですか。確かにそう言われれば、自転車専用道路なのにレンタルがないのはおかしい話だし。

……HGSでカビゴンが道を塞いでなかったから、大丈夫、だよな？

「おっと、セキチクシティで話題になってることがあったな」

「え、なんですか？」

これでカビゴンが出口を封鎖してるって言うなら泣くぞ。それを覚悟で尋ねると、博士は近くに置いていたのか書類らしきものを取り出した。

「何でも、セキチクシティで他の地方のポケモンが見かけられたいいんじゃないよ」

「へえ……」

他の地域のポケモンか、いったいどこの地方なんだろうな。

「……コウも、気をつけるんじゃないぞ」

「はい？」

「グラエナやリオル、モココは他地方のポケモンじゃし、ワシがあげたリザードも初心者向けのポケモンであるが珍しい部類に入るのだな」

確かに、狼煙や藍斗を引き連れてるのを見て話しかけてくるトレーナーが多かった。まあ、ヒドいのはいなかったけど。

やはり混雑していたのか、いつもより長くかかった。

傷薬や携帯食料など、消耗品が不足していたので、タマムシデパートで買い物をする事にした。通りが人混みで進むのに苦労しているが。

ああ、ちなみにみんなボールの中に入っている。さすがにこの混雑では連れ歩けな……あ、連れ歩いている人いるし。

いや、違った。あのワンリキー、荷物持ちじゃねえか。

デパートの中は空調が充分で、心地良い環境だった。さてと、傷薬とか毒消しとか買ったし、次は食料品だな。

まあ、そう思って食料品エリアに行ったわけだ。そしたら「おいしいみず」のペットボトルが浮いていた。は？　こんな白昼堂々にポルターガイストか？

『あー、すみませんねー。落ちてきますのでー』

浮いていたペットボトルはゆっくりと降りていき、そして床に置いてあった買い物カゴに収まった。

そしてそのカゴを、脇にいたエーフィがくわえてあげた。

『ふあー、ふいまふえんえー。おそろくいまふいふあかー？』

……うん、全くなに言ってるのか分からねえ。だって、エーフィは口元にカゴをくわえて話しかけてきたいるんだぞ？　なに言ってるのかよくわからねえ。

そう思っていると、エーフィはカゴを床におろした。

『あーもしかして、最近巷（ちまた）で有名な、言葉が解るヒトですかー？』

なあ、ボクはいつの間になら有名になったんだ？

『じゃ、これ運ぶの手伝ってくださいですー』

「拒否権すらないのか」

『だらだらしないで運んでくださーい』

そう言って、――（おそらくサイコネシスを使って）ボクの手ひらのところまで、はつきり言おう、持ちやすいところに浮かせてきた。

『これで持ちやすいですよー』

……いやあない、手伝ってやるか。

狼煙のボールがガタガタ揺れて、抗議しているような感覚がする。わりーかよ、お人好しで。いや待てよ？　ここは、ポケ好しって言うのか？

『……で、さっきのはどういうことだよ』

「いや、まさか家まで付き合わされるとは思わなかった」

先ほどまでボクは、ポケセンの取れた部屋で正座していた。

あの後イーフィに、家まで運ぶように言われてしまった。もちろん拒否権無しで。そしてタマムシマンションへと運んで行ったら、管理人であるお婆さんのティータイムに参加させられてしまった。なるほど、イーフィのトレーナーなだけあるな。

まあ、そんなこんなでポケセンの部屋に着いたら、狼煙が出てきて説教タイムと言うわけだ。

「……すげえ、長かった」

『マスター、床で倒れられていますと膝を突っついてあげたくありませんが』

「マジで止める」

紅蓮の場合、シャレにならなそうだったので、這いずってソファ

ーまで移動した。

やっぱ、進化したらもつと黒くなるんだろうな。あーでも、リザードンになれば飛行タイプが追加されるし、移動がスムーズに、いや、空飛んでるときに何かしてくるな。

『何か考えてるところ悪いが、これからも注意しろよ』
「んー、ああ、肝に銘じる」

なんで狼煙に怒られたかというと、断れそうな時には断れと言われてしまった。まあ、確かに最近流れやすくなったからなあ……。噂だとしても、顔までは割れていないんだし、考えてから行動しないとな。

『？ 藍斗、寒いのか？』
『んー、ちよつとねー』

雷華がベッドの方向を見たので見てみると、藍斗が布団にくるまっていた。

まあ、明日雨が降るらしいし、寒くなってきたんだな。

第二十二話 小さいは、正義（前書き）

はい、6月休んでの投稿です！

コウ「……そのせいなのか分からないけど、タイトルがシュール過ぎるんだが」

紅蓮「何かがふつきれてますねえ」

……どうぞ！

雷華「スルーか」

第二十二話 小さいは、正義

ザーザー

天気予報通り、大雨注意報が発令されるほど大荒れの天気となった。

まあ、そんな天気だろうと関係ないって、ポケモンやトレーナーがポケセンの外で遊んでいるが。ニヨロモって意外とでけえ。

『マスター、大丈夫ですか？』

「ん、ああ、大丈夫だ」

ロビーの椅子に座って外を眺めていると、脇にいた紅蓮が話しかけてきた。感傷にひたっていただけだったので、何ら心配はない。

『……眼が虚ろでしたよ』

マジか。

一瞬、そう思ったけど否定はできなかった。何故なら、

「ポケモンの回復待ちのコウさん、カウンターへいらしてください」

ジョーイさんに促されて病室へと行くと、ベッドの上でスヤスヤと眠っている藍斗の姿があった。

藍斗の異変に気づいたのは、朝食を食べに食堂へと行くこうとしていたときだった。布団で寝ていた藍斗の呼吸が乱れていたことに気づいたので、ジョーイさんのところへ連れて行って診断をしてもらっていた。

「……ジョーイさん、藍斗は、いったいどうしたんですか」

「大丈夫よ、病氣つてわけじゃないの。ただ、身体の変化を拒んでいるみたいなの」

「身体の変化？」

もしかして、進化のことだろうか。

「あなたのリオルみたいに、トレーナーとの信頼関係で進化するポケモンは多くいるでしょ」

「はあ、ピチューとかがそうですね」

ゲームで「なつき進化」が出たときはビビった。只でさえ通信進化とかもどういふことなのか全く分かっていなかったし。

「ええ、そういうポケモンたちはトレーナーの期待に答えるように進化する子が多いの」

「ただ、」とジョーイさんが一呼吸入れた。

「進化した姿を、大好きなトレーナーが受け入れてくれるのか、って悩んで進化することを拒んじゃう子がいるの。それで進化するエネルギーを抑え込んで具合が悪くなってしまうの」

「……」

つまり、藍斗はその気になれば進化する事は可能である。だけど、藍斗は進化することを拒んでいる、ということか。

「そんなこと、気にしなくていいのにな」

眠っている藍斗の頭を撫でて、ポツリと呟いた。でも、この声に反応した返事は聞こえなかった。

ジョーイさんに頼んで一（先読みされていたが）、今日1日は藍斗のところにいることにした。

『……そりゃ、産まれたときからお前にベタベタだったからな』
『藍斗にとっては、マスターはお兄さんの存在ですからね』

藍斗の不調の原因をみんなに話したら、納得してくれた。それにしても、お兄さん扱いだったのか……。

『だから、コウに嫌われたくないってことだ』
『なるほどな……』

確かに言われてみれば、藍斗のなつきっぷりでルカリオへと進化していないのはおかしい話だ。

『そついや、狼煙は進化したときどうだったんだ？』
『は？』

ボクが話を振ると、狼煙は気の抜けた声を出した。

『……たしかあの時、力がみなぎる感覚がしたな。進化だって気づいたし、それに強くなれるからな』

『唯でさえ弱い身体であるマスターを護るため、ですよ』
『あ？』

狼煙の言葉に、紅蓮が付け加えてきた。……まあ、虚弱体質なのは認めるさ、畜生。

「それでも、旅立つ前よりか体力付いたぞ」

「あの頃のマスターはバテてましたもんね」

「？ 昨日よりもバテていたのか？」

「ええ、崩れ落ちてました」

そう紅蓮が言つと、雷華は驚いた（ような）顔をした。……紅蓮の言うことに否定できない。たしかに、あの頃はベッドに崩れ落ちてたもんね。

でも驚くってことはないだろ。

「ん……」

「！」

今まで眠っていた藍斗が目を覚ました。

「んー？ ここ、どこ……？」

「目が覚めたか、藍斗」

「コウ……？」

藍斗はよく寝たせいか、目元を手でこすりながら病室を見回していた。

「藍斗、マスターは藍斗が進化したくないってこと知ってますよ」

「えっ」

紅蓮にそう言われ、藍斗はポカンとした顔となり、ポロポロと泣き始めてしまった。

『じゅめっ、コウ……』

「怒ってないから、な？」

そう言っただけで、頭を撫でてやった。ああもう、そこまで目をこすると明日が大変だぞ。

『オレだって、進化してコウをまもりたいよ』

泣き止んでから藍斗がポツリと言葉を発した。……うーん、ポケモンに心配されているトレーナー、って如何なもんか。紅蓮に『心配』ではなくて『親愛』ですからね、と言われてはいたんだが。

『でもさ、進化したら大きくなっちゃうし、もしかしたらコウにケガさせちゃうかもしれないし……』

藍斗は下を向きながら、ぼそぼそと小声で言った。

『それに、』

そう藍斗が呟いて黙ってしまったが、

『コウに、抱っこしてもらえないし……』

と、寂しそうに言った。

つまり、あれか。藍斗は怪我をさせたくないし、定位置化してたボクの腕に抱っこができなくなるのが嫌だったから進化しなかったのか。

「藍斗は優しい子だな」

ただし、デコピンを一発。

『ぎゃん!』

藍斗はデコピンされたところを手のひらで押さえた。

「けどな、そんなこと気にしないでいいんだって」
『でも!』

まだ腑に落ちてない藍斗の頭を撫でてやった。

「抱っこが出来なくても、代わりに頭を撫でることも出来るんだ。
進化したって、ボクが藍斗を嫌うわけじゃないじゃないか」

『なでてほしいとき、なでてくれる?』

「必ず、とはいかないけど、満足するまで撫でてやるよ」

そう言って、わしゃわしゃと撫でてやった。

『……始まったな』

狼煙の言葉通り、藍斗の身体が光り始めた。ボクは撫でていた手を引っ込めて、変化していく藍斗の身体を見ていた。

数十秒後、藍斗を包んでいた光が粒子となって消えていった。

「おめでとう、藍斗」
『うん、ありがとう!』

第二十二話 小さいは、正義（後書き）

藍斗『ルカリオに進化したよー！』

いやあ、とうとうこの時がきたんだねえ

紅蓮『まるで子供の結婚式前日のようなこと言いますね』

時の流れって、早いんだね……

コウ『そーいや狼煙が進化したとき、紅蓮が進化、藍斗が産まれる、
って続いてたよな』

ん、ああ、そうだったね

コウ『まさかとは思うけど、また幸運ラッシュでもする気じゃない
よな』

（回線が途切れました）

第二十三話 赤い赤い（前書き）

明らかにタイトルがフラグです

コウ「明らかに……」

狼煙『他に考えられなかったのかよ』

無理だった！

雷華『こら、開き直るな』

第二十三話 赤い赤い

『てえい！』

藍斗が進化してから3日が経った。ジョーイさんからおめでとうの言葉をもらい、何時ものようにトレーニングをしている。ただ一つ違うのは、

『攻撃後のスキが多いですよ』

藍斗の懷に紅蓮の「メタルクロー」が入った。進化して「はがね」タイプが加わった藍斗にはいま一つなのだが、レベル差があるため少しダメージを受けたようだ。

とまあ、このように背の高さがだいたい同じになったので、紅蓮と普通に戦えるようになった。

『……おい、なんでお前となんだよ』

ああ、ちなみにあの二人（？）が組んでトレーニングしているため、必然的に狼煙は雷華と組むことになった。

『仕方ないことだ、諦めろ』

「つか、この先女の子と勝負するかもしれないんだから鍛えておけよ」

そう言ってやると、舌打ちをしてきた。おいおい。
そして狼煙と雷華のトレーニングが始まった。

藍斗と紅蓮のトレーニングバトルは、紅蓮が「かえんほうしゃ」を放って勝負がついた。待て、いきなり容赦なさすぎだろ。

『紅蓮にい、本当に強いな！』

『藍斗も、強くなってますよ』

『本当！』

そう言われ、藍斗は眼をキラキラと輝かすように笑顔になった。

『そつだ藍斗。あの技をマスターに見せてはどうですか？』

紅蓮にそう言われてコクンと頷き、瞳を閉じて手のひらに力を込め始めた。いったい何するんだ？

『じゃーん！』

力を込めた腕を上から下へ降り下げると、藍斗の手のひらに青く棒状のホネのようなものが現れた。

えーと、「ホネこんぼう」じゃなくて、なんていう技だったわけ？ バックからポケモン図鑑を取り出して、技名を確認してみた。あ、「ボーンラッシュ」か。

「やったな、藍斗」

新しい技を覚えたお祝いの意を込めて頭を撫でてやると、藍斗は嬉しそうな顔をしていた。進化しても、幼さは変わらないんだな。

『コウ、そろそろ時間ではないのか？』

「え、もう終了の時間か？」

『……、……』

うわ、狼煙の機嫌が悪い。

「ゆけえ、イシツブテ！」

お昼ご飯を食べ終わり休憩しようと思っていたのだが、トレーナーに話しかけられてポケモンバトルをする事になった。こつちが先に紅蓮を出していたため、弱点となるタイプのポケモンを出してきた。そつちから挑んできたくせに後出しかよ。

『すまんなあボウズ、許してくれや』

あ、ポケモンのほうは礼儀正しいな。

「よし紅蓮、『かえんほうしゃ』！」

もちろん、いわ・じめんタイプであるイシツブテにほのお技は今ひとつである。だけど、効果抜群である「メタルクロー」近距離で攻撃すると、相手の攻撃が当たってしまう。

だったら、「やけど」狙いで牽制して、パワーが低くなったときに「メタルクロー」で攻撃を開始すればいい。そういや、「かえんほうしゃ」使えるってことは、そろそろ進化しそうな頃合いだよな……？

「だったらこちらは『どろあそび』じゃ！」
『へいへい』

げっ、「どろあそび」かよ。ゲーム上では電気タイプの攻撃が効きにくくなる地面タイプが覚える意味がないだろって技だったけど、三次元空間としてのこの世界では違う。

『ガード、ですか』

イシツブテが巻き上げた泥が、紅蓮の「かえんほうしゃ」をうまく遮ったのだ。だけど、それも一回まで。もう一回やれば良いだけだ。

「もう一回『かえんほうしゃ』！」

「今度は『どろかけ』じゃ！」

ちっ、「どろあそび」の本来の目的は「どろかけ」のためなのか！

「紅蓮、よけてくれ！」

『言われなくても！』

紅蓮は飛んできた泥をフットワークを使って全て避けてくれた。しかし、これじゃ参ったな。「かえんほうしゃ」を撃ったとしても「どろかけ」で防御されてしまうだろうし。

うまく攻撃を入れるには……

「今度は『いわおとし』だ！」

「なっ!?!」

どこからともなく空中に岩が現れた。おい待て、どこから現れたし。

「っ、『メタルクロー』で岩を壊せ！」

『無茶な指示ですね！』

紅蓮に狙って落ちてきた岩を、『メタルクロー』で壊してもらった。大ダメージは避けれたものの、破片とかでダメージは受けている。そして他の岩は紅蓮を囲むように落ちていた。

待てよ、あの岩を障害物に使えるんじゃないか？ 紅蓮のほうを見ると、こちらを見て口元を微笑ませて、姿勢を低くしていた。どうやら、考えていることが分かったようだ。

「おや、これで終わ

「ジャンプして『かえんほうしゃ』！」

相手のスキをついて、紅蓮は岩へと跳び乗ってイシツブテに「かえんほうしゃ」を放った。

「イシツブテ、『どろあそび』で『ぐはっ！』」

相手は守りの指示をするが、こちらの「かえんほうしゃ」が先に決まった。

「いまだ、『メタルクロー』！」

『これで終わりです！』

紅蓮は、タツ、と岩から跳び降り駆け出して、イシツブテに攻撃をくらわせた。

『っ！』

効果抜群。イシツブテは宙に浮いていたが、力を失って地面へと

落ちていった。これは、戦闘不能だよな。
その瞬間、紅蓮の身体が光った。

「おお、これは！」

「進化の、光……！」

進化の光は紅蓮を包み込んで、形が段々と変わってきた。一番特徴的に変わったのは、翼のような形をした部分が出来てきた。そして進化の光が晴れて、リザードンに進化した紅蓮が現れた。

「……おめでとう、紅蓮」

「ありがとうございます、マスター」

「……紅蓮、デカくなったな」

「紅蓮にいいおっきー！」

「うっむ、高くなったな」

バトルが終わってジョーイさんに頼んで紅蓮を回復させてもらい、部屋に戻った。

ちなみにさっきの台詞は進化した紅蓮を改めて見た感想である。口調が違っても、みんな体格のことかよ。

「リザードンってことは、ひこうタイプが追加されたし、空を飛んで移動できるな」

つーことは、レンタルサイクルしないでセキチクシティにいけるな！ そっぴや、初代じゃリザードンは「そらをとぶ」を覚えないんだよな、ひこうタイプなのに。

『乗せてもいいですが、人を乗せて飛ぶ以前に飛ぶのに慣れてないので、マスターだけ紐無しバンジーしますよ?』

「よし、自転車でセキチクに行こう」

つか、ボクだけってどういうことだ紅蓮。

『それにしても、今まで翼がなかったので違和感を感じますね』

そう言っ、翼を少し動かした。羽ばたいたことで、部屋の中に風が発生して、壁に備え付けてあったカレンダーがめくれた。

『ねえねえ、コウ?』

ふと、藍斗がボクの手を握って話しかけてきた。

「ん、どうしたんだ?」

『今日(きょう)は人が多いから、ご飯は早めに行った方が良くないの?』

時計を見ると、六時を回ったところであつた。そういや、珍しくポケセン内にトレーナーとかブリーダーがいたけど、何かイベントでもあるのだろうか?

第二十三話 赤い赤い（後書き）

ということで、紅蓮がリザードンに進化しましたよ！

紅蓮『リザードに進化したときはゴローンで、今回はイシツブテとの戦い、これ偶然ですか？』

うん、まさかの偶然。^{なに}何で進化させようかなと思って書いてたらそうなっちゃった。

コウ「まさか、まだ進化ラッシュ続くのか」

いや、それはしないよ

雷華『……そうか』

だ、大丈夫だよ！ ちゃんと後で進化する予定があるから（チーン）

第二十四話 タマムシは赤い？（前書き）

はい、二十四話です

紅蓮『全く、二週間かけてこの出来ですもんね』

うん、それは申し訳ない

藍斗『それではどうぞー！』

第二十四話　タマムシは赤い？

翌日、人が多いのをジョーイさんに質問したら、大食い大会があるらしいのだ。そういやゲームでもそんなのが有ったよな。

生憎だけど、ボクは元の体でも食が細い方なので参加しない。つか、優勝者のみ支払い無料（タダ）とか、どんだけ太っ腹なんだよ店主。……ああ、優勝者以外から高く徴収するのか。未恐ろしいな。ということで、明日セキチクに行く準備をするために、デパートへ行くことに。

……なっていたんだが。

「おいおいニーちゃん、人の話を聞いてんのか！」

どうしてこうなった。

確かボクはみんなをボールにいれてデパートへ向かった。よし、ここまで大丈夫だ。それで後ろから何かがぶつかって倒れた。でだ、起き上がったらぶつかってきた、いかつい人が「骨折れたー！」とか叫んでて。

うわ、当たり前屋かよ。まじメンドいぞこれ。

「それでニーちゃん、治療費払ってもらえねえかな？」

「そう言われてもなあ……」

早くここから逃げたしたいな。だけど相手は二人組、隙をついて逃げるのは難しいな。つか、いまの身体（からだ）じゃ無理か。

「もうあれだ、有り金出せよ」

うわ、とうとう脅迫してきた。しょうがない、有り金だすか。

「ちょっとあなたたち！ 何やってるのよ!？」

「あん？ いま大事なお話中なんだ。お嬢ちゃんは黙っててな」

決意したと同時に、今のやりとりを見ていたのだろうか、女の子が入ってきた。あれ、どっかで見たことある格好だな。

「どう見たって、お友達って感じじゃないじゃないわよ!」

まあ、確かにな。

「だったら嬢ちゃん、この兄ちゃんと組んで俺たちとのポケモンバトルに勝ったら、どっか行ってやるよ」

は？

「……分かったわ」

いや、待てよ。なに勝手に決めてるんだよ。

「おい兄ちゃん、早く構えろよ」

「ごめんなさい、アイツらってこうやってトレーナーからお金をたかるみたいなの。ちょっとの間だから我慢して!」

いや、こんな街中でバトルしていいのか？ って、野次馬でできたし。

「ってことでストレス解消してこい」
『ハッ』

ボクの合図に鼻で応えた。お、でも楽しそうな顔してるな。

「行ってきた、メガニウム！」

そしてタッグを組む女の子はメガニウムを出してきた。そうか、この子コトネじゃねえか！ 服装が違うからわかんなかったぞ。

「よいいけ、ストライク！」

「出番だレアコイル！」

不良二人組が出したのはストライクとレアコイルか……、絶対名前が長いからチョイスだな。

「そんじゃ、せーぜー泣かないようにな」

「ゴリキー！ グラエナに『10まんボルト』だ！」

「いきなりか！？ 飛び跳ねてよける！」

『ほらよっ！』

開始の合図もなく、不良Bのレアコイルが攻撃を仕掛けてきた。ちなみに不良Bは当たってきた方じゃない。つか不良A骨折れたほうの腕、ピンピンしてるじゃねえか。

「もう一度だ！」

「メガニウム！ グラエナの前に出て『まもる』よ！」

もう一度放たれた「10まんボルト」に立ちふさがるかのように

メガニウムが立ちはだかり、透明な障壁を作り上げた。
なるほど、「まもる」ってこんな感じなのか。

「ストライク！　メガニウムに『つばさでうつ』だ！」

げっ、ストライクのこと忘れてた！　メガニウムに向かってきた
ストライクはすごい速さで、メガニウムに攻撃した。

「ちっ、『こうそくいどう』と『つるぎのまい』かよ」
「へえ、兄ちゃんよくわかったな」

ちっ、レアコイルに注意を向けておいて、その間にストライクが
「こうそくいどう」と「つるぎのまい」を使ったのかよ。こいつら
マジで不良なのかよ。

「メガニウム、ソーラービーム発射！」
「なにい！？」

コトネのメガニウムは攻撃を喰らったにも関わらず、レアコイル
に向かってソーラービームを放った。レアコイルは気絶はしなかつ
たが、それでもソーラービームでダメージは食らったようだ。

「ちっ、こうなったらグラエナに『れんぞくぎり』だ！」

ストライクが狼煙に向かってきた。「れんぞくぎり」は虫タイプ
の技であり、悪タイプである狼煙には効果抜群である。……よし、
やるか。

「狼煙！　例のヤツお見舞いしろ！」
「はっ、了解い！」

指示を受けて狼煙は、身体に力を入れた。すると、狼煙の周りに水色の丸い物体が現れ、ぶつかってきたストライクに当たり、軽い爆発が起きた。街中なのに、とか言っちゃいけない。

「狼煙！」

「ストライク！」

煙が晴れると、満身創痍の狼煙と、気絶したストライクがいた。

「げっ」

「それじゃ、どこか行ってくれるかしら」

いつの間にか、レアコイルのほうは片づいていた。メガニウムで攻撃しまくったとかまじこええ。

「ちっ、覚えてろよ！」

そう言っただけで不良ABは走り去っていった。悪いが、覚える気力がないから諦めてくれ。つか、お金くらい寄越してくれてもいいんじゃないのか？

「……コトネ、何やってるの？」

野次馬がある程度去ってから、一人の男がコトネに近づいて、おい、待てよ、あの格好。まさか……

「あつ、レッドさん！」

原点にして頂点の、レッドさんであった。

え、なにナチュラルにデパートの袋持っているんですか

第二十四話 タムムシは赤い？（後書き）

雷華『狼煙だけしか出てないし、しかも出番奪われてるな』

冷静な分析しないでくたせえ

狼煙『……、……』

ごめん、無言やめてえええ！

第二十五話 スピード出しすぎ故の飛ばし（前書き）

藍斗『二十五話だよー!』

紅蓮『確か、前回まさかの展開で終わりましたよね?』

うん、そうだよ?

紅蓮『飛ばしましたね?』

……テヘッ

コウ「うぜえ……」

うわあ痛い

第二十五話 スピード出しすぎ故の飛ばし

——サイクリングロード セキチクゲート

「あれ、確かあの少年、ハナダシティのバトル大会で……」

そつだそつだ。確か3連勝した子だ。

……決めた、次はあの子だな」

——セキチクシティ

「ふう、ここがセキチクシティか……」

サイクリングロードを越えて、ボクたちはセキチクシティへと辿り着いた。オーキド博士の言っていた通り、レンタルをして下り坂のサイクリングロードを下っていった。なので、ペダルをあまりこがずに体力を温存できた。

トレーナー？ 話しかけられるわけがないだろ？

「つか、博士とレッドさんから聞いていたけど、人が多いな」

タマムシに着いたとき、オーキド博士がテレビ電話で言っていたが、数日経っているのに発見されていないんだな。

ああ、レッドさんはどうしたかって？ コトネと一言二言話したあと、リザードン出して飛んでいた。まあ、空から紙飛行機を飛ばして、ポケギアの番号をもらったけど。つか、ポケギア持つてる

んですね。

「ありがとうございます、ジョーイさん」

街に着いて、何時ものようにジョーイさんに回復をお願いし、ちょうど受け取りに来た。ああ、オーキド博士には街に着いた報告はしておいた。怒られるもんな。

さてと、ロビーの長椅子には、明らかに他地方のポケモンに興味本位で集まっている奴らが蔓延っているし、どこか観光でもするか。狼煙と雷華は人見知り一（雷華は特に）だから、いまのセキチクシテイで出したら大変なことになる。ってことは、藍斗か紅蓮だよなあ……。よし、バトル挑まれたらどつちかに頼るか。それじゃ、元サファリゾーンに行ってみるか。いまの施設の名前が思い出せないからなあ……。

っておい、ゲーム中でも思ったが、ポケセン横の段差はやっぱり階段必要だろ。

「よっ、と」

段差になっているところを飛び降り、両足で着地した。うっわ、足の裏にジンジンくる。小学生のころはこれくらいの高さから飛び降りても大丈夫だったのにな。体重が増えたからか。

さて、ジンジンくるが耐えて目的地へと向かった。そっだそっだ、パルパークだ。あまり使ってなかったからすっかり忘れてた。いや、サファリゾーンよりかは知名度低いだろ？

さてと、中に入ってみるか。……………ロビーがポケセンと同じ光景ってどういうことだよ。

仕方ないためー（というか、入りたくないため）、フレンドリー
ショップでショッピングする事にして、ショップへ向かうことにし
た。

『オレ、チイラのみ味のポケモンフードが欲しいー！』

青い屋根の方向に向かっていていることに気づいたらしく、藍斗がモ
ンスターボールから出てきて、食べたいものを言ってきた。

どうやらハナダシティで買ったヤツがお好みにあつたようだ。

「はいはい、買ってあげるから戻ろうな」

『えー、一緒に買い物しようよー！』

そう言つてボクの腕を掴んできた。そしてボクを引っ張つていく
かのように走り始めた。全く、進化しても、甘えん坊なところは変
わらないんだな。仕方ない、一緒にショッピングするか。

とまあ、考えているうちに着いてしまった。だつてすぐ近くだつ
たからなあ。

『買い物カゴ、オレが持つね！』

フレンドリーショップに入ると、入り口わきにあつた買い物カゴ
を藍斗が一つ取った。本当に、いい子に育ちやがって……。

フレンドリーショップ内はそこまで人がいないため、藍斗と並ん
で歩いても大丈夫であつた。ただし、ボール類が陳列しているはず
の棚には、全くボールがなく「売り切れ」の札が置かれていた。買
いすぎだこのやろつ。

『コウー、あつたよー!』

「よーし、一箱入れとけよ」

『はーい!』

ポケモンフード類の棚に行くと、逸速（いちはや）く目的の「チイラのみ味」を見つけて手に取った。そして藍斗はちゃんと一箱だけを買って物カゴに入れてくれた。あ、どうして希少価値である「チイラのみ」の味がするフードが販売されているかというところ、木の実は人工で育てるのに成功したからだ。だからと言って、お値段はその他のフードと比べると値段がはっている。

「……藍斗、他のみんなにも分けるんだよ」

『はーい』

うん、いい返事だ。せっかくなので、藍斗の頭をワシヤワシヤと撫でてあげた。藍斗は右目を閉じて照れたように、でも嬉しそうに撫でられていた。

いや、そういうことしてる場合じゃない。飲み物買わなきゃいけないな。ゲーム上では（一部を除いて）自動販売機でしか買えなかったが、フレンドリーショップでも売っているうえに、なんと自動販売機よりもお得な値段である。ああ、ゲーム慣れしている人なら気づくかもしれないが、それだと「傷薬」よりも「ドリンク」の方が安いからより優遇されるんじゃないか、って思うよな？ 残念ながら、ポケモンに飲む力がなければ「ドリンク」での回復の意味がない。つまりは、飲む気力がある場合は「ドリンク」、それが無理ならスプレー型の「傷薬」となるらしい。あと、カロリーとかもな。

さてと、何を買うか。……うん、今回も「おいしいみず」でいいか。って、こら藍斗、そんなガツカリした顔するな。

『いっぱい買っちゃったねー』

レジでお会計をして、フレンドリーショップから立ち去った。ボクは財布を取り出した場所に戻し、藍斗は購入した物が入っている袋を持っている。ちなみにそこまで購入はしていないが、「おいしいみず」を五本入っているため、重いといや重い。……バックに入れるとその重みが感じなくなるから恐ろしい。マジで四次元バックへと変化してるだろ。

夕方へと近づいていたため辺りは暗く、彷徨（うろつ）いていたトレーナーたちもポケセンへと引っ込んでいったようだ。

「それじゃ、ボクらも帰るか」

『はー……ちよつと待って!?!』

ボクたちも一緒にポケセンへ行こうとしたのだが、突然藍斗が立ち止まって森のほうに振り返った。

「どうしたんだ藍斗?」

『……そこにいるのは、誰なの!』

すると、茂みから一匹のピカチュウが現れた。

『よっ、ニンゲンの兄ちゃん久しぶりだな』

「たしか……」

会ったことがあり、この口調で話すピカチュウといや、初めてヤマブキシティに泊まった時に会った、旅しているピカチュウしか思い当たらない。うわ、懐かしいな。

「ん、どうしたんだよ狼煙」

『……この匂い、やっぱりな』

ボールに入っていた狼煙が突如出てきて、ピカチュウを睨みつけた。それにつられて、藍斗もビニール袋を持ったまま構えた。

「狼煙、藍斗、どうしたんだよ」

そう言つと狼煙がボクを一度見て、再びピカチュウの方を見て、言った。

『お前、ピカチュウじゃねえだろ』

第二十五話 スピード出しすぎ故の飛ばし（後書き）

コウ「は？ おい待てどういうことだよ」

え？ 真相は二十六話で明かすよ？

雷華『まあそれはいいが、前話といい出番がなかったのだが』

……………人見知りゆえにだよー

雷華『……………いま思いついたな』

第二十六話 セキチク北西部（前書き）

はい、苦戦した第二十六話です

コウ「苦戦した割には内容ペラペラだよな」

それは言わないお約束

第二十六話 セキチク北西部

「狼煙、どうということだよ……」

「こいつからは、ピカチュウの匂いじゃねえ違う匂いがするんだよ」
「オレも、そうだと思う！ 波導の種類がピカチュウじゃないもん！」

つまり、こういうことか？ ヤマブキで会ったピカチュウはピカチュウでなかったってことか。ってことは、メタモンなのか？

ピカチュウは無表情であつたが、突如ニヤツとした顔をした。

「夜も暗いし、明日、この森に来いよ」

「……は？」

「ええっ！？」

「……」

そう言つてピカチュウは「消えて」いった。いや、「走り去つて」いったのではなく、文字通りである。まるで、そこには元から誰もいなかったのようにピカチュウは「消えて」いったのだ。

「で、マスターは行くんですよね？」

「よくわかつてるな紅蓮」

ひとまずポケセンの部屋に戻つて明日、あのピカチュウに会うかを話し合つていた。ああ、この騒動だからポケモンセンターに泊まる人たちが多かったけど、なんとか個人部屋をとることができた。そうでなきゃ全員を出すことは出来ない。特に大きい紅蓮とか。

『あのポケモン、ボールから見てたが食えないヤツだな』
『確かに、全く顔に出てませんでしたねえ』

紅蓮はそう言って、ボクの方を見た。はいはい、ボクは顔に出やすいですよ、自覚あるさ。

『あのピカチュウさん、目が全く笑ってなかった……』

備品であるベッドの枕を抱きしめながら、藍斗が言った。……リオルのころだったら似合っていたが、キリッとしたルカリオがやると思いのほかシユールな光景である。

『……俺は行くことに賛成だな』

『珍しいな、狼煙がそういうこと言うとは』
『……』

今まで瞳を閉じて伏せていた狼煙が、目を開けて声を発した。おおう、すっかり眠っていたのかと思った。

『やはり、パートナーとして、ですか』
『……そういうことにしておけ』

そう紅蓮に言って、再び瞳を閉じた。

『どうやら、みんな行くことには反対しないようですよ、マスター』
「……みんな、ありがとな」

——翌日早朝、朝食を早めにすませ、昨日別れた一（？）場所へ

と来た。早朝であるためあまり人も居なく、誰かに見られる心配がない。

さてと、この先だな。

「藍斗、どうだ？」

「うん、大丈夫だよ！」

あのピカチュウ（仮）は「この場所」ではなく「この森」と言った。ならば、昨日直（じか）に会っている藍斗に波導で道案内してもらってピカチュウ（仮）に正体を見ることにした。悪いが、そう簡単に待ちはしない。

やっぱ、トレーナーも入ってこないから、獣道ならぬポケ道になっているところを歩くしかないようだ。これ、こういう道って、足首捻りそうだから大変なんだよな。

『次はこっちなんだけど……』

そう言って藍斗が見た方向を見ると、完全なる茂みであった。……キツいなこれ。

藍斗の波導を読むのを頼りにして、森の奥まで来た。

『もうそろそろだよー！』

「そう、か」

ぶつちやけ疲れてきた。いや、いつものように整った道になってないところを歩いたからな。段差とかで足が痛い。

『おいおい、そっちから来たのかよ』

開けた場所に来ると、ピカチュウ（仮）が木の根元に寄りかかって座っていた。

「なに言ってるんだ。ボクたちが来ることを知ってて、その姿勢でいるんだろ」

『まあな、森のヤツらが騒いでたしな』

そう言っ、て、ピカチュウ（仮）は木に寄りかかるのを止めて、こちらへと近づいてきた。

『まあ、約束通り話さなきゃいけないよな』

そう言っ、たが、ピカチュウ（仮）は何かを考える仕草をして、

『なあ、なんか飲み物あるか？』

……このやろっ。

仕方ないので、リュックに入っていた「おいしいみず」をあげることにした。ご丁寧にキャップの封を開けて。

『ちっ、ミックスオレじゃねーのかよ』

『そんな高いものないよー！』

舌打ちしたピカチュウ（仮）の言葉に反応して、藍斗が声を出した。それをスルーして、水を飲み始めた。

『ぶはー』

まったく、ヤマブキの時と同じだな。

『あー、そんじゃ話さないとな』

「おいしいみず」をボトル一本分を飲みきって、空を見上げた。

『もう太陽もあんなところだしな』
「は？」

そう言われて藍斗と共に空を見上げた。ピカチュウー（？）の言うとおり、太陽は空のてっぺんに位置していた。

おかしいな、ボクは感覚だとそんなに時間は経ってなかったような……。

『前に旅をしているって行っただろ？　あまり干渉しないで巡りたかったから、時々姿を変えたりしていたんだよな』

ピカチュウー（仮）は空を見上げたまま話し始めた。

『まあ、それでも興味が出たら姿を現して話しかけたりするけどな』

そう言って、こっちに近づいてきた。

『なあ、ニンゲン。お前のパートナーと戦わせろ』
「……は？」

おっと、声に出しまった。いや、だって正体を探りに来て話し始めていたのに、いきなりバトルの申し込みだぞ。話変わりすぎだろ。

「つか、そんなこと……」

『ちなみに拒否権はないけどな』

『ほら』とピカチュウ（仮）がボクの足元を指差した。ボクも足元を見てみた。

「うわっ！」

『コウ！』

ボクの足元、というか脚の半分までツタのような物が巻き付いていた。

ちよ、待て！ 何時の間にこんなことしたんだよ！

『ま、全く抜けないよ！』

藍斗の方を見ると、ボクと同じような状態になっていた。

ちっ、これじゃ戦うしかないのか。そう思い、狼煙のボールに手をかけた時だった。

『なにしゃがんだてめえ！』

狼煙がボタンを押す前に出てきて、ピカチュウ（仮）に怒号と「めざめるパワー」を放った。ちなみに「こおり」のため、放った球体は水色である。

「めざめるパワー」はピカチュウ（仮）に直撃し、土煙が立ち込めた。と同時に、身体が軽くなるのを感じて倒れた。足元に絡みついてたツタは何時の間にか消えていた。

『へえ、優秀なヤツだな』

『……無理やり催眠をかけるヤツに褒められたくねえな』

「催眠」ってことは、いや、おかしいな。メタモンは「へんしん」したポケモンの技もコピーするんだよな。

そんなことを思い出しているときに、土煙から声がした。

『いや、催眠じゃないぜ？』

そして土煙が晴れると、一体のポケモンが出てきた。

……なるほど、このポケモンがいたか。

「お前、ゾロアークだったのか」

第二十六話 セキチク北西部（後書き）

やっとゾロアークさんだせたよ……！

狼煙『……なんでさん付けなんだよ』

……クセ？

紅蓮『意味不明ですね』

しゃあないしゃあない

雷華『しょうがなくなと思うのだが』

ま、まあ、とにかく

藍斗『次のお話も楽しみにしてねー！』

藍斗最後とらないでくれー！

第二十七話 悪タイプのプライド（前書き）

はい、やっと更新です。

紅蓮『一回消してしまっってどういうことですか』

うん、面目ない。

コウ「にしても、スゴいタイトルだな」

紅蓮『なにかイヤなこと起きるんじゃないですか？』

何それ怖い

第二十七話 悪タイプのプライド

えー、コウです。ボクがヤマブキシティで出会ったピカチュウから、異なる匂いと波導を感じたということで翌日、ピカチュウに会いに行った。すると何故か勝負を挑まれたけど渋っていたら脚を拘束されて、狼煙が「めざめるパワー」を放って攻撃したらピカチュウの正体がゾロアークだということが分かった。いま、狼煙はゾロアークに向かって威嚇している。
ってなんで解説してるんだよ

『マスター、知ってるんですか？』

『見たことないんだが』

『コウー、なんて言うポケモンなのー？』

いつの間に出てきたのか、紅蓮と雷華、そして藍斗が話しかけてきた。もう少し早く出てきて欲しかったな……。

「……ゾロアークって名前と、幻影を見せる能力、あと悪タイプだつてことくらいだな」

『ふむ、狼煙と同じ悪タイプなのか』

雷華の言いたいことは分かる、悪タイプ同士なら効果は今ひとつだから問題ではない。

「だけど、ゾロアークが何を覚えるのか、知らないんだよ」

『それじゃ、あのゾロアークというポケモンが、格闘タイプの技とを使ってきたら一発ですね』

『紅蓮にい涼しい顔で言わないでよー！』

覚えていないのは仕方ないんだよ。ちゃんと殿堂入りするまでゾロアークやゾロアのイベントは後回しにしようと思ってたから。つか、ストーリークリア後のトレーナーのレベルがおかしいだろ。レベル上げすぎだ。

『心配すんなよニンゲン、これはガチのバトルだよ』

どうやらボクたちの会話が聞こえていたらしく、ゾロアークが声を出した。

『お互いに、1VS1の介入無しのガチンコバトル。もちろんニングンの指示も無し。それで良いよな』

『……ああ、勿論だ』

「お、おい狼煙！」

勝手に決めてんじゃ………！

『マスター、大丈夫ですよ。狼煙さんなら勝ちますって』

隣にいた紅蓮がボクの肩に手を当てて話しかける。ってもなあ……。

『ふむ、どうやらもう遅いみたいだ』

「は？」

雷華が狼煙たちの方を指差した。ゾロアークが小石のような物の上に投げていた。……多分、地面に落ちたら試合開始なんだろうな。

「……負けたら承知しねえぞ」

ボクの声が狼煙に聞こえたかは分からないが、小石が落ちてタイムンバトルが開始した。

まずゾロアークが腕に力を込めて、手のひらに黒い球状のものを作った。ああ、「シャドーボール」だな。

狼煙はそれを確認できたのか、スキを伺っていた。今にもゾロアークに飛びかかれるという体勢である。

『先にいかせてもらうぜ！』

先に動いたのはゾロアークの方だった。手のひらに作ったシャドーボールを狼煙に投げつけてきた。狼煙は飛んできたシャドーボールを避けて、噛みつくためにゾロアークへ飛びかかった。

『あまいな！』

『ぐっ！？』

ゾロアークがそう言うと、もう片方の手からシャドーボールを投げつけてきた。飛びかかっていた狼煙は避けることが出来ず、思いっきり当たってしまった。多少飛ばされたようだが、うまく着地して、身体の周りに水色の球体を出してゾロアークへと放った。

『ちっ』

ゾロアークは回避行動をとらず、そのまま当たってしまった。そこに追撃として、狼煙は体当たりを繰り返した。

『へえ、意外と身軽なんだな』

『……どーも』

このあとも、狼煙とゾロアークは戦っていた。これ以降はなんとも表現出来ないため省略。いや、朝早く起きたのに介入無しのバトルを観戦していたため、眠ってしまったようだ。まあ、あれだ。集中し過ぎて寝ていたことに気づかなかったってやつだ。起きたとき、『マスター、よく寝れましたよね』と紅蓮に皮肉混じりに言われてしまったが。

「で、バトルはどうなったんだ」

『最後の一発をかまして決着、というところだな。』

雷華の言うとおり、狼煙とゾロアークの見た目はゲームで言う、赤ゲージの状態であった。これでどちらかがダメージ受ければ倒れるだろうな。

『いくぜ！』

『……おう』

かけ声と同時に、狼煙はゾロアークに突っ込んでいった。一方のゾロアークはというと、手のひらに何か球状のものを作っていた。

『くっ！』

しかし痛みで集中が途切れてしまったらしく、球状のものは弾けてしまった。その無抵抗状態に狼煙が襲いかかり、腕に噛みついた。

『……これで、勝負あったな』

噛みつくのをやめて、狼煙は後ろに倒れたゾロアークを見下ろして言い放ち、そしてガクリと倒れてしまった。

応急処置として狼煙には「いいきずぐすり」と「ばんのうごな」、ゾロアークには「げんきのかけら」を使った。なんで「ばんのうごな」を使うのかというと、ゾロアークが放った「どくどく」に当たったそうだ。ああ、道理で最後の接近のとき、何時もより素早い動きをしていたわけだ。ちなみに、「なんでもなおし」や「どくけし」はただ単に買い忘れていただけなので誤解しないように。

『……にげえ』

『すごく苦いだろうな。一度舐めたことがあるんだが、すごく苦かった』『雷華ねえ、舐めたことあるのー？』

『……昔、な』

こんなことを会話―（例のごとく、狼煙は雷華に視線を合わせられなかったそうだ）をしていたらしいのだが、ボクはそれどころではなかった。

「……全くワケわかんねえ」

実は「げんきのかけら」を使ったのだが、初めて使うためにパッケージを見た。すると、「ポケモンの身体（からだ）に押し当てるとだけ」と書かれていた。意味も分からずゾロアークに押し当てると「げんきのかけら」が光り出し、光が治まると粉となって散っていき、ゾロアークの傷口が癒えていた。本当に触れるだけで回復するとは、ポケモンの世界、まだまだ恐ろしいな……。

『……でだ、こいつどうするんだ?』

回復して立ち上がった狼煙が未だ気絶しているゾロアークの方を見る。「げんきのかけら」をあげたとしても、応急処置でしかない。

『オレがポケモンセンターまで運ぼうか?』

ゾロアークの身体を起こしてあげた藍斗が言った。まあ、藍斗は恐ろしく力持ちだもんなあ。でも、それは使わなくて大丈夫だ

「大丈夫だ藍斗。一番いい方法がある」

『ああ、予想がつかしました』

おそらく、紅蓮の予想通りのことをするんだろうな。

第二十七話 悪タイプのプライド（後書き）

紅蓮『最後のマスター、いい顔してましたねえ』

コウ「そいつはどーも」

狼煙『……』

紅蓮『おや、狼煙さん。なにか言いたげそうな顔してますがどうしましたか』

狼煙『……なんでもねえよ』

第二十八話 無理易題（前書き）

はい、ゾロアークのお話最後です！

コウ「え、おい。更新時間が22時ってどういうことだよ」

いやー、難産だった。思いついているのに文章にできなくてね。
あと課題とかね

コウ「……えー、では、始まります」

第二十八話 無理易題

「ジョーイさん、ポケモンの回復をお願いします」

「はい、この子です……あら？」

「この事は、ご内密にお願いしますね」

「ええ、分かりました。ポケモンの回復が終わりましたらアナウンスでお知らせしますね」

あのあと、ボクはゾロアークをモンスターボールに収めた。要するにゲットしたのだ。うん、狼煙がちゃんとバトルして勝利したんだし、何ら問題はないよな。

その後は狼煙たちをボールに入れて、藍斗に街までの道を教えてもらいながらポケモンセンターまで辿り着いた。ジョーイさんは差し出されたボールの中を見て驚いていたが、「最近出没しているポケモン」のことは口外しないように頼むと微笑んで了解してくれた。どこのジョーイさんも優しい……いや、ハナダの人は少々強引なところがあるが、うん、優しいの部類に入る。

そしてボクは、未だに蔓延っているマニアの波に飲まれながらも回復終了のアナウンスがかかるまで、ロビーのベンチで待機していた。ああ、でも昨日と比べたら空いてきてはいるな。

さーてと、部屋に戻ったらあのゾロアークにいろいろと問いつめないとな。

——ピーン ポーン パーン

ジョーイさんからボールを受け取って、宿泊予約していた部屋へ移動した。個室部屋だが、よし、紅蓮をボールから出しても余裕なスペースがあるな。

『ニンゲンさんよお、回復してくれたのには感謝するが、ゲットは無いだろ』

「おお、元気になって良かったな」

部屋の机にバッグを置くやいなや、ゾロアークがボールから勝手に出てきた。もうボールからの脱出のコツを掴んだのか。

『なーんかいま、会話がかみ合ってなかったぞ』

「まあ、コツチから訊きたいことがあるしな」

『ん？　なんだよ？』

ボクがそう言うと、ゾロアークは腕を組んで尋ねてきた。案外素直な性格である。

「なんで、再びボクたちの前に現れたんだ？　ただの興味本位にしちゃ、二回も、しかもそっちから声を掛けてくるなんて」

そう言うと、ゾロアークはベッドに腰をかけ、脚をもう片方の脚に組ませた。

『……これ、本当のこと言っただろうがいいのか？』

「いや、言えよ」

心の底から思ったことを声に出した。

『わりいわりい、そんな顔をすんなって』

そんな声には臆せず、ゾロアークは口だけ笑いながら言った。

『実はな、お前に会ったあと、変なポケモンに会ったんだよ』
「変なポケモン？」

ボクもベッドに座って話を聞くことに、しようとしたがゾロアークの座高が高いので止めておいた。くそう、元の体型でも脚が長いから座高は昔から低いんだよ。それを知ってか知らずかゾロアークは話し続けた。

『お前と別れたあと、いきなり現れたんだよ。で、現れて早々、キミがさっきまで会ったニンゲンとね、また会うことになるよ！』
「……」

いきなりのセリフに驚いた。いや、それもあるがあれだ。

「……声域、広いんだな」
『そりゃあ、幻影を使う身としては当たり前だって。声の高さと口調すら変えりゃ全くわかんないだろ』

確かに全く分からないと思うが、当たり前、なのか……？ いや、それのおかげで一つ分かったことがある。

『でよ、そのポケモンの名前が』
「ミュウ、なんだろう？」

ボクがそう言うと、今度はゾロアークの方が驚いた。

『なんだよ、ミュウってヤツと会ったことあるのかよ！？』
「あー、まあな」

ミュウとは雷華を連れてクチバシティを出る前夜、ポケセンの部屋にセレビィを連れていきなり現れたのだ。いろいろとボクに教えてくれたが、どうしてボクがトリップしたのかを隠している。もうそろそろ教えてほしいんだが。だからと言って手荒な真似をしたら、最大級の「サイコネシス」を手加減無くぶちかますに違いない。しかも笑顔で。くわばらくわばら。

『まあ、それでな』

「ボクがいる場所を教えてもらってセキチクに来たのか」

ボクがそう言うと、ゾロアークは横に首を動かした。

『いや、飛ばされた』

「……は？」

ボクが驚いて口をポカンとしてみると、ゾロアークが重々しく次の言葉を発した。

『……ミュウってやつ、言いたいことを言い終わったら、テレポーターかけてとばしやがった』

……流石は伝説レベル、やることがハンパない。

『まあ、それだけで会いに行くのは不愉快だったしな』

『で、俺とバトルしたのか』

ボクの背後から声がした。会話を聞かれていたことに驚かず、後ろの主に振り返った。

「狼煙、出たときくらい教えろよ」

『……それぐらい気づけ』

そう言って、フン、と鼻を鳴らした。そしてゾロアークを睨みつけて対面した。いや、凶悪顔はグラエナ故（ゆえ）にだが。

『……お前は、ミュウがコイツのことを言ったことで、また興味が出てきた』

『へえ、お前の相棒さん頭良いんだな』

狼煙が言ったことは当たっていたらしく、ボクの方を見て言った。

『しかも、テレポートされた、腹いせも込めてな』

『あー、あったような無かったような、忘れたな』

ゾロアークは部屋の天井を眺めながら言った。なるほど、腹いせも込めていたってことがコノヤロウ。

『あー、ともかくもだ。このあとどうするんだ？』

『……』

気まずい質問から逃れるためにボクの方を見て話しかけた。おお、狼煙がご立腹顔だ。あまり表情変わってないけど。

「お前が自由お気楽に一人旅したいって言うんなら野生に逃がしてやるけど？　ただ、珍しいポケモン求めて血眼になってるヤツらに捕まってもいいなら」

せっかくなので、精一杯の皮肉を込めて言ってやった。そうすると、ゾロアークの顔がニヤリと笑った。

『そういつジョーク、好きだぜ。いいよ、お前について行く』

と、言うことで、旅の新しい仲間が加わった。

第二十八話 無理易題（後書き）

はい、なんやかんやでゾロアークが仲間になりました！

狼煙『……なんやかんやってなんだよ』

なんやかんやだよ

狼煙『……』

??『まあ、良いじゃねえか』

（さーて、ゾロアークの名前どうするか）

第二十九話 たまには休息を（前書き）

いやあ、１１月となりましたね。そろそろこの小説を書き始めて
１年を迎えます。最初の頃は戸惑っていた

紅蓮『長つたらしい前書きはゴミ箱の中に置いて、本編に行き
ましょうか』

第二十九話 たまには休息を

昨日、ゾロアークの紫嵐（しらん）が手持ちに加わった。本当は「紫蘭」にしようと思ったのだが、「蘭」という字が気に入らなかったため、「嵐」の字にしてみた。

それで今日、ボクたちは何をしているかと言うと……。

「右が藍斗、左が紫嵐だな」

『せいかーい！』

『よく分かるなあ』

ポケモンセンターの部屋で、紫嵐の特性「イリュージョン」による判別クイズをしていた。

他にやることがあるだろうと思うかもしれないが、それがあつさりとは片づいてしまった。

――数時間前

「さてと、次はグレン島なんだけどな」

そう呟きながら、砂浜で海を眺めていた。もちろん砂が靴に入らないようにしているので安心だ。まあ、それよりもだ。次にボクたちはグレン島に行くのだが、生憎「なみのり」を使うことが出来るヤツがいないのだ。それならばリザードンになった紅蓮がいるんだし、空を飛んでグレン島に行けばいいと思っていた。だが、ポケモンに捕まって移動するための法律「携帯獣（ポケモン）飛行法」があるため、無理なのだ。誰だよそんな法律つくったのは。

まあ、ジム戦をしてある程度のジムバッヂを持っていれば法律に触れなくていいんだけどな……。いまから戻るのも億劫である。つか、紅蓮がキレルだろうな。

どうしようかと思い、視線を左にずらした。ふと、一つの看板に目がついた。

「グレン島までの船貸します……？」

行ってみると、良い情報であった。高額ではあったが、ポケモンバトルによる値切りー（相手が水タイプばかりだったため、特に雷華が頑張ってくれた）の末、安くグレン島まで行かせてくれることになった。出発日は明日、早朝と決まった。

……さて、このあとどうするか。買い物には行ってるし、一日暇となった。

——回想終了

『それにしても朝のお前、すげえ必死だったよな』

それはそうだ。あっちから値切りOKを言ってくれたんだし、利用するほか手がないだろ。……つか、イリユージョン解いてから言ってくれ。

「紫嵐、藍斗の姿でその口調はやめてくれ」

『んー、こんな感じー？』

『えー、オレそんな感じじゃないよー！』

ボクの指摘通りに、紫嵐は藍斗らしい口調と声色（こわね）で話

してみた。すると本物である藍斗は再現された口調に、いちゃもんをつけた。

……悪いが藍斗、キミはそういうしゃべり方じゃないか。

『それにしてもコウ、紫嵐とのよく見分けがつかない。全くわかんないぞ』

『そうだそうだ、それが気になってたんだよな』

雷華の言葉を聞いて、藍斗口調だった紫嵐がイリユージョンを解いてボクを見てきた。その藍斗は膨れっ面であるが。

あ、狼煙と紅蓮であるが、朝のバトルの回復中で、いまは部屋にいない。

「……そこは、トレーナーだからということだ」

『んだよ、教えてくれたっていいだろうが』

ぼそぼそ答えてみたのだが、紫嵐は納得せず、腕を組み直して再び聞いてきた。

「いや、答えを知ってどうするのさ」

『あ？ 納得いく答えなら納得するに決まってるだろ』

『ただの興味心だな』

『……オレも、知りたいな』

どういうことだ。話題を軽く振っただけかと思っていたが、雷華も興味心で言ったようだった。さらに藍斗もふくれっ面だったけど聞きたくなったらしい。

「……なんていうんだろうな。いくらボクでも日常とは違う多少の変化には気づけるんだよ」

『文章おかしいぞ』

「うつせえ。とにかくだ、紫嵐はまだ一日しか一緒に居ないじゃないか。特徴を掴んでみんなに化けたとしても、流石にちよつとした変化には気づけるんだよ」

ボクがそう言つと、紫嵐は『ふーん』と言つてから、ベッドにダイブした。まあ、追求してこないつてことは納得してくれたんだな。

『まったく、手持ちのことを考えてる、つて言えば良いじゃないか』
『コウの言いたいことは何となくだけど、分かったよー』

フォローありがとう。

狼煙と紅蓮の回復が終わつたためジョーイさんからボールを受け取り、再び部屋に戻つた。そして開口一番、

『……なんでコイツ、ベッドに横たわつてんだ』
『……別にいいだろー』

ベッドに横たわつてゐる紫嵐を見て、狼煙が呟いた。それは届いてたらしく、振り返らずに返事した。

『ところで明日の船ですが、マスター大丈夫ですか？』
「あ？ どうしてだ？」

何故か紅蓮がボクの心配をしてきた。え、何があつた。

『いえ、マスターって船酔いしそうですし。大丈夫なんですか？』

「大丈夫だ」

それでも車酔いしたことないからな。船も家族旅行で乗ったことがあるが、大丈夫だった。

さてと、明日はグレン島か……。ゲームでは大変なことになっていたが、どうなっていることやら。

ああ、明日が楽しみだ

第二十九話 たまには休息を（後書き）

コウ「なあ、ほのぼの過ぎないか？」

そりゃあ、「ほのぼの」がキーワードになってますからね

コウ「……いやな予感がするんだが」

第三十話 海上（前書き）

はい、とうとう三十話ですよ！

そしてこの小説も書き始めてから一年経ちました……もうそんなに経ちましたか。

まだまだコウたちの旅は続きますので最後までお楽しみくださいませ！

第三十話 海上

晴れ渡った青い空、細波（さざなみ）によって作らされた蒼と白のコントラストが映える海。

そう、ボクたちは船に乗ってグレン島へと向かっている。ゲーム上では「なみのり」をして水道を通っていくがそれは遊泳ポイントであり、船での通り道は、ゲーム上では行けないところを進んでいくようになってる。その海上でボクは、

「……」

『コウー、大丈夫？』

船酔いしていた。

そうだよな、昔乗ったのは自家用車も置けるフェリーであって、よく揺れる小船じゃないもん！　こんなに揺れたら三半規管がおかしくなるよな！

ということ、ボクは藍斗に看病されながら、船の部屋で横たわっていた。外の景色を見て気分を良くしようと思ったが、遊泳ポイントにいる海パンやろうの筋肉が視界に入って、よけい気持ち悪くなるだけだった。ああ、女性の人は全く泳いでいなかったぞ。

『……ひでえ有り様だな』

うつせえ、コノヤロー。そう思って、狼煙にギラリと睨みつけてみた。しかしながらその効果は無かったらしく、あっけらかんとし

た態度をしている。

『いやあ、ここまで揺れる船なんて俺初めて乗ったぜ』

あぐら座りをして船の床に座っている紫嵐がそう言った。彼が言うには、イツシュ地方からカントー地方へ、大型客船の貨物に紛れ込んで来たらしい。もちろんボーイの人たちにバレないよう、イリユージョンを時々使いながら。

「なに無銭乗船してるんだよ」と細々ながらも説いてみたら、『バレない事件は犯罪じゃねえんだよ』と言い返されてしまった。まあ、その通りといや、その通りなだけだな……。

ああ、ちなみに今ボールから出しているのは三体だけである。この小船だからリザードンである紅蓮を出すわけにはいかない。船に乗る前に冗談混じりで「空を飛ぶ練習になるな」と言ったら、『そうですね』とにこやかに、いや、何時もながらの黒い笑みを浮かべて言ってきた。なので、紅蓮はボールの中にいる。雷華は雷華で、こついう時は寝るのに限るとか言って、ボールに戻ってしまった。

「……紫嵐」

『へーへー、旅で聞いた話をしてほしいんだろ』

名前を呼んだだけなのに、紫嵐はボクが何をしてほしいのかが分かっているかのように言ってきた。まあ、その通りなだけだな。

『あー、そうだな。森のはずれで聞いた、生き返ったニヤースの話とかどうだ?』

なんか何処かで聞いたことある都市伝説だな。まあ、それでいいや。そう意味を込めてボクは首を縦へと振った。

紫蘭が一人一（？）旅をしている頃に聞いた話を、思いだしながら話してくれる。彼は癖なのか、話しながら身振り手振りをするのだ。

ボクがそんな紫嵐の話を聞いている時だった。

『！』

「……どうしたんだ？」

一緒に話を聞いていた藍斗が突然立ち上がり、船の外を見た。まだ本調子でないボクはそんな藍斗を見つめた。

『何か、大きいポケモンが暴れてる！』

それを聞くやいなや、狼煙が部屋に備え付けてある窓から外を眺めた。ボクも這いずりながら窓のほうへ移動していたが、突如、船が大きく揺れたため、紫嵐に支えてもらう姿勢になってしまった。

『おい、何でこんなところにギャラドスがいるんだよ』

大きく揺れたことによつてボクたちのほうへ来た狼煙が、海で何が暴れているのか教えてくれた。マジで、なんでこの大海原にギャラドスがいるんだよ！

てか、この船を運転してた兄ちゃんが慌ててる様子がないんだが。

『大変！ おにーさん船からいなくなつてる！』

お客を置いてすでに脱出済みかよ。道理で騒がしく無いわけだな！
まあいい。ボクたちも脱出しなきゃいけない。藍斗と紫嵐に両脇

を支えてもらい、甲板のところまで出てきた。うわっ、揺れが激しい。

体勢を立て直してから、ボールから紅蓮を出した。ボールの中で聞いていたらしくボクに目を合わせると、姿勢を低くしてくれた。

「緊急時だし、違反扱い、されない、よな」
『バレなきやより嬉しいですけどね』

他のみんなをボールに戻してから、ボクは紅蓮の背中に翼の邪魔にならないように乗り、首に手を回した。

『いきますよ!』

紅蓮がそう言うってから数秒後、ボクたちは船から脱出した。全く、こんな形で「そらをとぶ」を経験することになるとはな……。
兎に角、ずっと「空を飛ぶ」でグレン島に進むのはやめた方がいいよな。さっき紅蓮が言ってたようにあまりバレたくないし。そう思い、辺りを見渡すとふたご島が目に入った。よし、彼処だな。

『あの島ですね!』

グレン島がある方向を教えるために、向かってほしい側の紅蓮の身体を軽く叩いた。その行動でふたご島が視界に入ったらしく、紅蓮が方向転換をしてくれた。幸いにもギャラドスはこちらの方は視界に入っていないらしく、だけれども暴れていることには変わりないので海には高波が出来ていた。

にしても、どうしてあのギャラドスは暴れているんだ？ 何かあったのだろうか。

『着陸しますね』

船酔いが覚めた頭の中でそのことを巡らしているうちに、ふたご島へ着くようだ。よし、これ以上被害を出さないためにも雷華の「でんじは」でマヒ状態に……遠すぎて無理か。プロの人たちが来るまで待つしかないな。

そう思っていたやさきだった。ボクの全身が流れに勢いのある水で包まれていた。ま、まさかギャラドスの……。

そして、ボクの目の前は真っ暗となった。言うなれば、気絶した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0506p/>

ポケットモンスター～TのちJ～

2011年11月30日20時50分発行